ればするほど高壓的な態度に出づるので、憤慨して之に對抗するけれども、何分資力に貧しく所謂實力の競爭であるから、これを如何ともすること能はず、いづれも淚を呑んで悲憤するより外は無かつた。

此の有樣を目擊し、且つ直接蹂躙せられた「糸平」と「島清」とは、何とかして彼「繆黙堂」を擊破しなければ邦人商人の將來は實に慘澹たるものがあるといふので、數日謀議を凝し且つ資力を準備して其の時機を待つたのであつた。そして明治七年四五月頃の支那米を筆頭に外國品の輸入著しく、メキシコ弗の需要激增すべきを見越して兩人して弗を買進め、「繆」もまた之に應戰賣進めたのである。そして局は「糸平」と「島清」とは聯合して二百萬圓まで買つたのであるが、「繆」は猶ほ泰然として、之に應戰し、流石の「糸平」も「島清」も敗北の外は無かつた。

爾來「糸平」と「島清」とは、それこそ臥薪嘗膽、あらゆる祕策と謀議を盡して奮戰之に力め、最後には「窪田半兵衞」をして買方の反問者たらしめ、逆手を使つて漸く最後の勝利を占めたのであるが、これがために遂には外交問題ともならんとするの形勢となり、時の神奈川縣令「中島信行」の仲裁によつて漸く無事なることを得たが、これよりして所謂「天下の糸平」として「田中平八」の名漸く高

く、また「島清」こと「今村清之助」の名も亦天下に知れ渡つたのであつた。

三 艱難汝を玉にす

「島清」は此の經驗と生來の太つ腹とを以て明治二十四年に例の江南事件當時の株價の底を見抜き、總買の思惑して一擧に二三百萬圓の巨利を博し、いはゆる我國に於ける株成金の嚆矢をなしたのであつた。

其後、彼が血の出るやうな苦心を嘗めて、最後に勝利を得たのは例の關西鐵道問題であつた。米國の「ジエグールド」が鐵道成金になつた如く、鐵道を以て產をなすことは彼が擧生の事業と心得たものであつた。然るに同鐵道は總山隧道を始め非常に難工事であつて、到底此の鐵道を完成することは困難であらうとは、世間は勿論專門家の間にさへ悲觀されて居た。そこに偶々鐵道事業に曙光を認めてゐた例の鐵道國有問題は、「三井」「三菱」の反對から「中野武營」の議會に於ける國有反對演說となつて現れ、國有論は殆ど影を潛めたのであつた。

斯くて鐵道株は伊勢の「諸戸清六」の寶物から始つて逐日低下し、「關西鐵道株」の如き一時二十五六圓まで叩かれたのであつた。「島清」等は此の寶進みに對抗して買ひ戰つたのであるが、大勢は遂に如何ともすることが出來ず、日一日形勢は惡化し、其の苦痛たるや蓋し一通りや二通りのものでは無かつた。

併し彼は遂に內外交々竝る是等の困難に打克つことが出來た。それは「關西鐵道」の難工事が漸く完成に近づくに共に、明治二十六年五月、果然政府は六分利附公債一千萬圓の現金償還を行つたのであつた。これがために金融界は俄に活氣づき、且つ諸株も一齊に景氣立つて遂に「關西鐵道株」の如きメリ〳〵恢復して一擧に六十八九圓まで騰貴し、增資による新株の如き五十八圓のプレミアムが附くやうになつた。

玆に於て彼が防戰のために二十六七圓で買つた株は四十圓からの利鞘を得た譯であつて、艱難汝を玉にして關西株だけでも彼の利益は何百萬圓と言はれて居た。そして彼は我國の株成金と鐵道成金の最初の一ページを飾つたのであつた。然るに「島清」の名は後年多く傳はらず、たゞ「天下の糸平田中平八」の如き、或は桑名の「諸戸清六」の如き、或は「雨敬」こと「雨宮敬次郎」の如きもの

の名のみが、我國の成金史上に喧しく傳へられて居るのは、「島清」が比較的早く夭逝し且つ其の晩年の稍揮はなかつた爲めであるかも知れぬ。

日清戰爭前後の成金

一 諸株一齊に奔騰

明治二十四年の春から日清戰爭直前の二十六年頃までの財界は、所謂整理時代に入つて經濟界は不振ではあつたが、それでも一步一步整理さるゝと共に、其の內面には健實なる空氣が流れ、鐵道の延長・工業會社の發達・生產能力の增加・輸出貿易の盛況といつたやうな情況であつた。

然るに同二十七年となり、日清の風雲何となく險惡を告げて來たので、株式界は玆に戰爭氣構へとなり諸株一齊に暴落した。しかし七月二十八日、先づ豐島沖の戰ひに我國の勝利を報じ、それに八月一日には愈々宣戰布告となると國民も玆に決心の臍を固めたものか、株式は稍見直し氣味を呈した。それでも豐島沖海戰から宣戰布告までに「炭礦株」は七十一圓四十錢から六十六圓五十錢と五

圓、「東株」は二百二十圓五十錢から百九十四圓と二十六圓五十錢方下落し、更に八月十四日「軍事公債」募集の公布があるや、諸株は引續いて下落し、「炭礦株」は五十八圓二十錢と一擧に八圓三十錢、「郵船」は六十一圓十錢から五十二圓と九圓十錢、「東株」は百七十三圓から百五十九圓と十四圓方、何れも慘落したのであつた。

併し十七日いよ〳〵第一回軍事公債三千萬圓が發行せられるや、國民は發奮したものか諸株は却つて騰貴し、「郵船」の三圓七十錢を始め、「東株」も亦三圓五十錢方騰貴し、兩來引續き戰捷の報來る毎に株式界は活況を呈し、十月十一日金州及び大連灣占領の報が傳はり、更に同月二十四日旅順大捷の快報到るや、主要株式相場は益々〳〵奔騰して、これを開戰直前に比する時は「炭礦株」は八十四圓三十錢と十二圓九十錢、「郵船」は七十七圓五十錢と九圓、「東株」は二百三十七圓五十錢と十七圓方何れも騰貴し、最安値時の「東株」百五十九圓よりは七十八圓五十錢、「炭礦」は二十六圓十錢、「郵船」は二十五圓五十錢方の騰貴を示したのであつた。

更に二十八年四月十七日に平和條約が成立した時には、「炭礦株」は九十四圓五十錢と開戰直前よりは二十四圓三十錢、又「東株」は二百九十六圓と實に十五圓四十錢、「郵船」は八十二圓七十錢と

八十三圓六十錢からの騰貴を示したのであつた。

二　三國干涉と日銀金利引下

また開戰中に於ける一般財界の狀態を見るに、開戰直前である明治二十七年六月、最高時の「日本銀行」正貨準備高は七千九百六十三萬三千圓で、平和克復後の二十八年六月は六千四百八十八萬五千圓と僅に一千五百餘萬圓を減少せるに過ぎず、また兌換券發行高の如きも開戰直前に一億四千百萬圓であつたのが、平和克復直後一億四千三百萬圓である。殊に「日本銀行」の公定割引歩合は當初二錢であつたのを僅に二割引上げて二錢二厘となしたに過ぎず、「東京組合銀行」の金利も最高二錢八厘最低二錢五厘に落着いて殆ど波瀾を起さなかつたのであつた。斯くて戰役中の財界は極めて穩健に推移し、隨つて產業界の打擊の如きも殆ど皆無といつて可かつた。

以上の如き狀態であつた上に愈々平和條約が成立して三億五千萬圓からの償金が取れることゝなつたのであるから、財界は浮かれ出ねばならなかつた。それに毎月拂ひ込んで居た一千二三百萬圓の軍事公債も六月で拂込濟となるといふのであるから、金融緩漫が目前に迫り、財界は一段と活氣

を添へねばならなかつた。然るに平和條約締結後、間もなく例の三國干渉があり、遼東半島は還附しなければならぬと言ふことになつたので、恰も結婚祝賀會の座敷から花嫁を拐はれたやうなもので、折角の市場も恐怖と狼狽とで寧ろ悲慘なる光景を呈した。其上に其の時分霖雨打續いて米作は如何なるだらうか案じられ、こんな筈では無かつたがと考へて見ても如何にもしようがなく、市場は悲觀に充ち滿ちて居たのであるが、しかし如何に悲觀しても財界の根柢は前に述べた通り戰爭の打擊といふものは無いのであるから、これが一寸でも氣を轉換することが出來れば、必ずや活氣を呈すべきは明かな事實であつた。

然るに此時、即ち二十八年の七月に、『日本銀行』は突如として其の公定割引歩合を二厘方引下げたのであつた。しかして市中も又これに追隨して金利の引下げを行つたのは勿論の事であつて、市場は漸く之を以て活氣づいた。『日銀』の此の出し拔けの金利引下は多少其の態度に就いて批難されたやうであつたが、兎に角『日銀』としては財界が不健全なのに金利引下を行つて投機心を煽るといふのならば不謹愼であるかも知れぬが、何分前にも述べた通り財界は十分健實であつて、たゞ三國干渉といふ一時のショックのために竦んで居るのであるから『日銀』金利引下といふ清涼劑で活氣づ

けることも必要なことであつたかも知れぬ。

三　大小成金の簇生

そんな議論は如何でも善いとして、兎に角、財界は活氣づいた。それは活氣づき過ぎる程に活氣づいたのであつた。諸株は一齊に騰貴し、それに伴つて事業熱は愈々旺盛になり就中鐵道事業は素破らしい勢ひを以て發展しかけたのであつた。當時參謀本部の地圖が屢々品切れになるやうに賣れたといふことである。といふのは一寸頭のある者は二三日もかゝつて、甲地から乙地まで線を引いて何々鐵道株式會社と銘打つて出せば、其の株式の權利が五圓も十圓ものプレミアム附で、それこそ翼なくして飛び足なくして走るやうに賣れ、二百萬三百萬の金は朝飯前に儲けたものださうな。眞逆それほどまでは無かつたかも知れぬが、兎に角、當時鐵道熱が熾んであつたことは事實である。そして惹いては鐵道に直接關係ある『炭礦株』や『郵船株』、さては『東株』『鐘紡株』といつたやうな主力株もまた好轉すべきことは當然である。今主力株の騰貴の狀情を示せば左の如くであつた。

（株名）	（拂込）	（二十八年初）	（二十九年最高）
「山陽鐵道」	三〇円	三一、五〇	五八、六〇
「關西鐵道」	四七	四八、〇〇	七五、三〇
「北海炭礦」	五〇	八一、一〇	一〇八、一〇
「日本郵船」	五〇	七六、〇〇	一一一、七〇
「鐘紡」	五〇	四三、六〇	七〇、八〇
「東株」	五〇	二二九、六〇	六二四、〇〇

卽ち『山陽』『關西』兩鐵道を始め『北海炭礦』にせよ、拂込の倍額に騰貴し、『東株』の如きは拂込の十四倍、二十八年一月よりは約三倍の騰貴を示して居るのである。次に事業熱が如何に旺盛であつたかを見れば左の如くである。

（年次）	（社數）	（公稱資本金）	（拂込資本金）
明治二十七年	二、七九二	三二三、九一五千円	二四九、七九二千円
明治二十八年	三、三二二	四一〇、六六一	二八九、〇〇二

明治二十九年　五、九二五　六一九、二二三　三九九、五六四

卽ち二十七年に比し二十九年の增加は、會社數に於て三千百餘、公稱資本金二億九千五百餘萬圓、拂込資本金一億四千七百餘萬圓を增加したのであつた。此外に設立の計畫を樹てゝ未だ成立に至らなかつた所謂泡沫會社の資本金を計算すると、僅この二ケ年間に十二億八千餘萬圓に達したと言はれて居た。

以上のやうな情勢で、株式界も事業界も全く狂熱時代を出現した。橫濱の『蠶絲株』の如きは千二百圓にもなつたと云ふ有樣であつて、殆ど常識では判斷されなかつた。斯くて此の狂熱時代の所產たる大小幾多の成金が、そんじよ其處等に簇生したことは當然であつた。彼の『諸戸清六』『雨宮敬次郎』を始め『本庄伊太郎』『加東德三』等、其他の有象無象の成金は殆ど枚擧に遑ない程であつた。

雨敬と諸戸

一　十五銀行を敵として戰ふ

「雨宮敬次郎」は「天下の糸平」と共に明治初年から其の辣腕を揮ひ、他の有象無象とは大いに趣を異にして居た。殊に彼が「雨敬」の名を天下に轟かしたのは、明治二十四五年、例の「板垣退助」の鐵道國有論に對し、「三井」「三菱」の國有反對論と共に「中野武營」の議會に於ける國有反對演說によつて國有論が影を潛めて以來といふものは、「鐵道株」は一齊に暴落を始め、それに關聯して所謂株式悲觀時代を出現し、殊に鐵道と密接なる關係を有する「炭礦株」の如き恐ろしいやうな勢ひで暴落し始めた。

尤も「北海炭礦」は當時、所謂薩長の權力爭ひといつたやうなものが、こゝに祟つて來たもので、後年宮相となつた「渡邊千秋」が北海道長官となるや「北海炭礦」の社長「堀基」が突然免職となつた。昔は勢力爭ひも隨分露骨にやつたもので、長官が更迭するの更迭のために同株に對する流言蜚語が百出し、果ては之を切つかけに先づ「十五銀行」が大變物を出した。其の處分株は七千株といはれ、しかも此の大玉を一場で賣つたのであるから、市場は大混亂を呈し、立會は夜になつてランプを點けて行はれ、實に慘憺たるものがあつた程であつた。

しかして此の「十五銀行」の大玉賣に對して買に廻つたのが「雨敬」こと「雨宮敬次郎」一派であつた。彼は其の以前に於て既に「十五銀行」が「北海炭礦株」の大玉賣に出づるであらうといふことは豫期して居たので、同志である「糸平」や「加東德三」等と共に密議を凝して「十五」が賣れば買進まうといふことに決して居たのであつた。しかし「十五」が愈々賣向つたので買つて見れば、買つても買つても其後が續き、七千株といふ大玉であつたので流石の「雨敬」も顏色蒼白となり、果は其の後始末を「安田善次郎」に持つて行き、やつと人心地がついたといふ程であつた。

それは兎に角「雨敬」が此時、根限り買つたばつかりに、同年五月政府が果然六分利公債一千萬圓の現金償還を行つたのを切かけに、人氣爆發して諸株一齊に奔騰を續け、「炭礦株」の如き百五圓といふ馬鹿相場を出したので、「雨敬」は一擧にして、三四百萬圓の成金振を發揮し、さきの思ひ切つた買と云ひ、今度の當りと云ひ、「雨敬」の名は忽ち天下に響いたのであつた。

二　快男兒「雨敬」の沒落

それから日清戰爭後の狂熱時代に於ける彼の活躍も、また目覺しいものであつた。恐らく彼の生

況に於て二十四五年と今度の二回とを以て彼の黄金時代と言つても善いであらう。日清戰後の狂熱時代に於ては、『鐵道株』にも『炭礦株』にも縱橫の手腕を揮ひ、市場は彼が無人の野を行くが如き振舞には、たゞ驚異の眼を見張るより外は無かつた。そして彼は此時ばかりでも數百萬を當てたと言はれて居た。併し有爲轉變は人生の常である。況んや虛實の境を超越した株界に於ては、今日の百萬の成金も明日は一文無しの素寒貧となるのが常法であるに於てをやである。「雨敬」は明治二十四五年から日清戰後の前半が彼の絶頂であつた。

それは明治二十七年末から明治二十九年末までの間に新規事業會社の公稱資本金は二億九千萬圓、拂込金一億五千餘萬圓を增加し、一時八百圓、「生絲株」は千二百圓を唱へる好景氣であつたが、何分清國から請取る事になつて居た償金は大部分軍備の擴張に使用せられることに成つて居るのであるから、斯くの如く巨額の新規事業の拂込資金は全部他の資金を以てしなければならぬことゝなつた。斯くて金融市場は此の拂込資金の需要に忙殺され、隨つて金利は騰貴し、また物價も之に伴れて騰貴し、二十七年の平均物價指數は百二十六であつたのが明治二十九年末には百七十と、約三割方も騰貴したのであつた。

斯くて此の直接の影響が株式市場に現れて來ることは自然の勢ひであつて、さしもに旺盛を極めた市場も漸く凋落の徵あり、加ふるに明治二十九年から三十年にかけて內地米不作のために外米の輸入甚しく、さなきだに新事業による機械・軌道等の輸入增加のために貿易關係は逆調を呈して居たものが、これがために益々逆調の程度を甚しくならしめ、國際貸借關係は多額の支拂勘定となり、財界は玆に愈々惡化して三十一年四五月頃には東京の市中割引歩合は三錢二厘の高値を出し、整理公債相場の如き九十圓以下に崩落したのであつた。

時恰も株式界では、『炭礦株』の買占に一時は素破らしい勢ひを見せた「本庄伊太郎」外六名の仲買人が三十一年三月に『炭礦株』外十一種の同月限り賣買不履行となつたので違約處分となり、これが整理のために市場は十數日間閉鎖の止むなきに至つた。爾來人氣は萎微し、一日の取引高は僅々一千八百株位に過ぎず、且つ銀行は日に增し警戒を嚴にした。

そして此時であつた、株界の一角に「雨敬」破產の風說が傳はつたのは。事實「雨敬」もまた「本庄」と同樣に『炭礦株』の崩落其他持株が崩れ始め、しかも之が處分に手違ひを生じたために彼の身邊には既に陰影漲り、往年の黄金時代は早くも崩壞の跡歷然たるものがあつた。斯くて彼は最早自己の

身邊を自己の力のみでは拾收することが出來ないやうになり、急を「安田善次郎」に告げて自己の所有する一切の有價證券と不動產とを提供し、辛うじて「安田」の援助により負債の償却をなしたのであるが、しかも之が「雨敬」としての最後であつて、爾來彼は大いに挽回のために奮戰するところあつたが、遂に往年の意氣なく、所謂成金の沒落を、まざ〳〵と如實に現したのであつた。

三　堅實なりし諸戸清六

伊勢桑名の「諸戸清六」もまた神風吹く邊りから起つて、よく當時に於ける株式界の雄を爲して居たのであつた。尤も彼の起つたのは米の思惑から（當時は誰でもさうであつたが）始つたのであつた。しかも所謂『東京商社』が出來、それから會社熱の勃興となり、株式が思惑の中心となるや彼は「田中平八」や「雨敬」と時には相對抗し、時には連衡して大いに活躍したものである。殊に『關西鐵道株』で「島清」と爭つた如き彼の最も花々しきものがあつたのであるが、後年これ等の株式が一齊に爆發した時には相當な手傷を負うたやうであつた。

要するに彼は「糸平」の如く株界に通曉せず、「雨敬」の如く豪膽で無かつたために、眞に乾坤一擲

の大芝居を打つの勇氣なく、比較的堅實にやつて居たやうであるから大きな失敗も無かつたかも知れぬが、また「雨敬」のそれの如く華々しさも無かつたやうである。

甲州系の成金

一　若尾逸平をめぐる一群

「若尾逸平」を玆に拉して以て成金沒落史の一端となさんとすることは、所謂『甲州系』と稱する若尾門徒から見れば、明かに是れ冒瀆の罪に値すと憤慨するかも知れぬが、彼「逸平」とても亦橫濱時代に於ては一の思惑成金に過ぎなかつたのであるから、或は沒落史中の一人で無いかも知れぬが、成金史中の一人であることは明かな事實であつて、それは今日天下の富豪と稱する「大倉」にせよ、或は「安田」にせよ、これ亦一種の成金史中の一人であるといふと同樣である。

「若尾逸平」が甲州人であることは說明するほど野暮の骨頂である。併し彼を圍繞して所謂財界の甲州系を作るまでには、相當の說明を要するかも知れぬ。彼の周圍には曰く「根津嘉一郎」あり、曰

く「小野金六」「佐竹作太郎」あり。皆これ鐵中の錚々たる者である。しかも是に對する「逸平」の勢力は絶對無限にして、彼の一擧手一投足は直ちに彼等の死活となり、そして財界の一大波瀾となるのである。

世には所謂「長州系」「薩州系」と政治的意味の地方的系統はあるが、未だ嘗て「甲州系」を外にしては財界に斯くの如き系統を見ないのである。しかして今に至るも此の「甲州系」は中央實業界に於て隱然「三井」「三菱」と相拮抗して居るのである。故に信玄を生んだ甲州では、寧ろ「逸平」を以て「信玄」より重しとなし、「信玄」は單なる甲州の「逸平」に過ぎなかつたが、「逸平」は甲州の「逸平」のみならず、廣く中央實業界の「逸平」であるといふのである。

斯くの如く彼が財界に大勢力を爲すに至つたのは、日清戰役直前に、よく乘じ得たがためであつた。それは日清兩國の風雲が漸く急ならんとし、銀價は暴騰し、財界の一角には何事か起らねば止まぬ時であつた。加ふるに此の戰爭氣構へは生絲相場は空前の激落を告げたのであつた。此時、「逸平」は橫濱にありて徐ろに大勢の歸趨を考察してゐたのであるが、遂に見るところあつて、生絲の買占を斷行したのであつた。先づ「小池國三」を急派して上州・武州方面の生絲を殆

ど全部買附けたのであるが、此の先見の明は見事に適中して、明治二十七年十一月には生絲相場は大暴騰をなし、彼の產は之を以て數々大をなし、彼が後年「東京電燈」を占領するの素地を作つたのであつた。

尤も彼が此の生絲によつて產をなす以前に於て、「絲平」等と共に「金穀相場會所」に立籠つて、弗々思惑によつて彼の素地を作つた事、橫濱に於ける彼の苦鬪の跡は、餘りに明かな世間周知の事實と謂はなければならぬ。

二 「小池國三」と「佐竹作太郎」

「甲州系」の大親分「若尾逸平」は生絲成金として以上のやうに鮮かなものがあつたが、其の門下に在つては其の小僧より出た株成金の「小池國三」あり、或は「若尾」の機關銀行の行員から出でて「東京馬車株」で成金になつた「佐竹作太郎」あり、或は會社の製造を以て一生を終つた「小野金六」があつた。

「小池國三」が株屋であつて、晩年銀行屋になり、三轉して「瓦斯會社」社長になつたことは誰でも

あ知つて居り、そして如何に銀行頭取となり、瓦斯會社々長となつても昔とつて杵柄だけは忘れなかつたことも、また餘りに周知の事實である。

彼は「若尾家」にあること十七年であつたが、日清戰爭後、事業界が活躍し、株式界の熱狂は水素破らしきものあり、猫も杓子も株に手を出せば一夜にして巨萬の富を摑むといふ有樣であつたから株式界こそは男子が將來財界に立つの素地を作るところなりとし、小僧生活に逆戻りして「小布施商店」に入り、其後「若尾」の後援によつて獨立して、「山一」なる店を開き、それからといふものは時に大手を張つて巨利を博した事もあれば、また慘澹として敗れたこともあつた。しかし兎に角「神田鎌藏」「福島浪藏」と共に斯界に於ける有數なる株成金として知られ、後「小池」は「神田」と同じやうに銀行を組織して、國債市場・社債市場と比較的健實な、そして賢明な態度に出でたから、遂に彼の晩年は單なる株成金として終らなかつたのである。

「佐竹作太郎」は「小池國三」よりずつと先輩であり、昔では「若尾」を代表して立つた程の男である。彼はもと「男爵藤村紫朗」(現「義郎」の父)の玄關番となり、それから若尾系の「山梨第十國立銀行」に入つたもので、生國は京都ではあり、甲州系としては傍系に屬するものであるが、しかし甲州系の實

權を握つて居た點からすれば「若尾」の最も有力なる直系であつた。彼が成金になつたのは、其の「第十銀行」の時であつて、恰も日清兩國が戰端を開き、一時株式は大暴落を演じたのであるが、これがために其の「第十國立銀行」が擔保に取つて居たもの〻大部分は「東京馬車鐵道株」であつた。此の鐵道株が諸株の暴落に伴れ、また大暴落を演じたために銀行は破產に瀕するの有樣であつた。玆に於て彼は株式市場が遠からず活況を呈すべきを見越し、殆ど全部の「馬車鐵道株」の買占を行つたのであつた。

然るに此の思惑は見事に成功して、日清の戰雲は一ケ年を以て終熄し、且つ我國は二億圓からの償金を取り、株界は再び活躍を始め、さきの「馬車鐵道株」は一大飛躍をなし、それがために彼は二十萬圓からの利益を得たのであつた。そして彼の運命は愈々これよりして開拓せられたのであつた。

日露戰役前後

一 慘澹たる明治三十三四年の財界破綻

明治三十三四年の財界の破綻、金融界の混亂は實に慘澹たるものがあつた。其時關西地方に於ける銀行の破綻は大阪市の十行を始め四國、九州を通じて總計三十四五行に及んだ。（詳細は後章『銀行會社破綻史』を見よ）しかし翌三十五年に經濟界も漸く內部の惡膿を一掃した形で、漸く平靜に歸し、殊に同年二月十二日、日英同盟條約が締結せられるや、市場は一時狂氣して一日六萬四千株の出來高を見せた程であつた。しかし其後に例の打壞令の公布等あり、財界は依然萎微沈衰の狀態を續けた。

しかして明治三十七年、日露の風雲いよ〳〵險惡となるや、株式市場の如きも亦これに連れて早くも殺氣漲り、新年の發會劈頭、『炭礦』『郵船』は十圓安『東株』は二十圓安といつた有樣であつた。爾來株式市場は大混亂を呈し、『郵船』は五十八圓、『東株』百二十圓と取引所創立以來の空前絕後の相場を見せたのである。然るに人氣は不思議なもので、日清戰爭當時も斯うであつたが、いよ〳〵開戰と決し殊に二月九日仁川沖の海戰の捷報到るや、果然人氣恢復といつたやうな有樣であつた。それから三十七年の二月六日の國交斷絕から三十八年の九月一日の休戰條約成立までの間に一弛一張はあつたが、大體に於て株式界は順調に趨移し『郵船株』の如き開戰直前である二月一日の六十七

圓九十錢から、三十八年の九月一日の休戰條約成立日には九十四圓四十錢と二十六圓五十錢、『鐘紡』は三十一圓五十錢から七十九圓に四十七圓五十錢、『東株』は百四十一圓九十五錢から百九十二圓と五十圓方、何れも騰貴して居るのである。

二　日露戰役中の財界

次に戰爭中の財界の狀勢を見るに、內債に次ぐに外債を發行し、また臨時戰時稅を起し此間『日本銀行』は金利を引上げたのであるが、兎に角、開戰から休戰までの軍資金の支拂額は十億一千四百萬圓で、公債發行額は四億三千萬圓であつた。しかして『日本銀行』の兌換券發行額は開戰直前の二千三百萬圓から休戰直後は實に二億六千二百萬圓に激增し、且又其の公定割引步合は一錢七厘から二錢三厘に引上げられて居たのであつた。

卽ち株式市場こそ開戰前の不況時代から却つて戰時中は活況を呈したのであるが、其他の一般の財界の情勢は公債の激增・兌換券の增發・日銀金利の騰貴、竝に輸出入貿易の逆調といつたやうに財界は非常な打擊を蒙つたのであつた。そして日露戰後の財界は戰時中の傷痍に惱まされ、相當期

間の不景氣の苦難は當然體驗しなければならぬ運命にあつたのである。

日露戰後の成金

一 熱狂亂舞の大景氣

極端な不景氣の反動として、往々にして極端な空景氣を誘因し、それがまた恐慌の因をなす事は、曾に我國のみならず、各國の恐慌史が如實に語つて居るところである。（「パニック」百五十頁參照）そしてまた此間に所謂成金なるものが簇生し、且つ凋落することは今日まで幾度となく繰返された事であつた。

日露戰後の財界は、たとひ戰捷國になつても其の傷痍は容易に癒えず、償金も棒太領有も財界に大した影響なく、それで「日銀」は三十九年の三月と五月との兩度に亙り、金利の引下を行つたが、それも殆ど效果なく、更に進んで鐵道國有問題の實現、「東京電車」「東京電氣」「東京市街」三社の合併が行れても、市場には何等好材料とはならなかつた。それほど戰爭が財界に及ぼした創痍は深

刻なものであつたが、而も此の苦痛は到底永く堪へらるべきものでは無かつた。何等かの機會を得ば、死せるが如き休火山は轟然として爆發すべき氣勢があつた。而して二回に亙る金利下引や、鐵道國有やは隱然其の爆發すべき因を與へ、それに三十九年以降四十年に至る間に國庫債券の償還せられた額は二億圓に達し、また三十八年以降民間へ流入した外資は東京市債を始め六億四千餘萬圓に達し、政府が前後六回に亙り募集した外債は又實に十二億七千餘萬圓に達したのであつた。

期くて曩日の不景氣に反撥すべき機は充分に熟し、そして其の導因は先づ「鐘紡株」に依つて切られたのであつた。戰時中二十七圓まで唱へ、戰爭直後は辛うじて六十圓臺を維持して居たものが、今や急激に買ひ煽られ、それに增資といふ鳴物まで入つて一擧に三百圓の高價を唱へるやうになつたのであつた。財界は玆に蘇つた。勿論それが狂的なものであるとか病的なものであるとかを問ふ遑が無い。たゞ財界は蘇生したのであつた。そして人々は熱狂し亂舞し事業の性質・配當の有無・拂込の有無を顧みる事なく、亂醉者が酒を煽るやうにして事業は計畫され、プレミアムは附せられたのであつた。そして此時、「東株」も「日銀」も此の闇雲者に捲き込まれて、遂に其の資本金を十倍に增資するが如き狂態を演じたのである。蓋し斯かる財界の亂舞

場より成金が若し族生しなければ、それこそ奇とすべきものであつて、深川邊の手代某は二十圓の貯蓄債券で、『鐘紡株』を買つて數萬圓を利し、ある待合の女將が『東株』で一躍十萬近くの巨利を博し、學者・軍人・官吏・醫者・學生と社會の有らゆる階級の人々は洽然として株式熱に浮かされたのであつた。

それはあの大正十二年九月一日に帝都を舐め盡した惡魔の焰よりも速かに日本國中の津々浦々にまで傳播し、其の流した害毒は物質的にも恐らく震災のそれよりも甚しかつたかも知れぬ。金と女とに絡る有らゆる罪惡、——それは夜となく晝となく都鄙を通じて行はれ、質朴な農村や純眞な青年子女の心は、これがためにどれだけ傷つけられたか知れなかつた。

二　成金亂舞時代の解剖

明治四十年一月頃の狂熱時代・成金亂舞時代が如何に好景氣であつたかを見るためには、日露戰役直前と此の狂熱時代との主力株の相場を比較すれば、すぐ分ることである。

（四十年一月平均）　（比　較）

「郵　船」	六七、九〇	（高）	一三四、二〇
「鐘　紡」	三一、五〇	（高）二四二、五〇	二七四、〇〇
「東　株」	一四一、九五	（高）四九五、五五	六三七、五〇

卽ち『郵船』は二倍、『鐘紡』は約八倍、『東株』は約三倍半を騰貴して居る譯であつて、これ故にこそ成金の亂舞も亦無理からぬかも知れぬ。

株式界が斯くの如くであるから、これに伴うて勢ひ新事業の勃興・現在の事業の擴張といふものは、また素破らしきものがあつた。そして又これがために當時の人氣が權利株に如何に熱狂したかは、實に狂氣の沙汰と見るより外は無かつた。今新事業勃興の趨勢を擧ぐれば、

	（既　設）	（合　計）
明治三十八年（下半期）	六一、五一四	一五〇、九四三
明治三十九年中	七八一、一〇三	一、〇〇一、五六七
明治四十年（上半期）	三七三、九七一	五三五、七九四
明治四十年（下半期）	八四、一二〇	一三八、九八二

明治四十一年（上五ヶ月）　三三、一四八　二九、五〇五　六二、六五三

計　一、三三三、八五六　五五六、〇九三　一、八八九、六四九

即ち三十八年上半期以來、新設事業會社の資本金總額十三億三千三百萬圓、既設擴張五億五千六百萬圓、合計十八億八千九百萬圓の巨額に達したのであつた。しかして此の巨額の新資本の放下された事業の内譯を見れば左の通りである。

	（新設）		（既設）		（合計）	
「製造工業」	六五一、〇三四	千圓	二三九、七二七	千圓	八〇九、七六二	千圓
「銀行」	五七、六四〇		一〇二、五三二		一六〇、一七二	
「運輸」	三九二、八〇四		一三四、三六九		五二七、一七三	
「商業其他」	二三二、三七八		七九、四六三		三一一、八四一	

成金の沒落

一　亂舞者の妄想裏切らる

斯くの如く膨脹し切つた事業界と株式界！　それは膨脹すべきクライマックスに達したものであつた。殊にそれが採算を無視した賣買・不眞面目な增資・亂暴なる計畫なるもの、上に築かれたものであるから、此の財界が所詮は蟻の穴からも大崩壞は免るべからざるものであつた。

四十年一月中旬の場面は狂熱益々高まり、「三井」「三菱」を始め實株筋は續々として賣繋がれたるに拘らず、市場は此の警戒にも一瞥の注意を注ぐことなく、買物は潮の如く殺到し、雲の如く密集して、果は「東株」は千圓、「郵船株」は百七八十圓、「鐘紡株」は三百五六十圓臺は目前に迫り居るかの觀があつた。

然るに果然それは亂舞者の妄想に過ぎなかつた。一月十八日に冴えなかつた場面は、休日を越して益々崩れ立つた。しかし一般の亂舞者は、それが何の故であるかを知らず、依然たる亂舞を續けて居たのであるが、心あるものは早くも之を察知して居たのであつた。しかも連日の場面は爾來暴落に次ぐに暴落を以てし、僅々一年前に千圓の金に困つた者で、「京濱」「鐘紡」「東株」と思惑して百萬圓を儲けた某が一朝瓦落の追撃に三十餘萬圓の現金を支出し、再度の瓦落に有金全部を浚はれた者や、一時は百四五十萬からの成金に成り濟まし、株の思惑をしない者は馬鹿のやうに見えてな

らなかつたのが「郵船株」の下落で身投したのや、死屍累々、目も當てられぬ慘狀を呈した。

殊に瓦落の後の最も難澁なる問題とせられたのは、「鈴久」對「酒井」の「鐘紡株」の解合問題と砂糖商の破綻、及び「百三十八銀行」の取付騷ぎであつた。斯くして場面は一層惡化して「鈴久」一味は全滅の姿となつた。

二　成金全盛から成金沒落への大轉換

明治四十年一月十八日を基點として成金全盛時代より成金沒落期に大轉換したのであるが、此の暴風雨の跡は財界の全體に亙り實に痛ましき傷痍を殘し、銀行の如き日清戰役後のパニックと同樣、今回もまた東京・名古屋・九州地方を通じて破綻したものは三十五六行に及んだのであつた。

爾來六月頃を一期として財界は漸く沈靜に向ひ、此の調子では漸次堅實味を加へて行くだらうと思はれたのであるが、其後九月に入り、彼の函館の大火災あり、各保險會社は狂熱時代から慘落時代にかけての傷手に、また此の大傷手であるから見るも慘澹たる境遇に立ち、所謂泣顏に蜂の觀を呈したのであつた。それから又引續いて關東一帶には半ケ月にも亙り霖雨熄まず、水害各地に起り、甲府地方では小海嘯が起るといふ有樣であつた。それから生絲の賣行不振のため對外貿易の逆調甚しきを加へた上に、「日本銀行」は公定割引歩合を二厘方引上げて二錢二厘とし、市中銀行の警戒も益々嚴重となつた。斯くして財界は愈々冬眠時に入つたかの感あり、轉た寂寥の感を深からしめたのである。

今試みに熱狂時代の直前である一月十八日と沒落時代のドン底との間に、主力株がどれだけ暴落したかを見れば左の如くであつて、以て成金輩が如何に慘澹たる打擊を受けたかを察知することが出來ると思ふ。

	（一月十八日）	（比較安）
「炭礦株」	一七二、一〇	六〇、八〇
「京濱株」	一五三、九〇	五五、四〇
「濱電鐵」	一九〇、〇〇	一四八、〇〇
「郵船株」	一五二、二〇	五七、六〇
「富士瓦斯」	二四一、五〇	一三二、五〇
「炭礦株」	（四月二日）	
「京濱株」	一一二、〇〇	
「濱電鐵」	九八、五〇	
「郵船株」	五二、〇〇	
「富士瓦斯」	九四、六〇	
	一〇八、〇〇	

「鐘紡株」	二九八、〇〇	一五四、〇〇	一四四、〇〇
「東株」	七八〇、〇〇	三一五、五〇	四六四、五〇
「同新」	七七五、〇〇	三〇五、〇〇	四七〇、〇〇

即ち「東株」は二ケ月半經たない間に四百六十四圓から暴落し、「鐘紡」もまた百四十四圓と落ち、何の株を見ても熱狂時代の半額以下に慘落したのであつた。斯くて成金の沒落の悲慘なる程度も窺ひ知れる譯である。殊に當時成金の隨一といはれてた「鈴久」の熱狂的全盛も亦さることながら、其の沒落後の慘澹たる樣も亦名狀すべからざるものがあつた。

「鈴久」の成金振り

一下劣なる品性の發揮

當時成金の隨一「鈴久」こと「鈴木久五郎」が三百萬乃至五百萬から巨利を博したのも勿論此時であり、又あの野放圖もない馬鹿げた、そして下劣な遊びをしたのも此時であつた。「鈴久」が、彼の「紀

文」と共に我國成金史の隨一と云はれるのは、此の馬鹿げた浪費者といふ意味であつて、必ずしも儲けた其の金高から割り出したものではない。金高から云へば歐洲大戰後の成金時代には三百萬、五百萬の巨利を攫んだ者はザラにあつたのである。

彼は芳町から新橋にかけて其日々々馬鹿げた遊びの有りつたけをした。時には集つた藝者に千圓の札束をチヤンケンで別けてやるのは未だしも、或時は友人知己を待合に招待し丸裸の藝者に配膳をさせたといふ程に、下劣野卑な遊び方を到る處で繰返して居たのであつた。此點に於ては彼の「紀文」は未だましであつた。「紀文」には兎に角、「其角」「朝湖」といつた俳人・畫家がついて居たし、其の遊びにしても、例へば江戸中の初鰹を總仕舞にして、其內の一本を大巴屋で舌鼓を打つたのや、「奈良茂」の雪見の邪魔をするために、三百兩の蒔金をして廓の雪を汚した位で、幾分上品なところがあつた。同じ成金で、同じ馬鹿げた遊びをしても、「鈴久」は「紀文」とは比べもならぬ下々の下の部であつた。

二槿花一朝の夢

彼は武州粕壁の産で、曾て『早稲田専門學校』の門も一二年は潜つた事もあり、當時日本橋小網町にあつた長兄「兵左衛門」の『鈴木銀行支店』に支配人をして居た。時恰も「三浦逸平」の指金で『鐘紡株』が機大いに乗ずべきを知り、三十九年の七月頃から買に廻つて居た彼は、四十年一月中旬『東株』七百八十圓、『鐘紡』三百二三十圓といふ狂熱相場に、一擧に二三百萬圓の巨利を博したのであつて、これが彼をして成金の名を成さしめた所以である。

ところがマンモスの神は飽くまで浮氣で、一人の男から他の男に絶えず轉々して居るものだ。市場は今や熱狂そのものと化し、人心また極度に逆上して『東株』の千圓、『鐘紡』の三百五六十圓、「郵船」の百七八十圓の相場は既に目前に展開さるべく期待されて居た時も時、四十年一月十八日諸株何となく難色ありと思はれて居たが、果然休日明けの二十日には何れも一齊に崩れ立ち、それからといふものは土崩瓦解、遂に暴落に次ぐに暴落を以てし、昨日までの大小成金の影は今は何處、九十の春光將に盡きんとして落花狼藉たるの觀があつた。

斯くて成金「鈴久」の榮華の夢も醒め果て、更に「鈴木」對「酒井」の持株肩替り問題が不成立となり、其の打撃は一層深刻なものがあり、仲買よりは追敷金を要求され、銀行からは頭金の追徴頗る急なるものあり、折も折とて粕壁の銀行には預金の取付が始まるといふ慘澹たる苦境に陷沒し、三百萬圓・五百萬圓の成金時代は槿花一朝の夢と消え失せたのであつた。

「鈴久」は其後一時行方不明と稱せられ、世人は彼が榮華時代の豪奢不遜を嫉み、且つ憎んで居たばけに、彼の其時の凋落に對し、反動的に此上もなき侮蔑と嘲笑とを浴せかけて居たのであつた。

而し人の噂も七十五日、其後彼は大森附近に世を忍び人の運命の果敢なき中にも煙火線香のやうに何時かは又輝く秋を夢みて居る。そして昔の夢を未だ忘れられぬか、時折、兜町附近を彷徨いて居るやうであるが、それも最近では曩の特權階級內閣の首相、「清浦奎吾」子の御曹子の株式のお指南役を承つて居るといふ事である。

大小成金の沒落

一聞くも悲慘な劇的シーン

四十年一月に端を發したガラは以上の如く「鈴久」の沒落を大きな伴侶とした外に、大小幾多の成

金を沒落せしめて元の本阿彌に還元せしめた。仲買店の小僧は矢張り元の酒屋の丁稚となつて裏長屋の內儀さんの御用を聞き、其他學者も、軍人も、僧侶も、新聞記者も、役者も、藝者も、皆一列に元の古巢に還つたのであつたが、たゞ其時の貧乏の苦痛の程度は一寸でも成金といふ甘い夢を見ただけに一層深刻に感ぜられたことであつたらう。殊に株式の瓦落と共に背負つた追敷が最後までもくつ付いて來たのは更に彼等を惱ますことの甚しいものがあつたであらう。そして其の爲めに聞くも悲慘な劇的シーンが到る處に展開されたのであつた。

二 自殺した平沼と片野

中にも最も悲しい結果を見たのは「平沼延次郎」と「片野重久」との最後であつた。「平沼」も「片野」も「馬場金助」の手を通して株式に手を出したのであつたが、しかも「馬場」は一賣卜者の言を信じ、「石井株式店」の不始末、綿絲布の暴落、「小栗銀行」の支拂停止、名古屋地方の二三流銀行の取付騷ぎ、「富士瓦斯」七十八圓、「鐘紡」百圓の慘落があつたにも拘らず、彼は自分が支配して居る「橫濱銀行」の資金を以て「炭礦株」の買思惑を繼續したのであつた。しかも二百五十圓の高値を思惑した「炭礦株」は九十圓に落ちたのであるから、彼の頭迷なる迷信も今は覺めざらんとするも得ない譯であつた。彼は遂に刀折れ矢盡きた。一時彼も二百餘萬圓からの大成金となり、「鈴久」と共に爛に成金氣分を發揮したのであつたが、何れもこれも昔の夢であつた。

「馬場」の此の沒落は「馬場」自身としては自分が蒔き且つ自分で刈り取つたものとして諦めもしようが、諦められぬのは「馬場」の尻馬に乘つた「平沼」と「片野」であつた。此の二人も「馬場」に劣らぬ、否、馬場以上に悲慘なる敗衂を嘗めたのであつた。そして「平沼」は可哀さうに、とう〳〵「耶馬溪」の深淵に投じて無慘な最後を遂げた。「片野」もまた「平沼」と殆ど同じ運命の下に首を縊つて死んだ。これがまさに成金の末路である。何と悲慘ではないか。

全國に同じ途を辿つた人は幾人と知れなかつた。そればかりでなく、一人の成金になつたがために、そして其の沒落したがために、親は子に別れ、子は親に別れ、妻は夫に見放された。是等の家庭的悲劇は隨處に行はれたのであつた。

切拔けた成金

一　天下の大富豪と策士の小泉策太郎

瓦落の期間は一月十八日から六月下旬まで、まる半ケ年繼續した。此間小成金の沒落無數、銀行の支拂を停止せるものは東京附近に於ては『百三十八』『扶桑』『東西』『信濃』『貯蓄』『永代』の五銀行、名古屋は『小栗銀行』を始め五行、九州地方は『中津共立銀行』を始め四行であつたが、此外に一時取付に遭つたのは東京附近にあつては『淺草銀行』を始め九行、名古屋方面では『名古屋銀行』を始め十行であつた。銀行の此の影響を以てしても當時の株式市場の混亂推して知るべきであるが、此間に處して一般の成金の轍を踏まず、よく最後まで切抜け得た者も多少はあつたのであつた。それは、あの暴騰時代に大體の山を見越して買玉の處分に出た『三井』『三菱』『安田』『大倉』『澁澤』『住友』『島津』『前田』の諸富豪を始め、政友會の策士、否、天下の策士を以て任ずる「小泉策太郎」の如きがそれだ。彼は此の熱狂時代に乘じて五十萬乃至百萬近くの成金となつた。しかし彼は所謂策士であるだけに、そんじよ其處等の小人共とは聊か趣を異にして居た。卽ち彼は他の成金共のやうに、株は何處までも天井知らずに騰るものだと有頂天になる程の馬鹿では勿論なかつた。彼は

他の成金が飽くことを知らぬ貪慾を笑つて大體の處で玉の處分竇をしてしまつたのであつた。蓋し策士を以て任ずる程の男に、これ位の事は當然のことであるかも知れぬ。それで兎も角も彼は最後の總勘定に於て少くも四五十萬圓は取止めたらうと言はれて居つた。次に、一度は代議士になつた事もあり、日比谷燒打事件で眞先に立つて交番の燒打をした「細野次郎」の如きも、當時成金の一人であり、そして瓦落は餘り喰はなかつた方である。

二　松辰將軍と半田庸太郎

此外に「松辰」こと「松村辰次郎」が居る。彼は堂島で小手調べをして上京し、始めは蠣殼町に居たのであつたが、三十九年九月頃からの兜町の景氣に引き込まれ、一時「松辰將軍」の名を擅にし、一擧百萬の財を攫取した事もあり、「鈴久」の如き一時顏色なき程で、五十萬圓を割いて慈善事業に投じた程に佛心のある男であつたが、其後「大澤幸次郎」に裏を掻かれ一敗地に塗れたのは悲慘であつた。

又彼の「半田庸太郎」の如きも當時成金十指の中に入れられ、二本榎の高莊なる邸宅の如きも其の

當時に「大久保利和」から買受け、一時王侯のやうな生活もやつて見たが、矢張り彼は一介の成金に過ぎず、間もなく沒落した。併し流石に此の邸宅だけは人手に渡さず、今猶そこに住んで往年の夢を見て居るが、彼の番頭であつた「遠山芳三」のみは先年の震災にも如何やら餘命を保つて復興すべく活動して居るのを、せめても彼の心遣りとして居る。

大正の成金

一 歐洲戰爭と黃金の洪水時代

我國の經濟界は大正三年から大正七年の歐洲大戰が終末を告ぐるまでは逐年好況を告げ、大戰後は一時屏息の狀態であつたが、更に八年には一躍して活況を添へ、景氣の絕頂に達したのであつたが、大正九年三月十五日を轉機として急加速力を以て慘落したのであつた。しかして此間に成金全盛時代が出現し、そして又我國成金沒落史の主要なる役目をなしたのであつた。

卽ち歐洲大戰開始直後である大正三年の我國の經濟界は一時中止の姿であつたのが、四年の五六

月頃から軍需品の需要が聯合國から起つて來たので、我が經濟界も玆に於て漸く活氣づき、大正四年から七年までの四ケ年間に我國の輸出は五十四億圓・輸入四十億圓、差引十四億圓が我國の受取勘定となり、此外に船舶界の活躍・保險料の激增等により貿易外の受取勘定も十四億圓からに達し、合計二十八億圓からの受取勘定となつたのであつた。卽ち二十八億圓の金が我國に入つて來た譯であつて、いはゆる我國は其時まで夢にでも見ることの出來なかつた黃金の洪水に出遇つたのであつた。斯樣な有樣であるから、國民の誰も彼もが有頂天となり、成金氣分の橫溢するのは寧ろ當然であつたかも知れなかつた。

兎に角、我國には二十八億圓の金が洪水のやうに注入し、これが我國經濟界の原動力となつて活躍したのであるから、此間に商工業の發展・活躍が如何であつたかといふことは敢て說明するまでもないことである。殊に戰爭のために輸入が杜絕し、止むを得ず國內で自給策を講じなければならなくなつた鐵・化學工業・或は染料等の製造業は非常な勢ひを以て勃興して來たのであつた。從つて其他の事業も急速の發達をなし、工場の增設・擴張・職工の增加・株主配當の增加・賃金の騰貴・國內消費力の旺盛といつたやうに、何も彼も活氣づいた。

軍需品の輸送、聯合國に對する船舶の供給のために、海運界は一躍して百六十萬噸から二百四十萬噸に激增し、化學工業は戰前の資本金一千萬圓から三億五千萬圓に、また製鐵事業は銑鐵は二十四萬噸から六十九萬噸に、鋼材は二十五萬噸から五十三萬噸に增加したのであつた。斯くて戰前に於ける一ケ年の企業資本金は僅に二億圓に過ぎなかつたものが、大正七年には二十億圓となつたのである。

其外意外なことには從來我國は借金國であつて、毎年外國で借金こそすれ、金を貸すやうなことがあるとは誰しも考へて居なかつた。それが戰時中に英國の公債一億八千萬圓を始め佛國公債一億二千六百萬圓、露國の公債一億五千三百萬圓、合計四億五千九百萬圓といふ大金を引受け融通したことである。戰爭中我國の經濟界は斯くの如く膨脹し、發展したのであるが、大正七年十一月に至り五ケ年の長年月に亙つた世界の大戰爭も遂に終熄したのであつた。

二　戰爭終熄と空景氣の祟り

こゝに於て我國の經濟界が之がために激變することは自然の勢ひであると言はなければならぬ。

それは我國の經濟界が戰爭によつて發展し膨脹したのであるから、此の大戰爭の終熄に伴れて又發展が停止し、膨脹の停止若くは萎縮することは自然の理である。六十倍乃至七十倍に騰貴した化學工業藥品乃至染料は獨逸からの輸入見越で忽ちに激落を演じた。戰時中一番高かつた銑鐵の如きも五百五十圓から百二十圓に激落した。銅も最高値の百七十圓から三十五圓まで下つた。又船の傭船料は大型一噸四十七圓もしたものが、大正八年三月には、たつた九圓に下り小型二十八圓が七圓に下つた。綿糸が一梱四百五十圓であつたのが三百圓に下つたのである。

ところで大正八年六月頃までの世界の大勢を見ると、成程戰爭は終熄はしたけれども戰後の整理は何時緒につくか殆ど見當つかず、戰爭中と何等變らない狀態であつたから、こゝに戰爭終熄で悲觀した滯中も又急に樂觀し出し、財界は再び轉換して八年六月以降九年の三月まで、いはゆる我國財界の空景氣時代を出現したのであつた。そして投機思惑が都鄙を通じて滔々として漲り、それは日露戰爭後の投機熱の比では無かつた。しかも此の投機熱は海外にまで及ぼし、日本の「製糖會社」がジヤバ糖の思惑買をして數十萬圓の利を得たのや、神戸のガニバッグ（麻袋）の投機が行はれて二

千萬圓儲けるといつた有樣であつた。それから綿糸取引に對する投機は、最も複雜に且つ巨額に行はれたのであつた。それだけに大正九年三月にパニックが來た時には、綿糸商の打撃が一番深酷なものがあつた。

かやうに國內は勿論、海外に及んで投機が行はれた結果、株式指數は大正三年を百として七年には百八十、八年には二百四十四、九年には實に二百五十、卽ち二倍半の騰貴をしたのである。これは株式の平均指數であるが、此中に最高値を示したのは「東株」の五百五十圓を始め、「鐘紡」は五百六十圓、「郵船」は二百二十八圓といふのであつた。斯くて各會社とも競つて增資をなし、そして其の增資株は百圓二百圓といふプレミアムがつき、いはゆる玆にプレミアム成金なるものが現れ、また各會社とも競爭的に株式の配當をしたのであつて、中には十三割、二十割といつたやうな高配當をしたものもあつた程であつた。

三　成金沒落して元の杢阿彌となる

また此時に於ける事業計畫熱が如何に旺盛であつたかといふに、大正八年八月には四億圓に過ぎなかつたものが、十月には五億となり、十二月には六億圓、しかして九年三月には實に十一億となり、一ケ月に新事業の計畫されること十億圓、十一億といつたやうに素破らしい、そして想像もつかぬ發展振りであつた。

次に輸出品の大宗たる綿糸及び生糸の相場を見れば、綿糸は最高七百圓となり、「紡績會社」は一梱につき百五十圓からの利益を擧げ、生糸は大正七年に一千四百圓したものが、九年の二三月には四千四五百圓からしたのであつた。

此外、田畑や市街地の土地について見ても、嘘のやうな値上りをしたのであつた。卽ち大阪では普通千五六百圓の相場ものが、四千五六百圓となり、また田地の平均相場は大正三年で平均一反二百八十圓であつたのが、九年三月には五百九十五圓といふのであり、畑地もまた三年の百四十五圓から九年八月には三百二十九圓となつたのである。

以上の如く、世の中の有りと汎らゆるものが景氣づき、そして二倍三倍乃至多いのは五倍にも値上りしたのであるから、世の中の誰もが勢ひ成金氣分にならざるを得ないのである。例へば百姓が自分の土地は今まで一反二百五十圓であるとのみ思つて居たのが、急に五百圓になつて居たと知つ

た時には、急に金持氣分になるのは無理からぬことと言はなければならぬ。斯くて成金氣分は全國に横溢し、世は眞に黃金時代となつたのであつた。

併し斯くの如き黃金時代は到底永續すべきものでは無かつた。大正九年三月十五日、それは靑天に霹靂が轟き渡つたのであつた。株式市場は大暴落を演じ、四月七日には先づ大阪の『增田ビルブローカー銀行』破綻し、それから四月・五月・六月と其日も其日も株式市場は勿論、生糸市場も綿糸市場も慘落に慘落を續けたのであつた。そして世の中は或は闇になつたのでは無いかとさへ怪しまれ、株式市場も、其他の有りと汎らゆる市場は閉鎖してしまつたのであつた。七百圓の高値を呼んだ綿糸は二百五十圓に下り、四千五百圓の生糸は一千九十五圓まで下り、そして倍額になつた土地もまた少くも元の値位までに下つたのであつた。そしてさきの株成金、綿糸成金、さては土地成金も、たゞ茫然自失して居る間に元の杢阿彌に還元されて居たのであつた。いざこれから其の成金の主だつた者について、一々其の當時の成金振と、そして沒落振を素破抜いて見やう。

大成金「久原房之助」

一 國際的成金の第一人者

成金風が吹き初めたのは、成程日露戰爭後三十九年から四十一年の春にかけての事に相違なかつた。しかし其の當時の成金といつても、『鈴久』でさへ三四百萬圓といつた位で、其他の成金は精々五十萬か百萬に過ぎず、それから後にかけての成金に比すれば、てんで桁が違つて居た。歐洲大戰當時乃至戰後の成金といへば、五百萬・千萬乃至一億圓といつた勘定で、百萬・二百萬の成金は都下を通じてザラにあつた。況んや十萬・二十萬の成金に至つては、それこそ塵溜にでも落つこちて居る程で、苟も兜町に出入して居る者であれば、一度ぐらゐは、此位の成金になつた者ばかりであつた。尤も其の當時の成金は、單に株成金といつたやうな者に止らず、船成金・鐵成金といふやうに、成金の種類も多種多樣となり、船をチヤーターして巨利を博したのや、瓜哇糖の先物賣買に依つて儲けたのや、或は鐵を輸入し、乃至轉買して利益を得たといふやうに、成金となる其の範圍も擴大して國際化し、いはゆる國際的成金を生じたのであつた。而して當時の國際的成金の隨一はといへば、何といつても先づ指を「久原房之助」に屈せねばならぬであらう。

「久原房之助」が男爵「藤田平太郎」の甥であり、「日立鑛山」に據つて、「古河」に對峙し、製銅界に覇權を稱へて居る事は周知の事實である。ところで黄金の波が押寄せた、あの大戰後半の當時に「久原」の才氣は單に製銅界にのみ蟠ることに慊らず、時恰も財界は猫も杓子も謂はゆる商事會社熱に浮かされ、商事會社といへば名や實の如何を問はず、其の株式は、それこそプレミアム附で飛ぶやうに賣れる盛況なので、「久原」の「久原鑛業」も、其の販賣部を分離せしめて、資本金を一千萬圓とし、新に「久原商事株式會社」なるものを設置したのであつた。それから間もなく二千萬圓に增資したのであるが、其時の株式の賣行は、それこそ財界の驚異とまで云はれ、五十圓四分の一拂込に對し、三十圓から甚しきは五十圓のプレミアムがつき、これのみでも一擧に七八百萬圓の巨利を博したのであつて、これに勢ひを得た「久原商事」は、其の事業方面に於ても、天晴れ大會社になりすまし、「三井」「三菱」の老大國何者ぞといつた調子で、獨逸澄航艇は地中海から太西洋、太平洋沿岸まで跳躍して居た當時、「大阪商船」から「東郷」「永代」の兩船をチヤーターして地中海に侵入せしめたのは「郵船」は勿論、世界の何の國の商船よりも眞先であつた。之に依つて軍需品をイタリー及びフランスに送つて巨利を博した事は、當時の海運界に於ても商事界に於ても鬱憤の叫びを發せし

めたもので、これがために「久原商事」の名は、それこそ旭日昇天の勢ひを呈し、「三井」「三菱」は或は後に據着たるかの觀があり、大正六年から七年にかけ、丸の內界隈を「久原」の社員にあらずんば人にあらずといつた權幕で橫行し濶歩し、彼等平社員のボーナスと雖も、よく半期に十ケ月、二十ケ月を給せられ、それこそ「ボーナス成金」となつて居たのであつた。

二　成金沒落から大臣になるまで

併し、それもこれも時世時節で、斯く素破らしかつた成金振も、彼の大正七年來の休戰を一轉期として、「久原商事」は漸く頽勢に向ひ、此上に生糸やチヤーターの値下りのために、さしも五千萬乃至一億圓からの巨利を見る見る中に土崩瓦解して、大正八九年頃には「久原商事」の名も有るか無きかの悲慘なる境涯にまで陷ち込んだのであつた。尤も「久原鑛業」のみは銅界不振とはいへ、有名なる「日立鑛山」を擁して居る事ではあり、依然其の命脈を保ち、株式界に於ても相當活氣を添へて來たやうでもあるし、御當人の「久原房之助」は多年「政友會」に忠勤を抽でたる段天晴なりとて、今や「田中義一」大將の右の腕と賴まれ、最近田中內閣の改造に際し、輿論を無視して遞信大臣の椅子

に据ゑられ、黨內の不平も物かは涼しい顏で納まつてゐるなど、流石は國際成金の第一人者だけあつて、他の成金共とは違つた持味と凄い腕前とを發揮して居る。

鈴木と山下

一 臺灣銀行と無理心中を圖る

「久原」に對立して其頃成金の絕頂に達して居たのは神戸の「鈴木商店」であつた。船・砂糖・鐵・紡績といつたやうなものに儲けた金は一億圓以上と言はれた。そして、あの休戰の瓦落も大正九年のパニックも、どうやら支へ得て、神戸の「鈴木」といふ名目だけは保つことが出來た。尤も是には同商店の大口の債務が「臺灣銀行」であり、回收に無理をすれば、直ちに「臺灣銀行」自體に影響するといふので、いはゆる共存共立の立場から最近まで無事であらざるを得なかつた點もあつた。

それは兎に角として、歐洲大戰直後に、どんなボロ船でもよいから、兎に角船といふ名のつくものを持つて居る者が、或は船をチヤーターして居た者は、どんな馬鹿であらうと阿呆であらうと一躍

「船成金」になつたやうに、大正六年から七年の春夏にかけての高値の絕頂に、休戰を見込んでよく處分し得なかつた者は、それと反對に何れも慘澹たる打擊を蒙つたのであつた。

「久原」は其の打擊の標本であり、「鈴木」は「山下龜三郎」や、「橋本喜造」や、或は「勝田銀次郎」の各船成金共と共に、例の社外船合同の「國際汽船株式會社」なるものを起し、うまく「興銀」といふよりは政府に肩抜けをして居たのであつた。それだから是等の船成金は休戰の打擊を或程度まで支へ得たのであつた。しかも此の「國際汽船」の發頭人は、鈴木の大番頭「金子直吉」で、彼の奇才はよく社外船の打擊を比較的少き程度に救ひ得たのであつた。尙ほ、「鈴木」に就いては後章「昭和の成金」中に再敍する。

二 「山下龜三郎」の今昔

「山下龜三郎」も當時七千餘萬圓からの大成金であつた。「山下汽船」が、「郵船」・「大阪商船」・「東洋汽船」に次ぎ、當時社外船としては優なるだけに、チヤーターの騰貴と船價の暴騰とにより彼は儲けたのであつた。卽ち歐洲大戰前チヤーター三圓、船價五十圓程度であつたのが、大正六年にはチヤ

ーター內地三十八圓、歐洲四百五圓、船價八百圓乃至千圓といふ馬鹿相場になつたのだから、戰前に持船のあつた「山下」が、船成金となるのは當然の事であらねばならぬ。

「山下」は日露戰爭中にも矢張船で以て五六百萬圓からの巨利を博したのであつた。そのため彼は有頂天となり、何でも御坐れと手を出した結果、遂に『小樽木材會社』で折角儲けた五六百萬圓をフイにして元の杢阿彌となつたばかりか、百五十萬からの借金を背負ひ込んだのであつた。其後石炭の賣買をやる傍ら船を廻して居たが、時恰も歐洲の風雲が何となく險惡となつたので、彼は日露戰爭中の苦い經驗から、船價の安い不況時代に私かに古船を買ひ集めたのであつた。

それが巧く大當をして、七千萬からの成金となり、『山下汽船』『山下鑛業』の外に『山下合名』を組織して、宛然山下王國を形成せんとしたのであるが、しかも休戰と大正九年のパニツクには相當打撃を蒙り、船は『國際汽船』に肩替りして、稍其の苦痛の程度こそ緩らげて居るが、それでも『山下汽船の』勢力は往年の餘影だにも及ばず、幸ひに其後『山下鑛業』と『山下合名』とで其の餘喘を保たんとしたが、次第に苦境に陷り、既に東京呉服橋にあつた『山下の總本部』も遂に神戸に引越すの止むなきに至り、一時何百名と使用してゐた者も殆ど減員節約して、漸く神戸だけは何とかして行かうと焦つて居るやうである。兎に角往年の「山下鯨三郎」の影は今や何處に、眞に元の杢阿彌に還元されて更に一陽來復を待つて居るに過ぎないと言はれて、こゝに成金の憐れを止めて居る。

勝田と橋本

一 護憲の神様へ十五萬圓の捧げ物

大正六年の總選擧に憲政の神様、「犬養木堂」に十五萬圓を寄進して護憲の證の顯著ならんことを祈つた「勝田銀次郎」は當時六千萬圓からの船成金で、十萬二十萬は善男善女が淺草觀音に喜捨する賽錢ほどにも思つて居なかつた時であつた。而し十五萬圓の金の有難味は貧乏人揃ひの世間では絶大なもので、「勝田銀次郎」の名は、それよりして知らるゝに至つた。彼は歐洲大戰開始當時、四萬噸からの船を買ひ込んだ。そして『勝田汽船會社』なるものを設立した。當時「勝田」の成金振も又素破らしいもので、一夕神戸の旅亭に內外の顯官紳士を招待した時に三百名からの客に對し、目の下一尺何寸といふ生きたまゝの鯛を一齊に硝子の箱に入れて殘べたといふ程である。

「勝田」程ではないが、「岸本兼太郎」も船成金の一人である。尤も「岸本」は「勝田」などと異つて大戰を當込んで船を買込んだといふのでは無く、開戰前から既に六萬噸からの汽船を持つて、『岸本汽船』のフラグは瀨戸內海を始め、近海航路に於て何れの地に於ても見られる程であつた。ところであの大正二三年の頃の海運界不況は其の持船の多ければ多いほど苦境にあり、『岸本汽船』の如き若しあの大戰が五六ケ月も遲ければ、それこそ破產の憂目を見ねばならぬ程であつたのが、人間の運といふものはどんな處にあるか分らぬ者で、一度開戰の報到るや、今まで門司濱間十錢の運賃は一圓となり、一圓五十錢となり、船價は五十圓から八百圓といつたやうに競り上げて、「岸本」はこゝに天晴三千萬近くの大成金に成り澄ましたのであつた。

二　金の力で一黨の總務

親の光は七光りするものといふが、金の光は十も二十もの光がするものだ。『民政黨』の「橋本喜造」の金の光は、一時總務にまで躍上らせた。「橋本」から金の光といふものを取除いたら、それこそ如何なものであるかは知る人ぞ知るであるが、金の光は恐ろしいもので、彼が代議士になることさへ不思議であるのに（尤も今頃の代議士といふものは相場が決つてゐるが）更に一度でも一黨の總務となるに至つては、今更ながら金の光の有難さに涙こぼれるやうだ。尤も金の光で文部大臣になつた人もあつた位だから、「橋本」が斯く一黨の總務となる位は敢て不思議とは言へないかも知れないが、それにしても「橋本」が斯く一黨の總務までも贏ち得る程に金の光を發揮せしめたのは、其の源泉また同じく彼が大戰中に船成金になつた事に歸するのである。

彼は二十二三歲頃、叔父の「橋本辰二郎」から五萬圓の金を貰つた時に、其金で長崎港內の渡船業を營み、それから漸次產をなしたといふ程であつて、船とは因緣淺からぬ關係にあり、日露戰爭中にも船で四五百萬の資產をなしたが、歐洲大戰中にも殆ど三千萬圓近くの巨利を博したのであつた。

彼の根據地は佐世保だが、長崎にも、神戸にも、東京にも、將また大連にも其居を有して居る程に活動して居る。休戰に依る打擊は、また彼の財產の大半を消失した事は勿論であるが、而も錢を守るに巧妙なる、或は「鈴木」「山下」等と同じく『國際汽船』に依つてボロ船を巧く肩抜けしたので、兎に角『民政黨』に於て當初會計監督より遂に總務となり、いはゆる一黨の領袖といふところまで漕ぎ付け得る事が出來たのであつた。

山本と内田

一 虎大盡「山本唯三郎」

其點になると一握二千萬圓の船成金「山本唯三郎」は或は實業界に於ては成功者の一人であるかも知れぬが、而も政治界に野心滿々たるものありながら、遂に其の目的を達し得ないで世を終つた。彼の自慢は「田中義一」や「三浦觀樹」等、若くは時の大官を千駄ケ谷の自宅に招待することであつた。彼は如何いふものか成金といはれることが嫌ひで、大官招待も一は成金でないといふことを吹聽するためかも知れぬが、併し正眞正銘のところ彼は『住友』や『鴻池』のやうに三百年からの素封家に生れた坊ちやんでなく、一時でも二千萬からの資産家になつたのは、歐洲大戰中船の値上りで儲けたからで、卽ち純然たる船成金である。尤もそれ以前、卽ち大戰前には『松昌洋行』を經營し、開平貧の輸入乃至海外輸出をやつて居た位であるから、誰かのやうに『三井』の腰辨で無かつたことも、或は株屋の番頭で無かつた事も事實である。しかし同時に開戰前までは『松昌洋行』の家賃す

ら滿足に拂ふことが出來なかつた窮措大であつたことも亦事實である。

それが歐洲大戰のお蔭で一時的にせよ二千萬圓からの產をなし、往年の總選擧に立候補した際など二十五萬圓からの選擧費を撒き散らしたといふからには、矢張り「山本唯三郎」は成金で御坐ると言はなければならぬ。でも成金と言はれるのが口惜しいのか、大正六年の十一月だつたか、俺は成金では無い。こんなに努力したのだぞといふことを知らせる爲だといつて、朝鮮の虎狩を押始めた。總勢二百餘人を率きつれ、大擧「加藤淸正」の二の舞をやつたが、人間共が「山本唯三郎」は成金だと言つたばかりに、虎こそ迷惑千萬の事だつた。が、これによつて「山本」の成金振は彼の「鈴久」の如く淫蕩的成金振ではなく、蠻的成金振であるといふことが如實に說明された譯で、それよりして「山本」の別名を「山本虎大盡」と呼ぶやうになつた。

しかし後年の「山本」は身邊轉た孤城落月の感あり、遂に彼の自慢であつた千駄ケ谷の住宅まで人手に渡し、再起の望みも果敢なく冥土の旅を急いでしまつたのである。

二 汽車の下敷で有名な内田信也

「山本唯三郎」と同じく、否「山本」よりは、より以上に俗氣と稚氣との多い男に「內田信也」がある。「內田信也」などと御丁寧に言はなくとも「俺は神戸の內田だ」といへば、合點の早い世の中の人は、あゝあの人かとすぐ諒解するであらう。この神戸の「內田」は、茨城縣から立候補して立派に當選し、政友會所屬の押しも押されもせぬ代議士で、しかも政務次官であらせられる。

彼が金を儲けたのも矢張り歐洲大戰のお蔭であつて、開戰前に於ける船の思惑買が見事に當つて遂に二千萬圓からの成金になつたのであるが、それ以前の「內田信也」が如何な男であつたかは知る人ぞ知るので、兎に角「三井」に腰辨をブラ下げて通つたこともある人である。一介の腰辨から一躍二千萬圓のミリオネアーとなる！　これは常人には想像もされないやうな事で、「內田」自身でも天下の紳商となり、且つ代議士となりたる自分の豪さと金の有難味とを痛切に感じたもので、たとひ汽車の下敷になつても金さへ出せば助かると思つた程であつた。

鄉里水戸市の「高等學校」を寄附したのも此人だが、縣の方では百萬圓は入らぬ、八十萬圓もあれば澤山だと辭退したが、それは困る。百萬圓と纏らねば「宮內省」の方の何とかが都合が惡いからと、強ひて百萬圓を提供したといふ奇特な人である。しかし、此人にも成金沒落の嵐は吹いて來

た。此前立候補する時でも、まさか金が無かつた譯でも無からうが、兎に角ありつたけの骨董品を賣拂つて立候補した程であつた。二千萬圓の夢は疾の昔に過ぎ去つて居ることは事實である。

三　其他の船成金

此外に船成金としては「岡崎藤吉」「日下部久太郎」「緒明圭三」などといふ人がある。何れも一千萬圓近くから儲けた人で、此中「岡崎」などは一番悧巧な方法をとつた。卽ち船價昂騰の潮時にボロ船の處分をし、其金を銀行と火災保險の方面に向けたのであつた。そして今や單なる成金ではなく「岡崎銀行」と「神戸海上」の勢力を以て少くも關西に於ける實業界に重きをなし、彼の火保問題の當時に於ては關東側の「各務鎌吉」に拮抗して最後まで梧突いた人である。

「日下部」は北海道と神戸とに根據地を有して成金の仲間入をなし、「緒明」は養子成金と船成金とを併せ有した程の成金德のある人で、成金前の裸姿は叩き大工に過ぎないのである。

尙此外に一千萬圓臺を割つた船成金では八百萬圓の「大上久太郎」、五百萬圓の「上西龜之助」、四百萬圓の「菊地吉藏」、三百萬圓の「山下市助」「佐々木平次郎」等がある。更に百萬圓內外の成金に

至つては、それこそ僕を更ふるも數へ切れない程で、到底その煩に堪へるところではない。

而して是等千萬圓以下の成金に至つては、多くは名もなき市井の匹夫に過ぎないが、たゞ「山下市助」「佐々木平次郎」に至つては、稍見るべきものあり、殊に「佐々木平次郎」といへば、日比谷田圃の陣笠の名までも克明に記憶する者があれば、あゝあの男かと首肯するであらう。嘗て日比谷の議場で、あの禿頭と胡麻鹽頭の優劣を競つてゐる間に、髭大盡のやうに、髭のみ燦然と異彩を放つて居たこともある。彼は北海道函館の人、ボロ船から兎に角三百萬圓からの成金になり、たとひ一陣笠とはいへ、兎に角『民政黨』の船成金「橋本喜造」に對し、『政友會』の船成金の役目をつとめたことがあるのだ。

生糸成金「茂木」

一 金と時とに惠まれた幸運兒

大正七年に一千四百圓であつた生糸が九年の初めには四千三百五十圓と三千圓からの値上りを示

し、四千五百圓になるのも、もう聞も無い事だと言はれ、横濱の生糸市場は實に熱狂の絶頂に達して居たのであつた。從來多少なりともストツクを持つて居たものは見る〳〵中に其のストツクの値上りで利益は倍加し、三倍乃至四倍五倍して仕入値段の四五倍からの利益を擧げるといふのであるから、生糸商の熱狂は蓋し當然と謂はなければならなかつた。そして所謂生糸成金なるものが横濱埠頭の犬の糞のやうにゴロついて居たといふことであるが、此の生糸成金、それも大成金の一人に「茂木惣兵衞」が居つたことを知らぬ者はあるまい。

彼は當時二十六七の青二才であつた。それが横濱に於ける、否、我國に於ける小壯實業家の雄なるものとして當時財界に驚異の眼を以て迎へられて居たものであるが、此の生糸による巨利は彼をして益々大ならしめたものであつた。當時彼が何ほど利益を摑んだかは明かではないが、兎に角二三千萬圓の巨利を確實に摑んだらうとは一般に想像されたところであつた。それは兎に角として彼は此の巨額なる利益を擧げてからといふものは、其の鼻息はそれこそ素破らしいもの：であつて、「横濱の茂木」といへば、當時「久原」と共に財界の黄金國を以て目されて居たのであつた。といふのは「茂木」は、それ以來といふものは單に生糸商としてのみならず、恰も「久原」が『商事會社』を創立して

外國貿易に手を出した如く、外國貿易もやれば、船のチヤーターもやり、其他銀行業は勿論、保險も倉庫も紡績もやるといつた有樣で、彼の名刺の肩書には『茂木商店』の代表者を始め『橫濱七十四』『橫濱貯蓄銀行』の頭取、『日本絹毛紡績』『橫濱船渠』『橫濱生糸』『橫濱倉庫』といつたやうに、二十幾つかの重役名が仰々しく連ねられたのであつた。

元來「茂木惣兵衞」なる者が斯く當時の財界の黃金國と言はれるやうになつたのは、彼の獨力のみでは無い。彼は先代「茂木保平」の長男で、「保平」は既に橫濱に於ける有力なる實業家であつて『橫濱七十四』を始め其他數種の事業を經營して居たもので、當時「惣兵衞」は『麻布中學』を出て『第八高等學校』に在學中であつたが、父の死と共に學業を中途退學して事業界に飛込んだのであつた。そして偶々大正六七年の好景氣時代から更に大正八九年の成金時代に入りて、彼の血氣に委せて縱橫無盡に駈け廻り遂に財界の黃金國とまで成つたのであつた。

しかして斯くなつたのも、勿論彼がそれだけ豪かつたためでは無く、彼の總支配人「長與程三」が劃策宜しきを得たためだと言はれてゐる。そして又此の「長與程三」がそんなに豪かつたかといふに必ずしもさうではなく、要するに「茂木」をしてあれだけ大きなものにしたのは、時と金であつたといふことに盡きて居る。卽ち歐洲大戰後の好景氣と、そして生糸による暴利が、自然に若くは其の調子に乘つて、あれだけに成つたのだといふことが、最も當を得た批評であるかも知れぬ。

二　湯水の如くに浪費した五千萬圓

それにしても當時に於ける「茂木」の勢ひつたら無かつた。「海上ビルディング」の三階を打通して事務所を構へ、それに今の「工業倶樂部」の北側だつたかに廣い大きな敷地を選定して所謂『茂木合名の總本店』を置き、其他リヨン、ニューヨークに支店を、ロンドン、キユーパ、シドニー、ボンベイ等に、各代理店を置いて、以て世界の「茂木」たるべく大覇業を樹てたのであつた。そして其の當時の勢ひからすれば、當然さうなるべきことを吾人と共に疑はぬところであつた。

それが例のパニツクによつて、一も二もなく瓦解したのであつた。「茂木」の建設が早かつただけに其の瓦解も早かつた。しかし此の瓦解の根本原因は、彼が餘りに圖に乘つて事業を擴張し過ぎたことであつた。そしてパニツクによる生糸の思惑違ひ、竝に關係會社の中樞神經をなす『橫濱七十四銀行』の破綻が曝露したのであつた。かうなれば他の關

係會社が土崩瓦解することは當然のことであるが、斯くして『七十四銀行』は預金總額五千百萬圓の大部分を「茂木」の關係會社に注ぎ込んで居たのであつた。其後『七十四銀行』の救濟問題は當時の財界の重要問題とせられたが、當時の日本銀行總裁「井上準之助」が『茂木合名』の內密の顧問であつたからといふ譯でもあるまいが、兎に角政府から『日本銀行』を通じ一千五百萬圓からの救濟資金を出して救濟することになつた。生糸の値上りで二三千萬圓からの成金になつて稍〻上した靑二才が、其の二三千萬圓の金を遣ひ果して猶足らず、人から預かつた預金五千萬圓からの金を湯水のやうに使つた事句が銀行破綻、事業は瓦解、預金は拂へぬとなると國民の膏血を集めた一千五百萬圓からの低利資金で救濟する。何と日本といふ國は實に目出度い國ではあるまいか。それは兎に角、沒落後の「茂木」は、其後東京の郊外に佗住居して淋しい暮しをして居るさうである。

砂糖成金「增田」

——ジヤバ糖の投機で一攫三千萬圓

國內の投機熱は益々白熱化し、成金いよ〳〵跋扈して來て、遂には海外にまでも投機思惑をやるやうになつたことは前にも述べた通りであるが、此中でも最も熾に行はれた投機の一つは、實に砂糖會社のジヤバの砂糖市場に於けるものであつた。元來日本の砂糖會社のジヤバに於ける砂糖の買入は、必ずしも常に投機思惑の附隨するものでは無いが、何分國內には投機熱が白熱化してゐる時であるから、此時ばかりは此の投機思惑が遂にジヤバ糖にまで傳染したのであつた。そして斯くの如きジヤバ糖思惑で一番儲けたのは、關西では神戶の「鈴木」であるが、關東では橫濱の「增田合名」であつた。

「增田」の先代「嘉兵衞」は、例の荒木又右衞門で名高い伊賀の上野の產で、橫濱に來て砂糖と麥粉の輸入商をして居たのであつた。「增藏」は十六年に先代の家督を繼ぎ、爾來棉花・砂糖・麥粉及び石油の輸入業を營んで來たのであるが、其後明治三十二年に新海關稅法が實施せられ、精製糖の輸入に一大打擊を與へたので、遂に決心して「橫濱精糖株式會社」なるものを創設して輸入糖の防壓に努めたのであるが、其の「橫濱精糖」の工場といふのが、今日の「明治製糖株式會社」の川崎工場で、「明治製糖」が同工場を合併買收したのである。兎に角、砂糖商としての「增田」の勢力は關東に於て

彼に比肩するものは無かつた程であつたから、例のジヤバ糖の先物買付による思惑熱が熾になつた時、「増田」が其の先頭に立つて居たこと勿論である。そして此のジヤバ糖に對するスペキユレーションによつて、當時二三千萬圓の利益を得たと傳へられて居た。

しかして斯くの如くジヤバ糖思惑に大膽に乘出したのは、當時「増田」の會計を握つて居た「増田源次郎」と「増藏」の弟「中村房次郎」であつて、此の兩人で以て殆ど「増田」を切り廻し、そしてジヤバ糖思惑で二三千萬圓の甘い成金になつたのであるが、しかも此時に於て既に「増田」は稍乘出し過ぎた觀があつた。殊に其後ます〳〵調子に乘つて大連の豆粕の買付に手を出し、一時は數千萬圓の買付をなした事もあつた程である。然るに例のパニツクで先づジヤバ糖の思惑で大穴を明け、更に豆粕で以て大傷手を負つたのであつた。所謂こゝに砂糖成金瀕落の時が來た。

そればかりでなく大正八年五六月頃、「日本銀行」が始めて銀行引受輸入手形なる制度を案出し、餘り割引市場の發達しない我國で頻りに之が實施を奬勵し、殊に引受銀行は貿易商の發行する信用狀にポン〳〵判さへ捺せば一分か一分半の利鞘が取れるといふので、要求さへあれば取引先の如何を考ふる暇なく、無闇矢鱈に判を捺し、また輸入商も兎に角銀行の判さへ捺してあれば、いくらでも買付が出來るものだから、例のジヤバ糖の思惑買に大手を擴げて此の輸入手形の發行をしたものであつた。「増田」がジヤバ糖に將亦豆粕に思惑買をなした時、此の輸入手形の濫發をしたことは當然のことであつて、斯くていよ〳〵パニツクが來た時には、さきに濫發した輸入手形の支拂に行詰り、遂に二進も三進も行かなくなり、こゝに浚落の黒幕は下されて、往年の關東に於ける砂糖成金も今何處へといつた形で、横濱の貿易界から其姿を消したのであつた。

二 「安部幸」と第百銀行との腐れ縁

同じく砂糖成金に「安部幸兵衛」が居る。「増田」とは深い仲で、其の成金になるまでには勿論ジヤバ糖の買付其他で「増田」が成金になつた時と寸分變りはないと共に、其の浚落も亦殆ど同じであつた。併し砂糖商としては「増田」の如く大では無く、從つて「増田」の如く成金の程度も大きくは無かつた筈である。しかし彼もまた神奈川縣下に於ける多額納稅者の一人であつた。彼の倅に「幸之助」が居る。此男が相當の手腕家で、「安部幸」が成金時代は主として此の「幸之助」が切つて廻して居たのであつた。また豪勝で大に活躍したと言はれる「荒井泰治」の如きも彼の相棒であつた。「荒井」は

單に臺灣に於ける活躍家ばかりで無く、中央に於ける財界でも相當に人に知られた男である。兎に角此の「荒井」の相棒によつて、當時大に成金振を發揮し、會社重役の如きも父子相競つて二十餘も兼ねて居た程であつた。

併し、それもこれも皆夢で、なまなか成金になつたればこそ沒落して、祖先傳來の砂糖屋の看板も臺なしにしてしまつた譯である。そして此の「安部幸」の沒落で直接打撃を蒙つたのは、當時の「第百銀行」であつたと言はれて居る。聞くところに依れば「第百」には別に「安部幸」のため金庫を備へ付けて置いた程に密接な取引關係があつたのであるから、「安部幸」の沒落が直接影響するのは當然であつて、それかあらぬか「第百」の姉妹銀行であつた「東京貯藏銀行」は大正九年の暮に取付に遭つた。流石の頭取「池田謙三」も、これには一寸當惑したが、當時彼は中央の銀行界では交換所の委員長に擧げられて居た程の人望家であつたから、市中五大銀行は勿論、「日本銀行」も極力これを援助する旨を聲明したのである。故に其の取付も間もなく終熄したのであつたが、一時は伸々の騒ぎであつた。

綿糸成金

一吹き荒む悲風慘雨

大正七年に四百圓の相場であつた綿糸相場は、大正八年末には五百六十圓を唱へ、更に九年二月には南洋竝に北淸の綿布引合と銀塊の奔騰に牽制せられ、現物不足を好機に買煽つたので、三月には遂に七百四十圓といふ未曾有の高値を示したのであつた。かくて綿糸成金は大阪の三品市場を中心とし、東京は杉の森市場を中心として簇生したのであつて、綿糸界の黄金時代を出現したのであるが、それも南柯一朝の夢とやらで、三月十五日のパニックは先づ綿糸市場を襲つたのであつた。それに引續き政府は十八番手の海外輸出を絶對に禁止し、次いで株式の暴落・銀行の破綻・機業地の休業による內地需要の激減は、ます〳〵形勢を惡化せしめて、遂に四月十四日には五百圓臺を劃り、斯界の前途は全く暗澹たる恐怖狀態と化したのであつた。そして曩の綿糸成金は今は顏色さへもなく、東西綿糸布商は相携へて政府に向つて之が救濟運動を開始するの止むなきに至つたのであつ

た。そして五月に入つて、益々慘落に慘落を重ね、遂には三百二十圓となつて、曩の成金は今は敗殘の傷手を負ひ、死屍また累々たるものがあつた。

二　悲慘を極めた「柿沼谷藏」

此の綿糸成金沒落の中でも最も悲慘を極めたものは、日本橋の「柿沼谷藏」であつた。綿糸が七百七十圓といふ法外な高値を示した時には當時二流處の店を張つて居た「柿沼」は五六百萬圓の巨利を博したといはれて居た。それが綿糸市場の暴落、「横濱七十四銀行」を始め茂木系事業の倒壞といつたやうに、世は今や悲風慘雨の吹き荒んで居た時であつて、さきの五六百萬圓からの成金も何處へやら、殊に「柿沼」は先々代「谷藏」からの老店であつたが、それもこれも跡形なくなつて、今では「谷藏」は何處かの厄介をして居るとも傳へられて居る。

借金成金「石井定七」

一　借金額九千萬圓

それから事件は最近に接近して彼の中間景氣の影響を受けた大正十一年になつてのことであつた。其時も銀行は再び取付に遭ひ、小パニックが襲來した。其の小パニックの原因は他にあるが、パニックを招來せしめた直接の原因は彼の借金王「石井定七」にあつた。「石井」の借財は實に八千四百萬圓と稱せられ、殆ど空手にして九千萬圓近くの借金をすること其事よりして彼は借金成金といふべきであらう。彼に債權を有する銀行は三十四行の多きに上り、其の主なるものは實に左の如く巨額なるものである。

「住友銀行」	二百三十三萬圓
「加島銀行」	二十七萬二千圓
「十五銀行」	八十五萬圓
「日本信託」	三百三十九萬圓
「山口銀行」	二十九萬三千圓
「濱濁銀行」	七十萬圓
「關西信託」	三百十二萬圓
「第百銀行」	二十五萬三千圓
「明治銀行」	百十二萬圓
「野村銀行」	二十三萬五千圓
「百三十銀行」	三十八萬四千圓
「名古屋銀行」	三十六萬九千圓
「帝國商業」	十七萬五千圓
「其他」	二千萬圓

即ち單なる「石井定七」に對し、以上の如く東西兩市場に於ける一二流銀行が取引關係を結んで居たのであつた。此事は「石井」の破產で漸く分つた。彼が斯く巨額の借金をした奥の手は、銀行の預金爭奪といふ弱點に巧みに附け込んだからであつた。銀行は如何なる手段方法を講じても預金を吸收することが其の銀行の大ならしむる所以だと心得て居る。斯くの如き銀行業者の病的缺陷に乘じたのが「石井」であつた。彼は例へば腹心の甲銀行に空預金證書十五萬圓を作らせ、乙銀行に行つて之を提出し五萬圓の融通を受け、殘る十萬圓は預金とすると言つたやうな方法を採つた。何の銀行でも五萬圓支拂つて十萬圓の預金が增加するからといつて、皆この手に乘つたのであつた。そして「石井」と特別の關係にある銀行とは、彼の『高知銀行』であつた。

兎に角「石井」は、こんな方法で此の世智辛い世の中に九千萬圓に近い借金をして一時は關西實業界に於て飛ぶ鳥も落すやうな羽振を示した。當時の實業界、殊に銀行家仲間では彼と取引の無いのを不名譽と心得た程であつた。それが一度「石井」の內情曝露し、彼は遂に大正十二年十二月二十六日詐欺及び詐欺破產事件で大阪地方裁判所で一度は有罪の判決を受け、彼は「岩下淸周」と共に關西財界に於ける二大山師の一人に數へられた。

二　銀行を瞞す巧妙な手段

抑も彼の積年に亙る內情が曝露するに至つた原因は、かうであつた。彼もまた大正九年の財界變動で大打擊を受けたのであるが、これが輓回策に苦心し、遂に大正十年に米の大買占をやり、次いで「鐘新株」三十二萬株の大買占をやつたのであつた。それが何れも大失敗に終り、これがために八千萬圓からの大借財となつたのである。即ち彼は前に述べた方法で銀行屋を瞞し、其金で米の買占と株の買占を行つたのであつた。それが大失敗に終つて、遂に大正十一年二月二十日に支拂を停止することになり、銀行團からは破產申請を受け、同年十月十日大阪地方裁判所で破產の宣告を受け、それから取調べ進行中、遂に詐欺破產によつて告訴されたものである。そして詐欺の嫌疑のあるものは約六十口に及び、中四件が財產隱匿罪と詐欺罪で起訴されたのである。これに關聯して「石井」の股肱となつて働いた元住友銀行道頓堀支店長「直井鐵也」、高知商業銀行重役「中島長治」外三名も背任罪として起訴された。猶彼が銀行を詐つた一方法として豫審調書に載つて居るのを見れば左の如くである。

「石井」は大正十年十月限で五萬三百石を石四十一圓三十四錢で買占に着手し、翌十一年二月まで五ケ月の間に合計五十五萬四千餘石の米の大買占をしたが、此米を擔保にして金融するに當り、自己引受の二百十萬圓の手形を振出し、これに「石井」の機關銀行「高知商業銀行」が受米を擔保に入れるとの契約の下に裏書し、之を「日本信託銀行」で割引を受けるに際し、一石三十圓で七萬石の受米の倉庫證券を擔保にするが證券は後から持つて來ると稱し、大正十一年十一月三十日の受渡日に「堂島取引所」へ支拂つた受米代金の領收書を差入れ、行員をして倉庫證券と同樣の效力あるものと誤信せしめ二百十萬圓を引出し、眞物の倉庫證券は他の銀行へ持つて行き金融に供した。なほ同日「信託銀行」の外「神戸岡崎銀行」へも同樣の手段により二萬石の領收書を差入れ金六十萬圓を借出し、都合九萬石、二百七十萬圓の詐欺を働いたものである。

高田釜吉

斯くて「石井定七」は沒落したが、さきの豪奢に比べて轉た感慨無量なるものあるであらう。それにしても斯くの如き沒落振は慘の慘なるものでは無いか。

一 機械成金を代表した高田商會

これは比較的新らしい成金沒落の一節である。「高田商會」の破綻の原因其後の問題に就いては後篇に詳述することゝして、玆には歐洲大戰頃の成金振と、そして大正十三年初頭に於ける沒落のダーク・シーンまでを簡單に書くこととする。

「高田」は先代の「愼藏」時代から商賣にかけてはもダルマと稱する「三井」「三菱」「鈴木」「大倉」なんどとは孤立した觀があつた。それでも例の好景氣時代に於ては事業計畫が急激に發展したために機械類の輸入甚しく、就中、電氣事業の發展は電氣機械の輸入を彼がウエスチング・ハウスの日本總代理權を持つて居るところから、「高田」の利益は殆ど獨占的にして機械の値上りによる利益は莫大なるものあり、いはゆる機械成金は「高田商會」に獨占せられたかの觀があつた。

二 機關銀行の破綻と「高田」の斷末魔

それが大正九年のパニックによつて一大打撃を蒙つた上、更に十二年の大震災のために、流石全盛を謳はれた「高田」も、そこに惨澹たる創痍を受けた。それで之が救濟を時の大藏大臣「勝田主計」に泣きつき、兎に角五百萬圓の救濟資金を融通することに內諾を與へて未だ現金の交附に至らぬ前に「清浦內閣」は瓦解したのであつた。これによつて一番痛烈な打撃を蒙つたのは「高田商會」である。それに偶々「朝鮮銀行」の定時株主總會で「鮮銀」の不當貸付が曝露し、其中には「高田商會」のが三百萬圓からあるといふので、遂に「高田」に飛火し、こゝに「高田」の內情曝露となり、機關銀行たる「永樂銀行」の破綻となつて、彼が戰時の好景氣時代の成金振は今いづこ、先代「高田愼藏」が築き上げた「高田商會」も、こゝに最後の斷末魔となり、往年の「高田商會」は今や全く「釜吉」を除外して社員の一部によつて辛うじて經營されて居るに止まるのである。

彼は元來「田中銀行」頭取の「田中平八」の弟で、帝大工科大學を卒業してドイツに十三年も留學し、機械工學に就いては一隻眼を有するものである。歸朝間もなく、家兄の勸めで金が欲しければ養子になれといふので、「高田愼藏」の養子となり、金と美人とを一時に獲得して所謂養子成金となつたものである。それが好景氣時代に機械成金になり、そして最後には沒落して單なる技術者となつて終らんとするのである。たゞ愛妻「雪子夫人」のみは如何に彼が沒落しようとも彼から失はないことは勿論である。

鐵成金の人々

一棚から牡丹餅の鐵成金

それは大正五年から七年にかけての事であつた。金氣のあるものであれば、どんな古釘でも破鍋の缺らでも一貫目何圓といふ金目になつた。それだから今まで日傭稼ぎに出て居たものも、一日二圓、三圓で體を縛られるよりも、其處等の溝に鐵屑を漁つて居た方が餘程金になり、女子供でも拾子の好い時は日に三圓・五圓といふ儲けをしたのであつた。

斯く鐵が重寶がられ、金氣さへあれば法外な價になつたのは、戰爭と鐵とは附きもので、一國に於ける鐵の供給如何に依つて勝敗が決せられるやうに貴重なものであるから、戰爭がありさへすれば、鐵の價格は從つて騰貴するものであるが、殊に大正六年の春、米國は參戰後間もなく、米鐵の

禁輸を断行したので、さなきだに天井知らずの高値を示して居た鐵價は一層法外の高値を示し、戰前と戰時最高値との比較は實に左の如きであつた。

（種類）	（戰前）	（戰時高値）
銑鐵（一噸）	四十圓	三百圓
鐵板（一噸）	十二圓	一千二百圓
丸棒（一噸）	七十圓	六百圓

即ち戰時中の最高値は戰前の八倍乃至十倍になつたのである。斯くの如き趨勢であつたのであるから、此の高値時に持荷の多かつた商人が知らぬ間に十倍からの儲けをして、例へば、今まで自分の財産は十萬圓位だとばかり思つて居たのが、何時の間にか百萬圓になつて居り、棚から牡丹餅とは眞に此事で、いはゆる鐵成金が、そんじよ其處等に蛆の如く發生したのであつた。

而も此外に單に手持荷の多かつた者が巨利を博したばかりでなく、鐵の自給自足、製鐵事業の奬勵といつたやうな事が熾に宣傳せられ、且つ現實に行はれて、各所に製鐵會社が起り、何パーセントかの鐵分を含んで居るといふので秋田縣から態々大阪三界まで土塊を運んで電氣分解で鐵を造つ

たり、鐵屑を買集めて鑄直したり、製鐵事業の勃興も實に素破らしいものがあつた。中にも彼の『東洋製鐵株式會社』の如き、「團琢磨」「中島久萬吉」の如き、一流實業家を以て組織せられ、資本金三千萬圓、株式六十萬株、中十萬株が公募せられるや實に六百九十七萬株、即ち七十倍の應募があつた程の素破らしさであつた。以て當時如何に製鐵事業熱が勃興したかを知る事が出來ると同時に、鐵に對する需要が如何に旺盛であつたかを知り得るのである。

二　儲けた金と吐出した金

斯くて鐵成金は隨處に現れ、五十萬・百萬の鐵成金は、それこそ一時は箕で捨てるやうに出來、中には二千萬・三千萬の鐵成金さへも出來たのであつた。尤も大正六年末に於て政府は例の物價調節令を出したので、鐵板・棒鐵の如き四五割安を呈し、これが爲めに一部鐵商人、就中思惑買をして居る鐵ブローカーの如き相當打撃を蒙つたのであるが、それでも比較的手堅いものや、持荷の多かつた者は相當の成金振を發揮したのであつた。其中主だつた者は、「森岡平右衞門」であらう。今津屋といつて二百年からの老舗である。それが其の景氣時代に一時は二千萬圓から儲けたが、漸く取留

め得たのが、七百萬圓程度であつた。其次は「河合佐兵衛」で、同じく七百萬圓近く儲けた一人であるが。「佐兵衛」はナカ〳〵拔目の無い人で、日露戰爭當時「東鄕大將」の名が軍神のやうに宣傳されたので、直ちに此名を失敬して大將とハガネと餘り深い緣も無ささうなのに自分の店で賣出す鋼に「東鄕ハガネ」と命名して大いに宣傳したので、「東鄕ハガネ」の名は忽ち一般に知れ渡つたのであつた。それが偶々此の鐵暴騰時代に於て、ストックの多かつたのと宣傳の上手な爲めに巨利を博したのであつた。彼は十二の頃から此店に丁稚として住込み、目から鼻に拔けるやうな處に見込まれて先代の養子となつた人である。

「三谷長三郎」も六百萬圓から儲けた人であるが、先代「長三郎」は又江戸趣味の豐富な人として知られて居る。殊に此人は繪草紙蒐集が道樂で、一時は繪草紙屋を始めた程の人である。それで彼の家には錦繪第一版から京傳の肉筆や豐國の下繪なども愛藏して居るのだが、惜しい事には先年の大震災で大部分燒いてしまつた。

同じ趣味の人で、鐵成金に「梅岡政吉」が居る。彼は書を好くすると同時に大の義太夫の天狗である。一體此の鐵屋仲間は非常によく遊び、よく貰ふ方で、それで儲けも大きいやうだ。彼も一時は

一千五六百萬圓も儲けた一人だが、最後まで取止め得たのは、確か六百萬圓位であつたらう。「加藤安四郎」も五百萬圓ぐらゐ儲けた人だが、惜しい事には今は故人になつて、其の遺族が家業を繼いで居る。

「河合半兵衛」は東鄕ハガネの「佐兵衛」と同じく、淺草の「河合久次郎」から出た店で、當時日本では未だ出來なかつた土工用のシヤベルを製造して賣出したので當時此方でも勿論儲けたが、それよりも鐵のストックを買込んで居たので、一時四五百萬圓から儲けた。尤も最後までに取止め得たのは二百萬圓ぐらゐに過ぎなかつたらう。

此外には本當に鐵成金の名を付けてよい人に、「桑原七兵衛」がある。彼は當時名も無い鍛冶屋で、朝暗い中からトンカン〳〵と鎌や庖丁を作つて居たのであつたが、此の鐵の値上りで實に百萬圓からの成金とまで行かずとも、當時鍛冶屋で相當の成金になつた者は隨分多くあつた。

以上は大體、鐵板とか丸棒とかで儲けた人だが、此外に銑鐵で儲けた人に「村上喜代治」「丸橋義之助」「湯淺七右衛門」とかいふ人があり、又銅で儲けた人には「中尾金八」「森田半兵衛」「三崎吉

之助」などがあり、何れも四五十萬圓から三四百萬圓までを儲けた人々であつた。

株成金の人々

一 黄金の潮と死屍累々の慘狀

前にも述べた通り日露戰後の、株式爆發の當時には例の「鈴久」を始め大小幾多の株成金を出して悲喜劇を演じたが、歐洲大戰でも同じやうに大小無數の株成金を生んだのであつた。尤も歐洲大戰が生んだ株成金は、日露戰爭のそれの如く前後といふのではなく、大戰終末頃の大正五六年にかけての事であつた。それは大戰に於ける我國の地位は、高見の見物をしながら自然と金儲けをされたからである。

當時「郵船」も、「東株」も全く天井知らずに昂騰した。殊に各輸入品の杜絶で、內地製造會社の勃興、商事會社の簇生は實に素破らしい勢ひで、新會社の資本金總額は十二億七千萬圓と註せられ、其の株式は發行前からプレミアム附で豫約申込殺到するといふ盛況であつた。卽ち「久原商事」の株

は六十圓からのプレミアムがつき、「東洋製織」の株は七十倍からの申込があつた。斯くて大正六年八月には「郵船株」は四百圓臺を突破し、同月二十八日には四百二十二圓の高値を演出した。北濱も兜町も黄金が潮のやうに溢れた。小俥も番頭も、男も女も、百姓も船頭も、札束を摑んで狂奔した。眞にそれは狂奔であつた。日露戰後の好景氣時代のそれよりも更に投機熱は寒村僻地、津々浦々まで滲み渡つた。

ところが此の狂奔の眞最中に、天來の霹靂は驀然として轟き渡つた。それは寺內內閣によつて發せられた物價調節令や、船舶管理令、さては金輸出禁止令等であつた。斯くて八月二十八日を頂上として株式は漸く瓦落に轉じ、日曜明けの八月三十日には「郵船」は四百圓迄を割つて、三百九十二圓に落ち、それから遂次慘落し、遂に十月十九日には三百圓も割つて二百八十六圓まで慘落したのであつた。之に伴れて爭に狂奔した徒輩は見るも無慘に打倒れて、昨日までの大小幾多の成金は今日は死屍累々たるの樣を呈したのであつた。

二 敗慘の巷より遁れ得た人々

たゞ此中に幸ひにも敗慘の巷より遁れ得たものは、大きい處では七八名に過ぎない。卽ち關西側では、竹原友三郎」「加島安次郎」を筆頭に、「鳥德藏」「野村德七」「小池國三」等である。

「織田昇次郎」は株成金に於て、當時關東の旗頭であつたらう。彼は何といつても明治十六年から兜町に住み、千軍萬馬の間を馳驅した古兵士である。日露戰爭中にも當てたのであるが、彼の「半田庸太郎」や、「栗生武右衞門」等と共に四十年の瓦落で浚落して全く元の杢阿彌となり、それより苦節十年、天の時と地の利の臻るを待つこと久しかつたが、恰も大正三年七月には「郵船株」は百十三圓から百七圓まで下押したから、鼓等を底値と見て、彼は一萬二三千株を買込み、それから「鹽水」「東洋」の砂糖株が四十三圓の値頃に又一萬株ばかりを買つたのであつた。

ところが財界は其後に新事業の勃興となり、諸株は一齊に全く天井知らずの形勢なので、しかも一面には新株の買はれるといふことは、舊株の買盡しを物語るもので、株も大體鼓等を天井と見たので、曩に買つた「砂糖株」の全部と「郵船株」の大半を賣つたのであつた。此邊は四十年の瓦落による經驗の結果であつて、彼が持株の處分に出でて間もなく、八月の瓦落が來たのであつた。彼の先

見は見事に當り、遂に二千五百萬圓からの巨利を確實に攫ることが出來たと言はれてゐる。

關東側の「織田」に對し、關西側で甘く賣拔をしたものに、「竹原友三郎」がある。恐らく彼は當時に於ける、否、株界始まつて以來の株成金の隨一であらう。「織田」と同樣に高値を狙つて持株七萬八千株を處分した。そしてこれがために三千萬圓からの巨利を博したのであつた。

堅氣な株成金

一 株界から遠ざかつた大成金

以上は終始株屋で通し、今もなほ株界を游弋して居る人々だが、株屋でシコタマ儲け、同時に株界から全然手を引かないまでも、或程度まで遠ざかつて居る人々として「小池國三」「神田鑛藏」「福島浪藏」、及び「野村德七」などあるが、「神田鑛藏」は日露戰爭後の株界では相當產を爲したが、歐洲大戰當時の景氣時代には病を湘南地方に養つて居たから、餘り活動しなかつた。それに彼も聊か考ふるところあつて、現物か銀行といふやうに出來得る限り、地道を辿るやうになつたが、彼は不幸

にして、大正十二年の震災で手酷い打撃を受け、其上、從來の腐れ縁で所謂天降り的の半命令で『丸の内銀行』や『東華生命』や大阪の『茂木ビルディング』等を引受けさせられた上に「三浦觀樹」や「若槻禮次郎」の邸宅を法外の高値で頂戴したり何かして、資金がスツカリ固定したが、自分が經營する『神田銀行』が手廣くやつてゐる預り證券額を彼方此方に融通して辛うじて世間體を繕つてゐたが、昭和二年のパニツクにより遣繰算段もつかなくなり、昭和三年二月、あはれや僅か三萬二千圓の交換尻決濟資金に窮し、敢へなくも沒落したのであつた。

「小池國三」は前年あの世に旅立したが、此男も一時は株界では鳴らし、此時も一千萬圓からの利を得たと言はれたが、彼も是れ以後は全く堅實一方に傾き、晩年では彼が株屋であつたことを知らない位に眞面目になり、『小池銀行』の頭取として、又は『東京瓦斯』の社長として押しも押されもせぬ人となつた。此點は沒落以前の「神田鐳藏」と同じく彼の「福島浪藏」と併せて兜町が生んだ者の異數とせられて居る。

關西に於て、「小池國三」と殆ど同じ途を行く人に「野村德七」がある。彼も亦此の當時賣拔の名手を振つたので、二千萬圓からの巨利を博したと言はれてゐるが、其後株界から隱退して現物と『野

村銀行』とを後生大事に守りたてゝゐる。尤も育ちが育ちだけに全然株界から手を引くといふことは出來ないものか、『野村銀行』の主たる營業課目とするのは、株式界にあつて株式資金を圓滑に融通するにあるといふのださうだ。それで東京にまで支店を置いて之が達成に努めて居るやうだが、未だ全く其の目的を達し得たとは見られないやうである。

二　あはれ果敢なき南柯の一夢

次に「加島安次郎」は同じく此時に『尼ケ崎紡績』で二千萬圓からの成金になつた人で、關西財界に於ける勢力は一時「竹原友三郎」や「島德藏」を拔いたものであつた。彼は其後二百萬圓の巨財を投じて彼の『北濱銀行』の救濟の任に當り、其の頭取になつた。『北濱銀行』といへば彼の「岩下清周」が大穴を明けた銀行である。當時の此の銀行が如何に亂脈を極めた銀行であり、此の銀行に飛び込むのは、最も危險とせられたが、彼は「片岡直溫」の斡旋で之に入り、着々其の整理の實を擧げた人である。桶屋の小僧から身を起し、北濱の芝大の番頭となり、そして一擧に二千萬圓からの大成金になつた人だけに、普通の成金とは稍毛色を異にして居る。

此外にも「鳥徳銀」や「黒門幸七」等が居る。何れも一千萬圓からの成金で、殊に「島」は大阪財界に於ける重鎮であつた。而して「北濱」に於ける彼の勢力は比するもの無く、決して單なる株屋では無かつた。

此外にも五十萬圓・百萬圓で取止めた株成金は、東西を通じて相當あつたかも知れぬが、要するに是等は無名の徒であり、たとひ又有名の徒があつたにしても元來株屋の運ほど淡きものは無く、昨日までは五十萬・百萬の成金も、今日は素袷の素寒貧に急變するのは、滔々として皆然りで、或好事家の統計に依れば、北濱・兜町界隈で、あの堂々たる店を張つて居る者でも、十中七八までは其の壽命は平均二ケ年半を出でないといふことである。以て彼等株屋の壽命が蜉蝣のそれの如く、如何に淡きものであるかを知る事が出來るのである。

此の當時都鄙を通じて株式熱に浮かされ極く小さな成金に成り澄まして居た連中は、八月以降の瓦落で、それこそ南柯の夢にも及ばぬ果敢なき夢を見た上、しかも其の寢覺めの床は可成りに悲痛なものが多かつたやうであつた。

それと是とは稍事變るけれども、彼の鐵成金の如きも亦同じで、一時何百萬圓からの成金になつた連中も、鐵の値下りで、日一日と聲節のやうに身を細くし、それに先年の震災で親も子もない程に焼き盡し、爾の成金も非成金も同じ地平線上に擲きつけられたのであるが、たゞ望みとするところは復興氣分が漸く濃厚となるに伴れ、鐵類の需要も增加し、或は近き將來に於て昔日の如き鐵成金は生れなくとも、或程度まで氣力を恢復するかも知れぬことである。

プレミアム成金

一會社成金とプレミアム

以上は個々の人についての成金振であるが、次に會社成金・プレミアム成金といつたやうなものに就いて書くことゝする。

それは大正七年から九年の春、即ちパニックが起る直前までに會社の簇生、增資されたことは實に素破らしいもので、此點は前にも既に書いた通りである。即ち「日本銀行」の調査による事業計畫の資本高を見ると、大正六年には新設擴張併せて十五億六千二百萬圓であつたのが、七年には二

十六億七千六百萬圓となり、更に八年には實に四十億六千八百萬圓、前年に比すれば十三億九千二百萬圓、前々年度卽ち六年に比すれば、實に二十五億餘圓の激增を示して居るのであつた。

こんな趨勢で以て、既設の銀行會社は競つて增資を爲し、財界の策士と稱する者、機會ある毎に財界を喰ひ物にする者共は勿論、猫も杓子も、それこそ死物狂ひになつて、何々商事會社・何々事業會社、さては取引所を濫設し、日も維れ足らざるかの有樣であつた。そして增資するものは、どんなケチな銀行や會社でも、二十圓乃至五十圓からのプレミアムが附き、新設する者は、そこに色々な手品やからくりまでもして、公募株式の何十倍、何百倍は愚か、何千株の應募があつたと互に誇り、且つ其間に於けるプレミアムをせしめて居たのであつた。

二　赤い舌をペロリと出す重役連

「臺灣電力」は大正七年に公募された。「臺灣總督鄕」から電氣瓦斯及び、木材防腐事業の實物出資をなす半官半民の會社で、最初の六ケ年は年六分、水力工事竣工の七年目からは年八歩、其後は年一割三分の配當は確實に實行するといふので、九萬株の公募に對して申込三千萬株、卽ち三百五十

倍からの應募があつた。それで其の割當について一株當り二十圓からのプレミアムが附いたのであるが、此間發企人は此の權利金でしこたま膨れ上り、潮時を見てさつと肩抜をしてしまつた。馬鹿を見たのは權利金まで拂つて抱き込んだ一般應募者であつて、其後株は拂込以下に下り手も足も出なくなつたが、たゞ最の發企人や贊成人だけは株主の此の苦みを他所に見て赤い舌をぺろりと出して居たのである。

これと同じ寸法で行つたのは「亞細亞煙草」であつた。應募四百倍からあり、純民間事業で、これ丈けの應募株があるのは恐らく我が財界始まつて以來の現象であるなんて途方もない太鼓を叩き、權利金を二十圓から取つたものであるが、其後拂込高の少い重役と多い重役との間に紛擾が起り、それに實際の仕事は何をして居るのか見當つかず、大正九年のパニック後には拂込十二圓五十錢に慘落した。

三　權利金のカラクリ

一　濡手で粟の珍らしい策略

株式募集に依り、甘い汁を吸ふやうになつたのは、前記の『臺灣電力』や『亞細亞煙草』ばかりではない。大正八年九月に計畫された『日本水力』の株式公債十萬株に對し、實に三千七百倍からの應募があつた。そして其の割當方法は全く馬鹿げた程で、九萬五千株以上に對しては二十五株、七萬五千株以上二十株、五萬六千株以上十五株といつたやうに割當てられた。而も是には十圓からの權利金が附せられて居ること勿論である。

十萬株の公募に對し三千七百倍の應募、即ち三億七千萬株からの應募があるといふこと、それは本當に嘘のやうな眞であるから驚く。而も之には珍らしいカラクリが行はれて居たのであつた。といふのは、此の株式公募に當り株式申込所に於て申込人に對し、日歩一錢で申込證據金の立替を行つたのであつた。即ち一株二圓五十錢の證據金を入れるとして、十萬株の三千七百倍三億七千萬株の證據金だけでも、九億二千五百萬圓からの巨額に達し、これを立替へるとすれば一日實に九萬五千圓からの日歩が取れ、募入決定までの期間が十日あれば九十五萬圓、二十日あれば百九十萬圓の日歩が取れるのである。

二 狐と狸の騙しあひ

一方應募者側からするも、例へば玆に一萬株の申込者があるとすれば、實際は二萬五千圓の證據金を納めねばならぬ筈だが、これを日歩一錢とすれば一日二圓五十錢の日歩を支拂へばよい事になり、募入決定まで十日かゝれば二十五圓、二十日かゝれば五十圓となり、一萬株に對し假に二株割當てられても權利金が十圓附いて居るから十株で百圓となり、證據金の日歩を差引いても默つて居て五十圓乃至七八十圓の儲けをする事になる譯である。それであるから、十萬株の公募に對し三千七百倍からの應募者があつた譯で、此の應募者中、眞に株式所有を希望する者は殆どなく、皆權利金を以て日歩を利喰しようといふ者ばかりであり、發企人も亦日歩の立替の利益と權利金からの利益を得ようといふ魂膽から、此の株式應募の野太鼓を打つたのであつた。而も圖星は甘々と當り、發起人連中は少からぬ儲けをしたのである。

これと同じ方法を取つたのが彼の『日本信託銀行』の株式募集であつた。此の銀行では二十萬株の公募に對し、三百四十八倍の應募があつたので、一萬株に對し二十五株の割合で割當てた。銀行株

で是れくらゐ應募したのは珍らしい方であるが、それも矢つ張り日歩八厘で證據金の立替をしたからである。

又「門司築港」も一萬株の公募に對し三千三百倍からの應募額に達し、二十圓の權利が附いた。勿論これも同じく證據金の立替をしたのであるが、其後此の會社は重役間相互乃至株主間に紛擾が起つて、其の株式は見るも無慘な程度まで下落したのは人の知る通りである。

政商と政府の結託

一 巧妙に仕組まれた大芝居

「大連取引所」も其一に數へられる。當時大連には官設の「大連商品取引所」があつた。それにも拘らず「商品取引所」と大同小異の「大連取引所」を新設し、滿洲に於ける證券取引の機關たらしめようといふのである。既に發端からして、これは既設の「商品取引所」に合併せしめようといふのか、或は「商品取引所」を合併しようといふのか、其の何れにか魂膽を有する如く見られて居たが、そればかりでなく、元來關東州には未だ取引法がないにも拘らず、民營の取引所を新設するには、先づそこに取引所法を設置してからの事であらねばならぬ。それといふのは、元來取引所は許可主義のものであるから、許可なくては新設されないからである。

然るに「大連取引所」は未だ取引所法なき土地に、許可なくして新設しようといふのであつた。創立委員長は政友會の「小泉策太郎」と「奥繁三郎」の兩人である。一見して政友會を背景とした政商の紛々たるものあるを感知せざるを得ないであらう。この「大連取引所」を計畫する當初より、既に政府との間に默契あることを、世間ではよく窺知して居たから、五十圓以上のプレミアム附で二萬株だけ公募された處が飛ぶやうに賣れ、爲に一千萬圓からのプレミアムに依る利益を得たのであつた。そして其年の十二月十五日には果して政府は關東州取引所令を公布したのである。何と芝居は巧妙に仕組まれて居るではないか。こんなぼろい儲けがあればこそ、日頃待合の勘定を拂つて政治家を飼つて置く、いはゆる政商といふものが居るのである。

此の「大連取引所」に見習つて、これと類似のものが各地に簇生し、政治家と政商連が、しきりに

凄い腕を揮つたのは謂ふまでもない。

二　際どい藝當を打つた幸運兒

「菅原通敬」が創立委員長であり、後に社長となつた「日米信託」の如きも、創立當初は二ケ年一割二分の配當を保證した程であつたから、其の公募株の如き權利金附で素破らしい勢ひで賣れたのであつたが、其後內紛に次ぐに內紛を以てして、遂に有るか無きかの有樣になつた。同じ「菅原」の發企に係るものに「旭紡績」といふのがある。二萬株の公募に對して十圓乃至二十圓からの權利金附であつたが、それで一千倍から申込があつた。但し今日は其の賣行に逆比例して其の消息の傳はらない事はいふまでもない。

一番際どい處で藝當を打つたのは「喜多又藏」の社長たる「日本棉花」であつた。それはあのバニツタは大正九年の三月十四日に始まつたのであるが、會社の增資、卽ち一千萬圓から五倍の五千萬圓に增資する事とし、其の株式三十七萬株といふ我が財界始つて以來の稀有に多額な株式の公募を六十五圓といふプレミアム附で三月五日から十日までの間に行つたのであつた。それがもう五日も遲

れて居れば、三十七萬株は愚か、一萬株も賣れないのでもつたが、幸運な事には五日早かつた爲めに、二千四百五萬圓といふ巨額なプレミアムに依る利益を得たのであつた。プレミアム成金も色々あつたが、恐らく是れくらゐ幸運なぼろい儲けをしたものは少かつたであらう。

公募株式の多い點では「片倉製糸」の增資株三十萬株を公募したのも、「日本棉花」に次ぐものであつて、三十圓のプレミアム附であつたが、「片倉製糸」が我國に於ける所謂製糸王であるだけに勿論飛ぶやうに賣れ、爲めに約一千萬圓からのプレミアム成金になつたのであつた。

此外銀行方面でも關東・關西を通じ、一流どころから二三流どころに至るまで、一齊に增資、それも一樣に三十圓乃至五十圓のプレミアム附で增資株の公募をなし、各銀行とも增資さへ行へば、手を拱いて居て何百萬圓といふ金が金庫の中に流れ込んだのであつた。殊に「朝鮮殖產銀行」の如き種々の宣傳が手傳つて公募に對し四百倍からの應募があつた程であつた。

紡績會社方面でも何しろ「旭紡」が七割、「日淸紡」五割といふ高配當をなし、大正八年十一月に綿糸七百十圓からの高値を見せた程であつたから、それこそ紡績會社株といへば、どんな株でも殆ど奪ひ合の姿であつて、前記「旭紡」の一千倍の應募の外に、「郡山紡績」の一萬株公募に對し百倍、「東

北紡』同じく一萬株に對し八十倍といつたやうな勢ひであり、其他の株では『日本綿羊毛』一萬五千株の公募に對し二百五十倍、『上海製麻』『横濱棧橋倉庫』等十圓の權利附で何れも四倍五倍の應募あり、砂糖會社でも『內外製糖』二萬株の公募に對し四百七十四倍の應募があつた。

一 財界のバチルス

こんな按配で、苟も會社を新設すれば、十圓二十圓の權利金附で、公募額の何百倍何千倍に達し、苟も既設會社の增資を行はんとすれば五十圓六十圓のプレミアム附で飛ぶやうに賣れるのであるから、世の中は會社を新設するか增資を行はなければ馬鹿のやうに思はれ、我も我もと會社の新設や增資を行つたのであつた。そして殺到する應募者や、流れ込むプレミアムに有頂天になり、亂舞し跳躍したのであつた。

然るに大正九年三月十日、關西の一隅から破壞しかけたバニックは、それこそ暴風のやうに我が財界の隅から隅まで吹き捲り、今まで亂舞せる者も、一樣に水平線上に若くはそれ以下に吹き倒されたのであつた。今まで五十圓乃至百圓のプレミアム附で奪ひ合つて居た株式も、殆ど拂込以下に下り、何百倍・何千倍の募集超過になつて居た株式も、今は無代で遣るといつても貰ふ人もない程の慘めさとなつたのであつた。斯くて財界の何れの邊を見ても、昨日までの春色何れにあるかと疑はしむる程であつた。

蓋し斯くの如く痛烈なるバニックの襲來は自から當然の事であらねばならなかつた。大正七年以來九年の春にかけての財界各方面の不堅實、不眞面目さは當然あれだけの膺懲は受ねばならなかつたのである。彼等自身が彼のバニックを招くべく約二ケ年に亙り蠢動したのであつた。彼等は打揃うて株式應募額の野太鼓を打ち、且つ不當なる利益を收めんとした事は許すべからざる事であり、且つ又時の政府が財界のバチルス共が吹く笛に合せて踊りを踊るが如きに至つては、言語道斷の事であり、同時に常に財界の潮流に超越して財界を監視し、指導しなければならぬ地位に立つ銀行家が、同じく一般事業會社のそれに引摺られて、愚劣なる踊りを踊り、必要もなきに增資してプレミアムを目的にした如きに至つては、甚だ不謹愼千萬な事であつて、斯くの如きバニックを來らしめた大半の責任は、是等財界のバチルスと政府と、そして銀行家に歸せねばならぬのである。

昭和成金哀話

世界的借金王鈴木

一 大番頭「金子直吉」の怪腕

我々は前に「石井定七」に對して借金成金の尊號を奉つた。併し、それは五年前卽ち大正十二年の出來事で、今日から見れば借金成金として決して權威あるものではなくなつた。と云ふのは昭和二年三月の金融界大恐慌は、彼の富士山が一夜で出來たとか云はれるやうに、無慮五億圓を算する世界的借金王、神戸の「鈴木商店」を躍り出させたからだ。「石井」の借金は多いと雖うても高が八千四百萬圓、「鈴木」は桁違ひの五億圓で、約六倍に當つて居る。流石の「石井」も「鈴木」の前へ出ては釣鐘に提灯、正宗と竹光程の開きがある譯で、上には上ありと云ふべしである。

前に記したやうに「鈴木」は好況時代に、船・砂糖・鐵・紡績類で儲けた金が、一億圓以上にも達し、內地は愚か海外にも廣く手を延ばして、「三井」「三菱」の向ふを張らんとしたのであるが、俄造り

の無理が多く、あまり調子に乘り過ぎた爲め、大正九年の瓦落に出遭つて進退の自由を失ひ、一時危急を告げられた程である。併し、やりくり上手の大番頭「金子直吉」の怪腕で、幾度か危い橋を乘越し、恐慌風のため木葉微塵に吹き飛ばされた大小成金の末路を尻目にかけながら、不思議と思はれる程壽命を長らへたのであつた。

二 若槻內閣を手玉に取つた震手法案

何分「鈴木」に取つての强味は「臺灣銀行」の借金が積り積つて、三億五千萬圓にも達して居たことであつた。「臺銀」は所謂特殊銀行で、政府の保護に依つて立つてゐる銀行である。「鈴木」を見殺しにすることは卽ち「臺銀」を見殺しにすることで、これは政府として爲し得ないことである。「鈴木」は此の弱點を握つて居るばかりに、散々「臺銀」の生血を吸うて蛭のやうに命を繋いだが、不況の折柄、月々三百萬圓の利子を生み出すことすら並大抵では無く、利子不拂ひのため債務はゴム風船のやうに膨れ上るばかり、窮餘の策として案出したのが例の震災手形法案で、昭和二年一月、時の若槻內閣をして之を議會に提出せしめ、其の通過を計つて、政府に自分の借金の尻拭ひをさせよう

としたのである。

ところで、此の震手法案は「鈴木」なる一の政商を庇護せんがための法案であるとの理由で、激しく在野黨の反對を買ひ、議會は賛否の論爭々、空前の騒擾を極めた。其の結果「鈴木」は遂に「臺銀」より新規貸出し停止の三下り半を突きつけられ、尚ほ「臺銀」に對して政府は調査會を設くるの官制を二年四月四日公布すると同時に、委員を任命したが、「臺銀」の縁切を受けては糸の切れた紙鳶も同樣、「鈴木」もたうとう足場を失ひ、其の當日支拂停止發表の破目に陷づた。

三　昭和新政を汚した前代未聞の大恐慌

此の報道一たび傳はるや、經濟界は恰も感電せるが如く、極度の恐怖心に襲はれ、「鈴木」と密接なる關係ある「第六十五銀行」は、同八日先づ休業を發表した。次いで、「臺銀」は疑惑の焦點となり、各銀行は競うてコールの回收を計り、此のまゝ推移するに於ては倒壞の外なき危機に瀕したので、政府は此の事情に鑑み、日銀非常貸出に依る損失補償令案を緊急勅令にて發布し、此の焦眉の急に應ぜんとしたが、樞密院は同十七日これを否決し、內閣は責を引いて總辭職をなした。十八

日に至り、「臺銀」も遂に休業、次いで「近江」「十五」も亦これに隨ひ、預金取付は全國的に行はれ、前代未聞の大恐慌を現出し、昭和新政の金融史を汚すに至つた。後繼內閣は「田中義一」を首班として組織せられ、直ちに此の善後の處置に付いて協議の結果、二十二日より二日間、全國銀行一齊に臨時休業をなし、三週間の支拂猶豫令は其間に發布され、各種の取引機關は一時全く停止されたのであるが、此の騒動の黴菌をばら蒔いた元はといへば、云ふまでもなく、「鈴木」の大番頭「金子直吉」で、彼は此の意味で大地震を搖ぎ起すといふ大餘以上の怪物と言はねばなるまい。

「鈴木」が破綻した主因は無節制なる事業擴張をなし、其の經營方針は投機に類し、毫も締括りの無かつたことが大なる原因であるが、一には又「金子」が專制君主として臨み、獨斷專行、他の容喙を許さず、卽ち輩下に人材無かりしことも大なる原因をなしたものと云はれて居る。彼は一個人として素より「三井」の「團」「三菱」の「木村」に勝るものがあるけれども、「三井」「三菱」が雲の如き人材を統御して一糸紊れざるの商陣を張つて居るのに對し、「鈴木」は一の巨將「金子」を取去れば、殆ど烏合の衆に近く、到底これと對等の太刀討は出來なかつたのであつた。「鈴木」の强味も弱味も此處に在つた。「鈴木」は畢竟、「金子」のために起り「金子」のために倒れたと云つても過言では

無い。誓く泳ぐ者水に溺れるとの金言、眞に我を欺かすである。

「金子」は高知縣吾川郡名野川村の産で、慶應三年呱々の聲を擧げた。十二の頃土地の砂糖屋の小僧となり、二十一歳にして海を渡り、砂糖に關係ある神戸の「鈴木商店」に入つた。當時の「鈴木商店」は、まだ其邊にゴロついて居る片々たる小砂糖屋に過ぎず、「金子」も愛憎を盡かして國元へ逃げ歸つた事もある位だが、緣は異なもの味なもので、何處に見所があつたものか、先代「岩次郎」と「よね子」刀自のために呼び戻され、店をすつかり任されて思ふさま手腕を振はせた甲斐があつて、とん〳〵拍子に店は發展し、「大鈴木商店」の固めを爲したのである。「岩次郎」の死後、「よね子」未亡人があるとはいへ名ばかりのもので、「鈴木」の全權は自然「金子」に歸し、殆ど「金子」の獨力であれきまでの大膨脹大發展を遂げたのであつた。

四 「鈴木商店」の赤裸々なる解剖

曩年の「鈴木」は資本金五千萬圓の「株式會社鈴木商店」あり、外に直系三十三、傍系二十二の會社銀行を有し、財界に鬱然たる大勢力を張るに至つたのであるが、今これを分類すれば左の如くである。

直系會社

(會社名)	(資本金)	(拂込金)	(社長)
「鈴木商店」	八〇、〇〇〇、〇〇〇圓	五〇、〇〇〇、〇〇〇圓	鈴木よね
「日本商業」	五、〇〇〇	五、〇〇〇	鈴木岩次郎
「浪華倉庫」	五、〇〇〇	五、〇〇〇	芳川筍之助
「日本冷金」	三五〇	三五〇	依岡省輔
「帝國汽船」	一、〇〇〇	一、〇〇〇	鈴木岩次郎
「日本金扇」	一、〇〇〇	一、〇〇〇	谷治之助
「再製樟腦」	二、〇〇〇	一、七〇〇	小野禎一郎
「帝國樟腦」	一、〇〇〇	一、〇〇〇	西岡貞太郎
「神戸製綱」	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	伊藤乙次郎
「南朝鮮製紙」	一、〇〇〇	一、〇〇〇	青木一葉

「樺太漁業」	七五〇	六〇〇	佐々木平次郎
「沖見石炭」	二、〇〇〇	二、〇〇〇	鈴木岩次郎
「帝國炭業」	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	西岡貞太郎
「支那樟腦」	二、〇〇〇	二、〇〇〇	谷伊之助
「米星煙草」	一、〇〇〇	五〇〇	岡田庄輔
「帝國人絹」	五、〇〇〇	二、五〇〇	佐藤佐伯
「東海無電」	一、〇〇〇	二五〇	依岡省輔
「合同油脂グリセリン」	五、〇〇〇	五、〇〇〇	長崎英造
「豐年製油」	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	杉山金太郎
「日本輪業」	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	酒井丑松
「クロード窒業」	一五、〇〇〇	一二、〇〇〇	磯部房信
「太陽曹達」	一、〇〇〇	五〇〇	鈴木岩造
「日本アーブレーキ」	六〇〇	四五〇	島村鷹衛

「紡機製造」	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	依岡省輔
「太田川水電」	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇	吉岡龜三郎
「日沙商會」	三、〇〇〇	二、〇〇〇	依岡省輔
「日本製粉」	一二、〇〇〇	一〇、七二〇	窪田駒吉
「南滿洲物產」	一、〇〇〇	一、〇〇〇	村橋素吉
「廣島ルツボ」	五〇〇	五〇〇	
「日本金屬」		一、〇〇〇	
「大陸木材」		—	
「內國食品」		—	
「東工業」		五〇〇	

傍系會社

「國際汽船」	八〇、〇〇〇千円	六七、五〇〇千円	鈴木幸次郎

「天満織物」	七、〇〇〇	四、五〇〇	井田赤吉
「日本樟腦」	九、〇〇〇	六、七五〇	渡邊武良
「第六十五銀行」	一〇、〇〇〇	六、二五〇	藤田助吉
「日本拓殖」	一〇、〇〇〇	三、〇〇〇	鈴木岩次郎
「宜蘭殖產」	四七五	四七五	波江野吉太郎
「大正生命」	五〇〇	一二五	柳澤義光
「新日本火災海上」	五、〇〇〇	一、二五〇	柳澤義光
「東京元織」	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇	藤田謙一
「日本教育生命」	三〇〇	七五	柳澤義光
「旭石油」	九、六〇〇	九、三〇〇	松方幸次郎
「大日本鹽業」	四、〇〇〇	三、八〇〇	狩野藏次郎
「東洋製糖」	三六、二五〇	二二、〇〇〇	山成喬六
「帝國麥酒」	一〇、〇〇〇	五、五〇〇	隅田伊賀彦
「佐賀紡績」	五、〇〇〇	三五〇	吉田賀治郎
「日本セルロイド」	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	森田茂吉
「帝國染料」	三五五	三五五	長久伊勢吉
「東洋マッチ」	二、八〇〇	二、八〇〇	瀧川儀作
「東亞煙草」	一〇、〇〇〇	五、八〇〇	南新吾
「東亞海上火災」	三、〇〇〇	七五〇	下坂藤太郎
「南洋製糖」	一、二五〇	一、二五〇	宮尾麟
「鹽水港製糖」	二五、〇〇〇	一八、一二五	槇哲

其處で整理案としては、直系傍系の諸會社銀行に對し分解作用を施し、優良會社を存續し、不良會社を一掃する外に道の無いことになつたが、直系會社中で成績優良なものは、「帝國人造絹糸」「豐年製油」「台同油脂グリセリン」「樟腦會社」等で、就中「人造絹糸」は「鈴木」の一枚看板と稱せられ、無茶苦茶に廣げられた事業中、圖拔けて成績佳良なるものであつた。それは殆ど日本の人造絹糸を代表するに足るべきものであつたのである。傍系中、「第六十五銀行」は大株主の

「鈴木」の持株を他の重役が肩代りすることに依つて五月十二日開業し、其他の會社も、それ〴〵落着くべき所に落着いた。そして結局「金子直吉」は隱退し、「鈴木商店」は「鈴木商事會社」なる名ばかりの形骸を留めて、さしも世界を背景として演ぜられた鈴木座の大芝居も幕を閉ぢたのである。が、併し世界的借金王としての彼の盛名だけは永久に我が金融史上に光彩を放つであらう。

休銀重役の沒落

一 何のその百萬石も笹の露

此の銀行騒ぎで、「渡邊」(頭取渡邊治右衞門)、「中井」(中井新右衞門)、「中澤」(中澤義一)、「左右田」(左右田喜一郎)、「村井」(村井貞之助)、「十五」(松方巖)の諸銀行は一たまりも無く將棋倒しに倒れ、何のその百萬石も笹の露、あはれ昨日までは千萬長者として銀行頭取として榮華を極めた是等の人々も、一朝にして乞食同樣の境遇に早變りをなし、徒らに世の無情を嘆ぜしめたのも悲劇である。

「渡邊家」は播州明石から江戸に出で、日本橋四日市町(渡邊銀行所在地)に海產物問屋を開き、「明石屋」と唱へ、また「あかぢや」とも稱した。それが遂に帝都有數の大地主と謳はれるに至るまでには、血の出るやうな粒々辛苦を積んだ賜であることは云ふまでも無いであらう。帝都の大地主としては、舊大名を除いて、平民としてのそれは十指を屈するに足りない。普通大地主と云へば、「三井」「三菱」「安田」を除き、「堀越角次郎」位のもので、これに匹敵するものは彼「渡邊」である。彼の所有する土地は、さつと六十萬坪、其の內譯は市內十萬坪、市外三萬八千坪、小笠原島三十五萬坪、其の他九萬五千坪、合計五十八萬五千坪である。此のうち小笠原島を除き、市內外の二十三萬五千坪を坪當り百圓替としても、其の價格は實に二千三百五十萬圓に達する譯である。

二 渡邊一家沒落の徑路

銀行の休業と共に、渡邊は此の土地の價格を二千四百萬圓と見積り、大藏省に私財の提供を申出でた。大藏省側では「勸業銀行」の評價に基き千六百萬圓と扱き下したさうだけれども、何れにしても、あまり細くない身代と申すべきだらう。「渡邊」の當主「治右衞門」は開祖「治右衞門」より恰度十代

目で「勝三郎」「六郎」其他數人の兄弟あり、そのうち「勝三郎」が最も傑出し、『東京瓦斯』『乘合自動車』の社長の外に、『東京渡邊銀行』『あかち貯蓄』『東京瀦汽船』『大船田園都市』『渡邊倉庫』『東京株式取引所』を始め、三十餘會社銀行の社長重役を兼ね、現代第一流の實業家として恥づかしからぬ者であつた。

沒落の徑路を倒叙的に記せば、『渡邊銀行』が『上毛モスリン』に六百萬圓、『日本製麻』に四百萬圓、『箱根土地』に三百五十萬圓、『大船田園都市』に二百萬圓の巨資を貸付け資本を固定せしめた外に、六百五十萬圓の震災手形を有し、其のために『東京瓦斯』の預金『乘合自動車』竝に青物町の海産物問屋連中の預金をすつかり喰ひ盡してしまつても未だ足らず到頭、窒息した譯である。表面の拂込資本金は二百萬圓、預金三千八百十三萬四千圓、貸付金三千四百萬六千圓と云ふことになつて居て、バランス・シイトの上では、磐石の重みある『渡邊銀行』も、裏へ廻つて見れば前記のやうな缺陷だらけで、これで銀行が立つて行けるならば、立つて行くことが不思議な位であつた。

三　金の有難味を知らぬ天罰

併し、遠因は大正八九年の好況時代に遡り、好景氣に乘じて無暗矢鱈に手を擴げ、金の有難味を腐つた鯖ほどにも思はず、少し利廻りさへよければ、殆ど善惡を取捨選擇することなく、不良貸付を續行したのであつた。それが同九年三月十五日の大反動に出遭ひ、癒ゆべからざる痛手を負うたのは、當然の歸結であらねばならぬ。

更に、『渡邊』を大地主たらしめた原因に溯求するならば、當主の先代竝に先々代が、暇さへあれば握り飯を腰にぶら提げ、大江戸の街から街、辻から辻を根氣にまかせて野良犬の如くに彷徨して、飛地でも袋地でも値さへ安ければ手に入れ、それが年と共に莫大の面積に達し、後年、地價騰貴で驚くべき巨富を攫得することになつたのである。これはずつと後の事であるが、甲州系財閥の先覺「若尾逸平」が、東京市內に電車を敷設せんとし、土地の買收に取りかゝつた處、到る所で「渡邊」の所有地に突當り、これは叶はぬと悟つて、「渡邊」を電車會社の大株主に抱き込んだ。「渡邊」が若尾一派の甲州系と提携する端緒を造つたのはこれからだ。

今一段渡邊家の立創まりを記せば、こんなことがある。或初夏の日を浴びて、當時海產物問屋であつた渡邊家の店の前を、一人の柔實女が通つた。小僧が呼び止めて菜の値段を聞いてゐるところ

へ、主人の「渡邊」が臨終のかひを擦りながら出て値切り倒さうとした。栄寶女は怒つて、手荒く栄

を片付け逃げるやうに去つた。すると渡邊老人、

「小僧や、栄のこぼれを拾つて臺所へ持つて行きな」

と命じたといふ話が殘つて居る。斯やうにして初代の「渡邊」は、富を作るために腐心をしたものだ。そして渡邊家の萬代不易の基礎が築きあげられたと思ひの外、水の流れと人の行末ほど分らぬものはなく、天下の富豪「渡邊」の一族一家も泡沫夢幻、今は大船邊りに、糸より細き吹煙を上げて居るとのことである。

四 「中井銀行」破綻の原因

「中井」の當主「新右衛門」は八代目、相當の舊家として知られ、舊幕時代には十人衆の一人として幕府の爲替方、兩替方を勤めて居た。そして次第に産を積み、明治十六年、先代「新右衛門」が初めて銀行の看板を掲げたのが今日ある所以。同三十年株式組織に改め、大正元年に「城北銀行」、同二年に「日本通商銀行」を合併し、益々大を成した。

出身地が埼玉であつた關係上、本店外の支店は浦和・粕壁・川越・其他埼玉縣下に多く偏在し、國庫金の代理取扱・産業組合・信用組合の預金を一手に引受け、同縣下だけで千七百四十萬圓の預金を吸收し、牢固たる勢力を占めて居た。從つて休業と共に同縣下預金者の狼狽甚しく、其の飛沫を受けて、「久喜」「武州」兩銀行も取付に遭ひ、「久喜」は遂に休業の止むなきに至つた。

「中井」が破綻した原因は、「上毛モスリン」へ三百萬圓、「高田商會」へ二百萬圓を貸付、それが回收不能に歸した外、夥しき不良貸を作つたためである。大體「中井」は中産階級の取引銀行として評判が善く、相當取引先の面倒も見た爲め、此の災厄を蒙つたものである。頭取「新右衛門」は責任を痛感して私財を全部提供し、否應なしに無産階級の仲間入をしたのは、身から出た錆とは云へ、一面同情すべき點もある。

五 「八十四」「中澤」兩銀行の内幕

「八十四」「中澤」兩行は姉妹關係で、共に「中澤」家の先代「彦七」が創設したものである。從つて株主は殆ど「中澤」一家で占めて居る。同家は舊幕時代より連綿として傳はる攝津伊丹の銘酒問屋であ

つた。明治に入つて本據を東京に移し、京橋南新堀に居を定めた。南新堀の「中澤」といへば土藏倉庫軒を竝べた老舗として、誰知らぬものもない。

當主「彦七」は福島縣の「澁澤榮一」と云はれた「白井遠平」の四男で、幼にして中澤家の嗣子となつた。日本橋の紳商「國分勘兵衞」『近藤利兵衞』は血を分けた實の兄弟である。『八十四』の頭取「山田丈太郎」は中澤家の小僧から仕上げた堅い一方の男、破綻の原因は中澤家の關係事業に固定貸を多く作つた爲だと云はれて居る。これまた元の李阿彌に還元されてしまつた。

六「左右田」と「村井」の內情

「左右田」は橫濱一流の富豪で、先代「金作」は越後の片田舍から裸一貫で飛出し、一代で數百萬の富を作つた立志傳中の人である。當主「喜一郎」は法學博士で、一ツ橋の講堂に敎鞭を取つたこともあり、數種の著書もある。東京の『村井』とは深い關係があつて、『太平生命』を始め幾多の事業を共同經營して居る。先代が死んで未だ幾年も經たぬのに、早くも凋落してしまつたのは、そゞろに富貴浮雲の如きを思はせる。

「村井」の當主「貞之助」は坂田家から入つて嗣子となつた。先代「吉兵衞」が大正十五年一月三日死亡後、頭取の職を襲つたのである。有名なるクリスチヤンで人格高く、敬慕者あり、銀行破綻と共に鄕里和歌山縣から數名の慰問者が態々上京したほどである。

「吉兵衞」は明治初年に於て卷煙草の寶出をなし、これに依つてよく一代で一千萬圓の富をつくり日本一の煙草王の盛名を贏ち獲たものだ。尤も、其の背後に『三菱』の「豐川良平」があつて、彼の非凡なる才能を認め財的後援をなしたとのことであるけれども、それにしても、其の立志出世の速なりしことは殆ど奇蹟的であるとまで云はれた。晩年には、從何位勳何等の嚴しき肩書までつき、後妻たる「山茶花の局」の郎君として恥づかしからぬ金箔も着いたのであるが、「吉兵衞」死して僅に一年、墳土いまだ乾かざるに其の遺業は跡方も無くなつてしまつた。聞けば「山茶花の局」は輪奐の美を誇つたあの大邸宅を引き拂つた後、當年十二歲の「二代吉兵衞」を擁して湘南の地にあぢけない日を送つて居るとは、また是れ平家の末路にも似たりと云ふべしだ。

七 公爵「松方巖」一門の凋落

背景が最も廣く且つ最も華やかであつただけ、沒落の情景も亦芝居がかりに、多趣多様の場面を見せたのは、公爵「松方巖」の一門であつた。先代「正義公」は有名なる子福長者で、「巖」の外に「幸次郎」「五郎」「正雄」「正熊」「義輔」「乙彦」等多數の男の子を有し、是等の兄弟は、彼が財界に於て有する勢力を背景として、悉く實業界に乘出し、「幸次郎」の「川崎造船所」に於ける、「五郎」の「東京瓦斯電氣」竝に「常盤商會」に於ける等、目覺しき活躍を演じ、其の資金は「十五銀行」の頭取である長兄「巖」の懐から思ふ儘に引出して、天下を我が物顔に振舞うたのが抑もの間違ひ、事業發展と見たのは實は酒氣に浮された亂舞で、醉が醒めて見れば其處に杯盤狼藉たる大きな悲哀のみが取殘された。其の悲哀とは「十五銀行」預金者の怨恨憎惡の反映に外ならなかつた。

八　公爵夫人から褌掛けの世話女房

長兄「巖」は實任感から公爵を拋ち、貴族院議員を辭して、全財産、擧て明治天皇が行幸せられたといふ彼の由緒ある大邸宅まで提供し、那須の牧場に身を潛めて謹愼の意を表し、餘生を送らんと計つたが、それすら良心の苛責に堪へぬとあつて、其の六萬町歩の牧場までも投出し、澁谷邊の路

次奥に借家住居をなして、多數の下女下男にも暇を出し、前の公爵は出入に乘合自動車を利用するのが手一杯の生活力、令夫人はといへば褌がけでお勝手元に下り、飯の炊き鹽梅に頭を惱ます程の激變振り、正に休銀重役の典型とすべきであると謂はいへ、初代松方公が六十年の歳月を費して折角築き上げた富と名譽の高峰も歿後僅に四年にして雲消霧散してしまつたのは、獨のカイゼル、露のニコラス皇帝のそれにも比すべき斷末場ではないか。

以上記す所は昭和の成金では無いが、昭和の勞頭に於て、埋沒した著名なる富豪の沒落哀史である。明治維新以來最近に至るまでの目星き出來事は、これで概略述べた積りだ。讀者之に依つて他山の石たるを得ば、筆者の望みは足りるのである。

銀行會社發達史

明治初期の事業界

一　事業界發展の時代別

古い文句だが何といつても浦賀沖頭一發の砲聲は我國に取り劃時代的のものであつた。それは政治上・思想上・社會上の劃時代なものであつたばかりで無く、經濟的にも實に乾坤一擲とも稱すべき劃時代的のものであつた。維新前の我國の經濟組織が如何なものであつたかは、今更こゝに說く必要も無い程である。各個人が共同出資により若くは一個の大資本投資により營利事業を經營することは、勿論維新後のことであつて、しかも維新後と雖も其の初期に於ては幼稚そのものであつた。それが明治二十七八年の日淸戰爭に至り、漸く事業界なるものが其の發達の緒につき、次いで日露戰爭から歐洲大戰、若くは歐洲大戰勃發當初から今日に至り、漸次殷賑を極むるに至つたのである。それで此の維新當時から今日までの事業界を劃時代に見れ

ば、さつと左の四つに區劃し得られるやうである。

一　搖籃時代（明治維新から日淸戰爭前）
二　第一次發展時代（日淸戰爭から日露戰爭前）
三　第二次發展時代（日露戰爭から歐洲大戰前）
四　第三次發展時代（歐洲大戰から現今）

これによつて我國に於ける事業界發展の趨勢を覩ふに、其處に戰爭と離るべからざるところの密接な關係があることを知るであらう。卽ち維新當時に於ては上野彰義隊事件から西南戰爭・臺灣征伐といふが如き時代に於て、我國の事業界は漸く搖籃時代に入り、此間に我國今日の大事業・會社若くは銀行を生んだのであつた。「三井」「住友」が此時既に其の豐富なる資力を以て今日の「三井物産」乃至「三井銀行」若くは「住友銀行」の素因をなしたことは勿論、「三菱」「大倉」「安田」が彰義隊から臺灣征伐にかけて其端を爲して居るのである。しかして日淸戰爭から日露戰爭前にかけて、是等の大富豪・大事業會社の基礎が漸く鞏固の度を加へ、且つ其他大小幾多の事業會社・銀行は簇出したのである。況んや日露戰爭から歐洲大戰乃至大戰後に至る事業界の發展は實に隔生の感があつた

のである。

二　銀行會社の濫觴

試みに其の明治維新當時からの事業界發展の概況を述べよう。

我國に於て事業會社が初めて創設せられたのは、明治二年に『開商會社』と『回漕會社』の二會社が創立せられたのを嚆矢となすのである。それから銀行業務を營む『爲替會社』が銀行業の濫觴をなした。これは政府が當時の富豪を勸めて東京・大阪・及び京都の三府竝に各開港地に設立したもので、維新前まで幕府の御爲替組を勤めた『三井組』『小野組』『島田組』などが主となり、京阪地方の素封家商人と協力し各資本金を分擔出資して市場の金融を行ひ、且つ貿易業の發展を期するために貸付・預金・爲替等の業務を營む組合であつて、政府はこれが保護奬勵のために太政官札を會社に貸付け、また準備金を置いて金券・銀券・錢券・洋銀券を發行する特權をも附與した。これが我國に於ける銀行紙幣の濫觴である。其の當時會社の發行した各券の總額は八百六十萬九千五百九十五兩に達したと言はれて居る。是程までに保護した會社も經營が巧く行かなかつたので創立四年にして

解散したのであつたといふのは、紙幣發行權を濫用して紙幣過發の結果、紙幣の價値を下落せしめた結果に歸するのである。

次に『回漕會社』と『開商會社』とは、どんな會社であるかといふに、此の兩會社とも、『三井組』が政府の慫慂により設立したもので、通商司に直屬し、『開商會社』は東京と大阪に於ける紙・砂糖・油類・木綿・肥料等の諸商品の相場を立て、定期賣買をするのを目的とするもので、所謂『取引所』の濫觴をなしたものである。

我國で鐵道の敷設に着手したのは明治三年で、其の資金は外債を以て當初東京横濱間の工事に着手したのであつた。

大體以上のやうなものが維新當時に於ける我國事業の濫觴をなすものであるが、其後明治五年には例の國立銀行條令が制定されて、爲替會社濫發の紙幣整理に着手し、また明治六年には今日の兜町取引所のところに『東京商社』なるものが設立せられて商品の賣買を行つたのであつた。

斯くて我國の事業界は漸く其の揺籃時代に入つたのであるが、しかも是等の事業は明治十三四年頃までは本邦事業界の「官營時代」、若くは「模範時代」であつて、殆ど總ての事業が政府の保護指導

なくしては一として設立し得ず、たとひまた彼の爲替會社の如く政府の保護指導があつてすらも、なほ却つて破綻するが如き脆弱さであつた。それでも明治二年以來十三四年にかけて發達の萠芽を出した事業の種類は鐵道・採炭・採礦・造船・機械製絲・絹絲紡績・製紙・セメント・硝子・洋紙等の各事業であつた。

三　官營から民營に

然るに政府は明治十三年頃から事業會社助長に關する方針を一變し、從來政府の指導經營になつて居た事業を漸次民間に排下げることになつた。斯くて我國の事業は官營から民營に移り、民間事業興隆の序幕は開かれて、國民の企業心の擡頭・國民の經濟思想の發達が漸く顯著なるものあるやうになつたのである。

卽ち明治十年頃には事業會社の組織極めて少く、僅に四十五萬三千餘圓、十一年には八百九十萬圓に過ぎなかつたものが、十四年には二千八百萬圓、十五年には五千百萬圓に激增したが、斯く事業の勃興と共に生產力も著しく增加した。其の主なるものでは『足尾銅山』が明治四年に民間に移

つても其の經營が面白くなかつたものが、十年に「古河市兵衛」の有に歸してから頓に盛大となり、また『王子製紙會社』は明治五年を以て創立せられて洋紙製造業の開祖となり、『東京瓦斯局』は明治七年に起り、『石川島造船所』は明治九年に海軍の管理から民間の經營に移り、保險事業の鼻祖である『東京海上保險會社』は明治十二年に設立せられ、十三年には『橫濱正金銀行』を始め『東京馬車會社』を設立され、十四年には『日本鐵道會社』の設立を見たのであつた。十五年から十七年にかけては政府の紙幣整理に對する反動的不景氣を招來し、事業會社の資本金の如きも十五年の五千百萬圓から十七年には千七百萬圓に激減したのであるが、しかも十九年には紙幣の正貨交換が開始せられたので俄に財界は景氣づき、鐵道を始め各種の事業が勃興し、十九年に於ける鐵道・銀行・會社の總資本金一億三千九百萬圓であつたのが、二十二年には二億八千萬圓となり、僅々三ケ年間に一億五千萬圓からの激增をなしたのであつた。

しかも此間明治二十三年三月には商法が發布せられ、商事會社に對する制度確立し、また二十六年七月には銀行條令の實施により普通銀行發展の新時期が到來し、且つ同年取引所法も制定せられたやうな譯で、我國の事業界も漸く玆に其の第一步を步み出さんとするの趨勢となつたのである。

試みに明治十年から日清戰爭勃發前の明治二十六年に至る間の事業發達の狀勢を見れば左の如くである。

（事業別）	（明治十年）	（明治二十年）	（明治二十六年）
「商業」	四五四	五一、七〇七	五六、六一六
「銀行」	二四、九八一	七三、一九九	一一一、六三五
「工業」	—	—	六八、二五九
「鐵道」	—	—	五七、九四五
「農業」	—	—	二、五四二
計	二五、四三五	一二四、九〇六	二九六、九九七

即ち明治十年に於ける銀行會社の公稱資本額は、僅々二千五百四十三萬一千圓に過ぎなかつたものが、十年後には五倍の一億二千四百九十萬六千圓となり、更に十五年後には實に十二倍の增加を示したのであつた。以て事業發展の一端を窺ふに足りるのである。

日清戰爭前後

一 戰前の事業界

日本は神國である、大和民族は特別製の大和魂といふものを持合せて居ると威張つて見ても、さて愈々世界の何分の一かの國土を領有する支那大國と干戈を交ふるといふ段になると、一種いふに言はれぬ不安の氣を漲らして居た。しかも其間、日支の風雲は刻一刻に急を告げ、遂に明治二十七年七月二十八日豐島沖の海戰に國交は斷絶し、八月一日宣戰の詔勅は發せられたのであつた。

顧つて此間に於ける財界の事情を觀ずれば、戰爭直前の二十六年に於ける事業界の活躍は前表の如く事業計畫公稱資本金三億八百餘萬圓に達したのであるが、此中でも鐵道・炭礦及び銀行業の發達は著しいものであつた。此時に於ける鐵道の延長は官私線を合せて二千哩に達し、機關車三百五十臺を運轉せしめ、また汽船は登錄船十七萬噸に達した。又此の時代に於て鐵道國有論が猛烈となり、朝野の間に於て賛否兩論囂々たるものがあつた。尤も此の鐵道國有論が起つたのは明治二十

二三年頃からで、二十三年の議會には佐藤里治氏から鐵道國有に關する建議案が提案せられ、百六十七人からの贊成者を得た程であつた。また板垣退助伯の如きも自から意見書を發表して鐵道國有の必要を高唱した。しかし板垣伯のは別として議會に於ける國有案提案の如きは其裏に裏あり底に底あつて、例の關西鐵道株煽りの魂膽等も多分に含まれて居り、それに中野武營氏を始め議會に於ても猛烈な反對運動が起つたりして遂にオヂヤンになつたのであるが、しかも此の國有問題は年一年に朝野の間に猛烈となり、日清戰爭前に於ても投資事業として鐵道事業が比較的堅實であると見られ、鐵道熱が猛烈となるに連れて此の國有論も隨つて猛烈となつて來たのであつた。

此外銀行數は七百六十三行、拂込資本金（前表は公稱資本金）九千四百五十一萬二千圓、預金一億一千五百十一萬四千圓に達した。試みに其の種類別を見れば左の如くである。

（行別）	（行數）	（拂込資本金）	（預金）
「日本銀行」	一	一〇、〇〇〇千円	三、六三四千円
「横濱正金銀行」	一	四、〇〇〇	七、一八四
「國立銀行」	一三二	四八、五〇六	五九、八三三
「普通銀行」	六〇四	三一、〇三〇	三八、四二六
「貯蓄銀行」	二四	五六六	六、〇三五
計	七五二	九四、一〇二	一一五、一一二

斯く事業界の發達に對して日清戰役の勃發は一面軍事關係事業である採炭・造船等の事業を活躍せしめたのであるが、未だ一方には金融上の壓迫・軍事輸送による海陸運輸の不圓滑・且つ勞力の缺乏を來さしめて、いはゆる平和事業たる銀行其他の事業の發達を甚しく阻害したのであつた。

二 泡沫會社の濫興

しかし日清の戰端も二十八年春に至りて漸く終熄し、四月十七日には平和條約締結せられ、續いて八月には講和條約の批准が取交はされるやうになり、殊に例の三國干渉も案外事なく終つたといふので、玆に人心の不安も漸く薄らぎ、しかも三億七千萬圓からの償金は同年十月から三十一年五月八日まで五回に亙り分濟を受くることとなつたので、既に大捷に醉へる人心は益々昂進し、且つ二十八年六月までは毎月一千二三百萬圓から拂ひ込まねばならなかつた軍事公債も六月を以て終了

したといふのであるから、玆に民間資金は益々潤澤となり、斯くて事業界は旺然として活氣を呈し來つたのであつた。

共上に日本銀行は二十九年七月には突如割引公定歩合を二厘方引下げ二錢となし、總裁「川田小一郎」氏は、

「戰後の急務は產業の發展にあり、日銀は之がためには極力融通をなすであらう」

と產業資金に對する貸出緩和を聲明し、暗に投機熱を煽つたのであるから、企業熱といふか投機熱といふか、市場はまさに熱狂し亂舞したのであつた。

此時であつた。例の成金が簇出したのは——。何しろ參謀本部の地圖一枚とメートル尺一本あれば二三日の中に五六百萬圓の鐵道會社が出來上つたといふ有樣であつた。こんな有樣で、二十八年一月から二十九年末に至る二ケ年間に泡沫會社の計畫されたものは十二億八千萬圓に達した。そして其の事業は鐵道が主で、銀行業が次位にあつたと言はれて居る。斯く泡沫式な事業計畫の外に、比較的堅實と言はれるものでも實に次の如く事業會社の資本金が增加したのであつた。

（年次）　（社數）　（拂込資本）　（公稱資本）

明治二十七年	二、七九二	二四九、七六二千円	三二三、九一五千円
明治二十八年	三、三二二	四一〇、六六一	四八九、〇〇二
明治二十九年	五、九二五	六一九、二二三	三九八、五六四

卽ち二十七年と二十九年とを比較するに、會社數三千百三十三、公稱資本金二億九千五百三十萬八千圓、拂込資本金一億七千四百八十萬一千圓を增加したのであつた。

三「日銀」正貨の激減

斯うした事業界の亂舞時代は、到底永續すべきものでは無かつた。殊に此の投機界の亂舞につれて知らず識らず笛吹いた銀行屋は信用の濫用・貸出の膨脹となり、それがまた自然に回收困難・資金固定となつて、玆に財界反動期となつて現れて來たので、殊に此事が貿易の逆調と正貨の流出によつて端をなしたのであるが、それが明治三十年に入つて間も無いことであつた。卽ち明治二十八年中の貿易は、輸出一億三千六百萬圓、輸入一億二千九百萬圓、差引七百萬圓の出超を示したものが三十年には五千六百萬圓、三十一年には一億一千百萬圓からの入超を見るに至り、斯くて「日銀」

の正貨準備は二十九年末の一億三千百萬圓から三十一年五月には六千二百萬圓に激減したのであつた。玆に於て金融逼迫・株式低落・各種の事業は愈々經營難に陷り・財界救濟の聲は喧々囂々たるものであつた。こゝに於てか時の大藏大臣「井上馨」侯は左の如き財界救濟に關する聲明をなしたのであつた。

(一)政府は財界の許す限り、勸業銀行をして貸出をなさしむること、卽ち勸業銀行の債券は政府に於て之を引受け、且つ從來の貸付は一口十二萬圓を超過すべからずとの內規を擴張すること。

(二)日本銀行をして償金の一部を以て公債の買入をなさしめ、以て資金の融通を圖ること。

(三)日本銀行の金利は今後現率以上に引上げざること。

此の結果として政府は六月一日から約三千萬圓の公債買入、及び勸業銀行は百五十萬圓の事業資金の貸出に應じたのであつた。殊に三十二年の五月には一億圓の外債が成立したので財界は漸く玆に小康を得て、「日本銀行」の正貨準備も三十一年五月末の六千二百萬圓から三十二年八月には一億三百萬圓と增加したのである。斯くて金融も順調に歸り株式界の恢復・起業熱の勃興となり、左の如き趨勢を呈したのであつた。

(年次)	(社數)	(公稱資本金)	(拂込資本金)	(增加)
「明治二十九年」	四、五九五	六一九、二二三千圓	三九七、五六四千圓	一〇八、五六二千圓
「明治三十年」	六、一一三	八五二、九七二	五三二、五二二	一三四、九五七
「明治三十一年」	七、〇四四	九三〇、八三五	六三、六七六	九〇、一五四
「明治三十二年」	七、六三一	一、〇二八、二九九	六八三、七二〇	六二、〇四三
「明治三十三年」	八、五九八	一、一二七、八二二	七七九、二五一	九五、五三一

四　明治三十四年の大恐慌

しかし此の三十二年に於ける企業熱の勃興したのは、眞に財界が整理恢復したためでは無かつた。又二十八九年に於ける泡沫會社濫設の時代に於ても、財界の根柢には甚だ不健全なものが伏在して居たことは勿論である。卽ち二十八九年の景氣も三十二年の景氣も、共に後に來るべき有名なる彼の三十四年の大恐慌の禍因を醸すものに過ぎなかつた。

蓋し二十八九年と、そして三十二年の景氣の主因は、償金三億七千萬圓と一億四千萬圓の外債、合計五億餘萬圓の外債流入に基くものである。それから又他の重要なる原因は世界に於ける金産額の增加による物價騰貴と、我國に於ては『日本銀行』の保證準備額を一億二千萬圓に增加（三千五百萬圓增加）したために『日銀』の兌換券は著しく增加し、正貨準備高は遂に兌換券發行高の三分の一以下となつたのである。斯くて通貨膨脹による物價の騰貴・金利の高騰は三十四年四月には其の最低率さへ三錢一厘に上り、實に我國金利史上の最高記錄を作つたのであつた。

こんな有樣であるから株式市場の情勢も推して知らるゝ譯で、三十三年の最低株價は二十九年の最高株價に比して『關西株』は二分の一以下に、『炭礦鐵道』と『郵船』は二分の一近く、『鐘紡』は六割强、『東株』は五分の一强を、それ〳〵激落したのであつた。

加ふるに三十三年六月には北淸事變あり、綿糸其他對支貿易に一大打擊を與へ、關西地方は何となく險惡となつて居たところへ、恰も同年十二月二十五日に『熊本第九銀行』の破綻が曝露したので、玆に恐慌の第一ページが開け、それからは燎原の火のやうな凄じさを以て、關西一圓は勿論、關東にまで飛火したのであつた。卽ち『第九銀行』の支拂停止から『熊本貯蓄銀行』の支拂停止、『百

五十一銀行』といふやうにパニックの慘風は吹き捲り、更に進んで、『久留米六十一銀行』は危險に瀕し、九州一體の信用は地に墜ち、同方面の手形は一時流通杜絶の姿であつた。

九州を始め關西一體の事態斯くの如くであるから、關東方面、就中、東京・橫濱方面は絶えず不安の氣に閉されて居た折柄、橫濱の『蠶業銀行』は三十四年一月六日に破綻を曝露し、これがため惹いては橫濱の『第二』『七十四』及び『東京貯藏銀行橫濱支店』の取付となつた。しかし火は更に東京及び關東一帶に及び、『東洋貯蓄銀行』『愛國銀行』の破綻となり、又『埼玉縣貯蓄銀行』の支拂停止、其他京濱・關東地方で平素業態を怪まれて居たものは殆ど一として取付に遭はないものとては無く、彼の『東京商業銀行』及び『新橋銀行』の休業したのも此時であつた。

しかして此の取付騷ぎの最も甚しかつたのは、何といつても關西地方であつて、是等の破綻實情に至つては、後章『銀行破綻史』の部に於て詳述するであらう。

兎に角三十四年の大恐慌は、後年大正九年・昭和二年の恐慌にも增して深酷なるものあり、我國今日までの恐慌史上の最大記錄とも言はるべきものであつた。殊に銀行の破綻に次いで事業界の困難も亦著しく、大阪方面では『關西貿易會社』の倒產・石炭商の破產・洋反物商の窮迫等、名

狀すべからざるものあり、關東方面では機業地は到る處に倒産休業續出し、京都・大和・河内・名古屋地方等も危機に瀕した。神戸地方では鱗寸業・各地陶磁器業・煉瓦・硝子製造業・鐵工所等も窮迫其極に達した。

斯くの如き慘澹たる恐慌も三十四年の五月に至つて漸く終熄した。しかして此の恐慌による財界、殊に事業界の傷痍は實に深酷なるものがあつた。

日露戰爭前後

一 戰前竝に戰時中の財界

恐慌後の財界は極度の沈衰時代となり、人心は底知らぬ闇に彷徨するの觀があつた。しかし又一方には此の恐慌により多年財界の內部に蟠踞して居た總ての惡資料を一掃したかの觀あり、恐慌翌年の三十五年には先づ第一に貿易狀態からして順調に復しつゝあり、殊に同年二月十二日に日英同盟條約が發表せられたので、遽に市場は蘇生したやうな觀を呈してはいやいだのであるが、そ

れも一時的なものに過ぎず、それに偶々日英同盟に對抗して露佛同盟が成立し、また政府は突如として勅令第百五十八號を以て打壞令を發布し、取引所の一割以上の配當に對して制限を與へたので、さなきだに甚しく人心を萎微させたのである。併し九月末には政府が『興業銀行』の手を經て、五千萬圓の既發內債を海外に賣却したので、玆に漸く外資の流入となり『日銀』は三十六年三月十八日までに三回に亙り金利引下を行つたので、人氣も始めて平穩に歸し、景氣復興の機運も認められるやうになつたのである。

しかも此間に日露の國交は益々險惡となり、此の方面に對する財界の懸念となつて現れたのであるが、果然、三十七年二月六日の我最後の通牒に依り國交は玆に斷絶したのであつた。しかも九日仁川沖の大捷を報じ制海權は我が手中に掌握したのであるから、戰爭の全局からすれば頗る我に有利となつた譯であるが、しかも財界は此前の日清戰爭のやうな考へでは行かず、戰局の前途遼遠にして、何時終熄するとも測り知ることを得なかつた。それで國民は擧國消費節約を行ひ、一般商工業は軍需品及び日用必需品の外は極度の不振に陷り、殊に京都・西陣・桐生・足利等の絹織物生產地は概ね工場閉鎖の外なき狀態となり、且つ大阪で例の『百三十銀行』の破綻曝露等、すべてが益々事

態を惡化せしむる誘因となつた。

しかして三十七年二月六日から三十八年五月二十八日に露國聯合艦隊の對馬海峽に於ける全滅までの十六ケ月間を以て未曾有の戰局は玆に終了し、越えて九月一日遂に休戰條約の締結を見るに至つたのであるが、此間に於ける國民の經濟的負擔は外債・一般會計剩餘其他の資金繰入等は全部控除した計算でも、軍事公債六億七千萬圓、營業稅其他の增稅一億三千六百萬圓、合計八億圓に達したのであつた。これを日淸戰爭の負擔額軍事公債八千萬圓に比すれば、實に十倍の負擔增加となつて居るのである。尤も國民の經濟力は日淸戰爭のそれに比すれば甚しく增加して居る。試みに日淸戰爭直前と日露戰爭直前との經濟力を比すれば左の如くである。

	(日淸戰爭直前)	(日露戰爭直前)	(增加率)
「會社拂込資本金」	二四九、三八八千圓	八八七、六〇六千圓	三、五五倍
「銀行預金」	一一、四七九千圓	七五一、四二八千圓	六、七四倍
「鐵道」	一、九二五哩	四、四八五哩	二、三三倍
「汽船總噸數」	二〇二千噸	九七九千噸	四、八二倍

「貿易額」　一七七、九七〇千圓　六〇六、六三七千圓　三、四一倍

二 戰後の熱狂時代

日露戰爭は三十八年五月二十八日對馬海峽に於けるバルチツク艦隊の全滅によつて事實上終了した。しかも其の二ケ月前の三月に外債三億圓、二ケ月後の七月に同じく三億圓、また三十九年に入つては前後二回に四億八千萬圓の外債が成立し、最初からの分を合すれば前後六回に合計十二億六千九百萬圓に達したのであつた。それに三十九年の議會に於て審議の懸案であつた鐵道國有問題が成立し、また之と相前後して『東京電車』『東京電氣』及び『東京市街』の三電車會社の合併談行はれ、且つ政府は國庫債券二億圓の償還を行ひ、民間外債も六億四千萬圓からに達し、市場は好材料橫溢といふ形勢を呈したのであるから、これで以て市場が熱狂し事業熱の勃興せざる理由なく、此時『北海炭鑛株』は三十八年七月の最高九十六圓九十錢から四年十一月には百七十三圓に、『郵船』は九十九圓から百五十四圓に、『鐘紡』は九十八圓から二百九十九圓に、『東株』は二百六十八圓五十錢から七百八十圓と暴騰したのであつた。また事業そのものも、例へば紡績業の如き日露戰前の明治三

十六年には純益一割強に過ぎなかつたものが、明治三十八年には三割六分、三十九年には四割近くになつたのであつた。

斯くて事業熱は愈々熾烈となり、當時に於ける事業會社の新設擴張計畫は左の如くである。

	（新設）	（擴張）	（合計）
明治三十八年（下半期）	六一、五一四	八九、四二八	一五〇、九四二
明治三十九年中	七八一、一〇三	二二〇、四七三	一、〇〇一、五六七
明治四十年（上半期）	七三、九七一	一六一、八二三	五四五、七九四
明治四十年（下半期）	八四、一二〇	五四、八六二	一三八、九八二
明治四十一年（上五ヶ月）	三三、一四八	二九、五〇五	六二、六五二

即ち事業熱の最も熾烈であつたのは三十九年下半期であつたが、三十八年下半期から四十一年上五ヶ月までの事業計畫資本額は、新設十三億三千三百萬圓、擴張五億五千五百萬圓、合計十八億八千八百萬圓に上り、以て當時の企業熱が如何に熾烈であつたかを想像し得られるのである。然らば此の新資本は如何なる方面に投ぜられたかといふに、其の內譯は左の如くである。

	（新設）	（擴張）	（計）
「製造工業」	六五一、〇三四	二三九、七二七	八九〇、七六二
「銀行」	五七、六四〇	一〇二、五三二	一六〇、一七二
「運輸」	三九二、八〇四	一三四、三六九	五二七、一七三
「商業其他」	二三二、三七八	七九、四六三	三一一、八四一

即ち製造工業と運輸事業が最も熾であつたが、これは製造工業の中でも特に紡績業の如き、或は運輸の方面は鐵道事業が主であつて、例へば『南滿鐵道』の如き九萬九千株の公募をしたのに對し、應募株數實に一億六百七十三萬に達し、其の應募超過額は一千〇七十八倍、一人當り九萬九千株の應募申込であつたといふことによつても、當時の株式熱といふか企業熱といふかの熾烈なことを知り得る譯である。

三　熱狂後の悲哀

こんな熱狂場面の裏に恐るべき恐慌が潛んで居ることは言ふまでも無いことで、果然四十年一

月十八日の相場が崩壊を始め、それからは止めんとするも止め得るものでなく、土崩瓦解、一月の最高値『郵船』が百五十四圓六十錢から十二月には七十七圓に落ち、『東株』は七百八十圓から憐れ九十一圓六十錢となり、『鐘紡』も二百九十九圓九十五錢から七十七圓七十錢に墜ちたのであつた。斯くて三十九年を絶頂として折角出來かゝつた事業會社も大半泡沫の如く消え失せたのであつた。

そして此時に於ける成金の凌落また悲慘の極みであつた。しかして、また全國に於ける銀行の破綻休業した數は四十行にも及んだ。卽ち先づ第一に『百三十八銀行』が整理のために休業し、續いて『扶桑銀行』『東西銀行』『永代銀行』等の陷沒あり、地方に於ては『信用貯蓄』『甲府銀行』等が支拂停止をなし、それから九州・名古屋と續々として破綻銀行を出したのであつた。

事態かくの如くであつたから政府も遂に財界救濟の措置に出づることゝなり、明治四十一年に先づ國庫債券一億圓の現金償還を行ひ、更に四十二年には、時の首相「桂太郎」は國債償還資金繰入額が六千萬圓に增加すると同時に、六千萬圓の公債償還を行つた。また四十三年には國債の四分利借替を計畫し、五月九日に四億五千萬フランと一千一百萬ポンドの四分利外債を英佛兩國に於て募集し、これを以て裏書公債として海外に賣却した五分利九千三百萬圓、內地にある一億九千萬

圓の現金償還を行つた。此のために二億圓からの外資が流入し、且つ內地に於ける公債の現金償還は沈衰しかけた事業界を漸く復活せしめ、政府の公債政策は非常な成功を以て迎へられた。そして事業界は陣容を整へて歐洲戰亂に際會したのであつた。

歐洲大戰前後

一經濟力の完成

歐洲大戰直前から大戰後に至る我國の經濟界は所謂第四期の發展期に入つたものであつて、我國の經濟力としては既に完成圈內に入つたものと云ひ得るのであつた。殊に列國の講和會議が華盛頓に開かれるや我國が五大強國の一として兎も角も大きな顏をして居られた程に國力が發展した如く、我が經濟界もそれだけ發展したのであつた。顧れば猿面冠者「太閤秀吉」が一戰は一戰より其の勢力を增した如く、我國の經濟力は彼の上野彰義隊の戰爭から歐洲大戰まで大小幾回に亙り砲火を交へ、それが一戰爭毎に其の勢力を張つたのであつた。

歐洲大戰直前たる大正二年頃の財界は前にも述べた通り、政府の公債政策が機宜を得たので漸く安靜狀態に入り、それが大戰となり、しかも我國の立場は交戰國の一とはなつたが、何方かといふと中立的立場にあり、聯合國に對し、軍需品其他船腹の提供をすれば足れりといふのであるから、戰爭が經濟的影響に幸ひしたことは甚しいものであつて、それで戰時中にも戰後にも企業界は白熱狀態となり、大正五年以後の五ケ年間に於ける會社の新設擴張計畫の資本金總額は實に百五十六億四千二百餘萬圓に達した。しかして之を明治二十七年以來パニック直前の八年までの發展の趨勢を見れば左の如くである。（單位百萬圓）

	（明治二十七年）	（明治三十六年）	（大正二年）	（大正八年）
「農業」	一	二	二六	七六
「商業」	一二一	四五一	九三一	二、四六〇
「工業」	四四	一七〇	八一四	二、七二〇
「運輸」	八二	二六二	二一〇	七一六
「總計」	二四八	八八五	一、九八一	五、九七二

◇備考　前記の表中、工業には鑛業も含む。

これを以て見れば我國の事業界は過去半世紀に亙り幾波瀾を繰返しつゝも、兎に角、異常なる發達を遂げたのであつた。而して第一期發展時代の中心事業は銀行及び運輸といふが如き基礎的産業にあつたが、發二期以後に至つては其の中心は工業に移り、我國は從來の農業から今日に於ては工業國としての世界的地位を得んとしつゝあるのである。

二　海運界の黃金時代

歐洲大戰が勃發するや海運界は空前の殷盛を極めた。それは米國から極東から、軍需品は間斷なく輸送せられ、船腹はどれだけあつても猶ほ足らぬといふのであるから、蓋し當然のことであらねばならぬ。かくて船齡期は疾の昔に過ぎて居るボロ船でも噸何百圓といふ野放圖もない値を出し、いはゆる船成金と稱した手合は概ね此のボロをしこたま掻き蒐めたものである。

此の當時に於ける運賃の騰貴狀況を見れば左の如くである。

一、近海航路（門司橫濱石炭一噸平均運賃）

「石炭」　（大正二年）　一、〇六三

海運界の黄金時代

二、遠洋航路（輸出雑貨一噸）

	（戦前）	（戦時）	（大正七年末）	（大正七年）
欧洲（定期）	五〇志	九〇志九斤	九〇志九斤	八、三五〇
欧洲（臨時）	五〇志	八〇〇志	六〇〇志	
濠洲（定期）	二〇志	五〇志	五〇忘	
濠洲（臨時）	二〇志	二八〇志	二二〇志	

即ち近海航路に於ては大戦直前に比し、大戦後の七年は約十一倍に騰貴し、また遠洋航路に於ては欧洲臨時航路は戦時中は約十八倍、戦後は十二倍、濠洲航路も戦時中十四倍、戦後十一倍の名騰貴を示して居るのである。次に傭船料の騰貴状況を見るに左の如くである。

	（戦前）	（大正三年）	（大正七年末）
大型船	—	七七一	四七、〇〇円
中型船	一、五〇		三九、〇〇
小型船	—		二八、〇〇

また船価の騰貴状況を見れば、

	（戦前）	（戦時中）
新造船（重量一噸）	九〇円	一、〇〇〇円
中古船（重量一噸）	四五	八〇〇

斯くの如き素破らしい騰貴振を示したのであるから、随つて玆に船成金なるものが出來た譯であるが、しかも此の激昂騰の原因は交戦國の徴發船が二千數百萬噸に達せること、獨逸潜航艇のために撃沈せられた商船が、開戦以來大正七年末に至るまでに普通海難喪失船を合して實に一千百八十五萬五千噸に達したこと、竝に開戦以來に於ける通商航系の破壊、從つて航運系の破壊に基く航海距離の延長による世界船腹の大拂底を主たるものとするのである。

斯くて從來沿岸乃至近海航路に跼蹐して居た我が社外船主等は、恰も天馬の空を駛けるの勢ひを

以て、世界の各方面に其の活動區域を擴め、保護會社また非常な勢ひを以て其の航海權を擴張した。しかも斯くの如き斯界の殷盛時にあつても政府は依然として其の海運保護政策を拋棄せず、却つて航路補助法の運用を盛ならしめ、此の機會に於ける我が海運業の基礎を確立するに努めたのであつた。其の結果、政府の補助航路はジヤバ、カルカツタ線を始め十一線、獨立航路はリバープル線を始め七線の新航路を開拓し、船舶の增加狀況は左の如く著しきものがあつたのである。

	(大正二年末)	(大正七年末)	(大正八年末)
隻數	三五、八一三隻	四四、二五二隻	四七、七一〇隻
噸數	二、三五六千噸	三、六〇三千噸	四、一二一千噸

然るに歐洲戰亂の終熄するや(一)交戰國徵發船の解除、(二)英佛其他各國の船舶復興計畫、(三)戰時中大造船計畫を樹てた米國新造船が續々進水したこと、(四)本邦其他各國の造船計畫による新船の進水、(五)戰時中破壞せられた航通系統が漸次復舊して來た等のために世界の船腹は急激に增加し、加ふるに大正九年の恐慌により荷動きの著明なる減少を來し、休戰により低落した運賃・傭船料竝に船價は慘落を演出したのであつた。即ち

一、近海航路(石炭一噸)

	(大正七年中)	(大正七年末)	(大正十年末)	(大正十一年末)
門司横濱	一〇、九三円	八、三五円	三、四八円	一、八〇円

二、遠洋航路(輸出雜貨一噸)

	(大正七年末)	(大正十一年末)
歐洲(定期)	九〇志九片	七五志
歐洲(臨時)	六〇〇志	—
濠洲(定期)	五〇志	六〇志
濠洲(臨時)	二二〇志	—

三、傭船料

	(大正七年中)	(大正九年末)	(大正十一年末)
大型	四七、〇〇円	五、〇〇円	引合無
中型	三九、〇〇	二、二五	二、五〇

小　型　　二八、〇〇〇

四、船　賃　　三、〇五　　二、九五

（大正七年末）　（大正十年末）　（大正十一年末）

新造船　一、〇〇〇　一二〇　一〇〇

中古船　八〇〇　六〇　五〇

右の如き事情であるから、海運業者が巨額の缺損を曝露し、船成金の凌落するもの續々として相踵いだのであつた。

これを船會社の代表「郵船」に就いて見るも、戰前「郵船」の利益は二百四十萬圓からの航路補助あるに拘らず僅に二割七分の利益を擧げ得たるに、大正七年の黄金時代には實に二十一割四分餘の利益を擧げた。然るに一度休戰と共に海運界の惡化するや、大正十一年三月には九分の利益を擧げ得たに過ぎなかつた。「郵船」にして猶ほ然り、海運界の悲境以て知るべきである。

三　波瀾重疊の製鐵業

歐洲大戰亂が生んだ我國の各種事業中、波瀾の最大なるものは恐らく製鐵業であらう。

歐洲大戰前に於ける我國の製鐵事業は極めて貧弱なもので、一ケ年の生産高は銑鐵二十四萬二千噸、鋼材二十五萬四千噸餘に過ぎなかつた。然るに戰亂勃發と共に鐵類の輸入杜絶は鐵類の市價を（噸當り）

	（戰前）	（戰時中）	（戰後）
銑鐵	三六圓	五五〇圓	五一四圓
丸鋼	七五	四九二	四一七
鋼板（幅四尺長八尺厚一分）	八五	一、二八五	一、二〇〇

して天井知らずに激騰せしめた。卽ち左の如し。

これを以て見れば、銑鐵は十五倍六割、丸鋼は六倍六割、鋼板は十五倍一割を、それ〳〵奔騰せしめた譯である。

斯くの如き鐵價の暴騰は勢ひ斯業の發達を促した譯であつて、製鐵會社の新設せられるものは、それこそ雨後の筍の如く簇出し、戰前には官營製鐵所を始め釜石・輪西・仙人山・栗木の四五個所に過ぎなかつたものが、七年六月末には實に百二十八の多數を算したのであつた。しかも是等の製鐵

能力は各會社の爐數が作業中のもの二百七十九、計畫中のもの百八十六、合計四百六十五の多きに達したのであつた。これに伴うて鐵の生産高は著しく激増した。即ち

	（大正二年）	（大正七年）	（大正八年）
銑鐵	二四二、六七六㌧	六九四、八三八㌧	七九七、〇七五㌧
（內民間）	八三、一五二㌧	四二三、二六〇㌧	五一五、九四〇㌧
（官營對民間割合）	三四％	六一％	六五％
鋼材	二五四、九五二㌧	五三九、六三七㌧	五五七、一八五㌧
（內民間）	三八、七三〇㌧	二三〇、八〇八㌧	三〇六、七九八㌧
（官營對民營割合）	一五％	四三％	五五％

これを以て見るに大正八年を以て大正二年に比較すれば、銑鐵は三倍三割、鋼材は七倍九割の增加を示して居るが、更に之を民間のみの發達の趨勢を見れば、銑鐵は五倍二割、鋼材は七倍九割の增加となつて居る。しかして主なる製鐵會社の休戰直前に於ける成績を見れば、戰前には缺損續きであつた『日本鋼管』は十四割五分五厘、『東京鋼材』は十六割一分、『大島製鋼』は十一割六分の利益

を何れも擧げて居る。

然るに一度休戰の報傳るや市場は慘澹たる修羅場と化し、釜石銑鐵は百六十五圓、丸鋼は百二圓、鋼材は四百五十一圓と釣瓶落しに慘落し、昨日までの鐵成金は今何處といふ感を深からしめた。そして百三十餘の製鐵會社は見る〳〵うちに大缺損・減資・委託經營・倒潰相次いだ。

四　有卦に入つた造船界

海運界の殷賑に伴ひ、造船業の發達は蓋し當然のことであらねばならぬ。歐洲戰前には我國に於て一千噸級以上の造船能力を有するものは六つに過ぎなかつた。然るに休戰直前の大正七年十月には工場數は九倍に增加し、また職工數は四倍となつた。即ち事業者數は五より五十三となり、公稱資本金一億四千萬圓、拂込資本金は八千六百三十萬圓を著增した。斯くて戰亂中若くば戰亂後の造船高は著しく增加し、大正二年の造船高は汽船帆船を合して僅に九萬五千噸に過ぎなかつたものが、五年には既に十九萬噸を越え、六年には五十萬噸、七年には七十萬噸に激增したのであつた。

然るに此間に於て端なくも大正六年七月、米國は鐵類の輸出禁止を行つた。これがために折角殷

盛を極めて居た我が造船業者は勿からぬ打撃を蒙つたのであるが、しかも結果は却つて幸ひに導き、いはゆる米國と我國との間に船鐵交換契約なるものが成立し、我國は米國から既約鐵材十二萬七千八百噸を輸入すると共に我國は米國に對し船舶十五隻、十二萬七千八百噸を提供すること、即ち我國は米國に對し船舶の輸出をすることになつたのである。しかも此の船鐵交換は第一次及び第二次に亙つて行はれ、それは三十五隻、三十七萬四千百萬噸に達し、其の價額は實に一億五千〇十萬五千圓となり、我國造船業者に取つては棚牡丹式の儲け仕事であつたのである。それだから此の當時に於ける造船業者の鼻息の荒さツたら無かつた。

しかしそれもこれも夢であつた。それは一度休戰の聲を聞いたら最後、何の造船所もペシヤンコになり、休戰以來十年六月末までに千噸以上の造船能力を有する造船業者數は三十二を減じて、休戰直前の三割九分六厘となり、工場數は三十を減じて同じく二分の一以下となり、また造船臺數も六十三を減じ職工數は六萬三千人から減少した。斯くて其後どうやら例の八々艦隊計畫で一息吐かうとして居た矢先、また〳〵華盛頓會議で以て軍備縮少を實行することゝなつたために、いよ〳〵造船業者は眼も當てられぬ慘めな狀態となつた。即ち試みに「川崎造船」「大阪鐵工」「浦賀船渠」「橫濱船渠」「石川島造船」といふ五大會社の業態を見ても、大正七年下半期には十五割三分餘の利益を擧げて居たのが、十一年上半期には僅に一割六分七厘餘の利益を擧げ得るに過ぎなかつた。五大會社ですら此の調子であつたから、他の弱小會社の業態が休戰後如何に慘澹たるものであつたかは推して知るべきである。

五　銀行の發達趨勢

更に飜つて事業の中樞神經たる銀行業の發達の狀態を見るに、歐洲大戰が我が銀行業に及ぼした影響は實に驚くべきものがあつた。即ち大正十年末に於ける我が銀行の資力を戰前である大正二年のそれと對比するに、先づ兌換券發行高に於て大正二年末の四億五千三百萬圓から、戰後好景氣の絶頂たる八年末には十六億二千萬圓、十年末には十五億九千五百萬圓に激增し、六ケ年乃至八年間に十一億四千萬圓乃至十一億六千萬圓の增加を示したのである。

次に全國銀行の拂込資本額を見るに、明治三十六年末から大正元年末の間に一億九千五百萬圓を增加したのに對し、大正二年末から大正十年末に至る間には十一億二千萬圓と五倍七割四分を增

加した。また全國總預金高を見るに、同じく明治三十六年から大正元年までに十二億九千萬圓を増加したのに、大正二年以降大正十年末までに八十一億二千三百萬圓、卽ち六倍二割九分を増加した。又全國の總貸出高を見るに　日露戰爭前後の十七億圓を増したのに對し、歐洲大戰前後は七十七億七千萬圓と實に四倍五割六分の増加を示したのであつた。

しかして銀行業をして斯く發展せしめた根本理由は國際貿易の好轉に外ならぬ。然らば此の當時に於ける國際貿易は如何といふに、大正四年から七年に至る四ケ年間の商品出超累計は十四億〇八百萬圓に達し、また四年から九年に至る六年間の貿易外の受取勘定累計は二十二億一千萬圓に上り、此の貿易上の出超による受取勘定と貿易外の受取勘定との合計は實に三十六億二千餘萬圓に達し、これが歐洲大戰中竝に大戰後に我國が獲得し得た總勘定であつて、斯くて我國は從來の對外支拂國から受取國に刎ね上つたのであつた。しかも斯くの如く我國が國際貿易上に活躍し、我國をして未だ曾て經驗したことなき債權國といふが如き有利の地位に導き得たことは一面我國に於ける銀行業者が此の大局に於て善處し得た結果であると言はなければならぬと云ひたいのであるが、必ずしもさうでは無かつた。故に此の三十六億圓といふ大出超が後年、卽ち大正九年三月のパニツク

を誘導すべき大陰影を既に此時に於て釀して居たのであつた。

盖し此の三十六億圓といふ大出超金融を當時如何にして處理し得たかといふに、それは一にも二にも政府の手を煩はしたのであつた。卽ち爲替銀行は出超金融を日本銀行と市中のコール・マネーを以て調達したのであるが、しかし此の最後の決濟は常に政府の手に依つたのであつた。それは政府が國庫金若くは其他の政府勘定資金を以て全部の輸出によつて得たる在外正貨を借入れたのであつた。斯くて此の當時、政府が買上げた在外正貨の總額は十四億圓からあつたと言はれて居る。

政府が斯く國庫若くは其他の資金を以て買上げることは善しとしても、其の結果は當然內地に於て通貨の大膨脹を來すは復止むを得ぬことである。斯くて前に述べた如く日銀兌換券の激増・全國銀行の預金・貸出の著増に現はるゝ如く信用の大膨脹を來したのであつた。そして之が禍因となつて彼の大正九年三月の大恐慌を招來したのであつた。

しかして大正九年三月十五日に端を發した此の大恐慌が如何に慘澹たるものであつたかは吾々の記憶として猶ほ生々しいものである。それは天井知らずの高値を示して居たものが三月十四日の後場から怪しくなり、いよ〳〵十五日となつて、綿糸・生糸・株式・期米各市場は暴落を演じ、斯くて

四月一日には『三井』『三菱』『第一』『十五』といふが如き大銀行は一齊に當座貸越歩合を引上げ、五日には『增田ビルブローカー銀行』の破綻暴露をきつかけに『横濱七十四銀行』の破綻も暴露し、悲風慘雨は全國を吹き捲り、凄慘そのもの〻觀を呈し、爾來各市場は日に沈衰して、物價は低落し貿易は逆轉したことは既に前章「成金沒落史」に於て詳細に記述した通りである。

これに加ふるに大正十一年春の第二次の恐慌は更に事態を惡化せしめ、二月二十八日大阪の「五井定七」の破綻、『高知商業銀行』の支拂停止、『日本積善銀行』の破綻等、全國各地に銀行の破綻・會社の倒産が累々として横はつたのであつた。同年十月十九日から十二月二十五日までに取付に遭うた銀行だけでも實に二十八行に及び、彼の日清戰後の恐慌にも讓らざるものがあつたと言はれて居る。最後に起つた昭和二年のパニックは、『十五銀行』を始め全國に渉つて有力銀行が枕を竝べて破綻したことは諸君の記憶に猶新なるものあるであらう。

銀行の破綻整理史

銀行破綻の原因

一 我國獨得の頻繁なる取付騷ぎ

銀行の破綻、それが如何なに殘酷なもので、且つ恐るべきものであるか殆ど測り知ることの出來ぬものがある。銀行が破綻し、支拂を停止したが爲めに、家庭的の悲劇・社會的乃至經濟的の打擊は、それこそ幾回となく如實に繰返されて來た。ゼボンスの謂はゆる恐慌周期說に從へば、パニックは約十ケ年毎に周期的に繰返され、此の度毎に不健全な會社や銀行やは淘汰せられたといふことである。そして我國の實情を見れば單に周期的に來るパニックの時ばかりでなく、一ケ年に二三回乃至は多い時になると四五回も銀行の取付騷ぎが起るやうであるが、それが決つたやうに一寸した景氣、しかも中間景氣とまでも行かないホンの季節的な景氣が出て、其の反動が起る場合に起るやうである。

我國の銀行は、如何して左様に頻繁に取付騒ぎが起るのであらうか、取付騒ぎが斯く頻出するからには、預金者としては到底銀行に安心して預金して置かれない譯であつて、此點に關し、我國の銀行組織の上に根本的な缺陷があると見なければならない。

二　銀行本來の職能

元來銀行の本來の職務といふものを難しく言へば、自己の信用で要求拂ひの債務、卽ち何時でも要求あり次第支拂ふといふ約束の下に資金を預り、これを一定の規約の下に運用するものであつて、要するに資金の需要者と供給者との間にあつて、資金の需供關係を調和することを營業の目的とする機關である。それで預金者から預金拂渡しの要求あり次第に直ちに支拂はねばならぬ義務があるだけに、預金の運用は常に最も確實にして、回收は常に順調、且つ出來得る限り短期なものでなければならぬ。斯くて銀行は經營者のみの銀行では無く、又株主のみの銀行では無く、實に經營者と株主と預金者との連帶的の銀行であり、且つ又これ等の人々が經濟人であり社會人であると同樣に、其の銀行は社會の銀行であり、殊に經濟組織上からすれば、銀行は經濟界の大動脈と言はれる

程に重要なる地位を有して居るのである。

それで銀行經營者は如何にして株主のために利益を擧げ、預金者のために安全なる預託機關たるかを常住不斷に念としなければならぬことは勿論、各株主も經營者を信賴し、預金者乃至關係者の利益のために徒らに醵當の多からんことを望んではならない。それと共に預金者も亦一度自己の資金を或銀行に預金した以上は、其の銀行と經營者とを信賴し、單に蹈傍の風說に一つて周章狼狽取付騒ぎをなすが如き事は吳々も愼まなければならぬ。それは銀行の性質上資金は常に他に運轉されて居るのであるから、一度大擧して取付を行ふに於ては、如何なる銀行とても終には一時支拂を停止しなければならぬであらう。しかも一度支拂停止をした銀行は、如何に支拂停止前まで健實な營業を續けて居た銀行でも、帳簿の整理上一定期間の休業は止むなきものである。斯くては其の銀行の信用を奈落の底に突き落すものであつて、經營者・株主は勿論預金者も多大の損失を蒙り、社會的・經濟的に及ぼす影響は甚大なものである。

三　銀行破綻の原因

或一人の無責任なる流言、若くは悪意ある蜚語のために、一波萬波を起し、昨日までは財界に相當の信用あつた銀行も、今日は破綻に瀕すると言つたやうな事も往々にしてあるが、しかし多くの場合は經營者それ自身の罪に歸するを常とするのである。卽ち銀行本來の職務からすれば、要求あり次第直ちに支拂はねばならぬだけに、預金の運用は常に最も確實なものであらねばならぬ譯であるが、しかも多數の銀行、殊に今日までに破綻した銀行は、其の預金の運用が極めて不堅實・無責任で。時に不確實なる擔保・曖昧なる信用の下に貸出すのは未だしも、恰も預金を貰つたやうな氣で、これを投機資金に使用し、若くは道樂息子が親爺の金を使ふやうな氣で居る者があり、斯くて銀行の業態を惡化せしめ、信用を薄弱ならしめ、遂には交換尻の決濟不能となり、果は一寸した動機がきつかけとなつて、取付騷ぎとなり、支拂停止・休業といふ段になつて、終に破產するやうになるのである。

大正十二年一月十九日の全國交換所新年宴會の席上であつた。時の『日本銀行』總裁「井上準之助」は其の時分に頻出した銀行破綻の原因に就いて次の如く演說した。

「從來銀行失敗の原因を見るに、重役が勝手氣儘に投機を使用し、或は資金を固定せしめ、又得

意先に對し、不適當な融通をなし、失敗に依りて損失を招いたるが如きは、銀行經營者の守るべき第一原則を無視した結果である」

また銀行の破綻防止に關し重役の資格として次の如く云つた。

(一)一般公衆に信用ある事

(二)相當商業上の知識を有する事

(三)聲望あり尊敬を受くべき事

(四)正直誠實なる事

(五)資產狀態が堅實なる事

(六)銀行業に注意を拂ふ事

次に經營方法として重役は自己の銀行に取引しては不可ないこと、固定貸は不可、資金が容易に換價し得られること、預金支拂準備率の增加・銀行の內部組織の改善・政府の銀行檢查勵行等を擧げた。

また大正十三年八月二十二日、銀行の內容改善方法として左の如き條項を列記し各地方官長を

糸由して各普通銀行に示達するところあり、以て銀行の破綻を未前に防止するのであつた。

(一)取締役が其の銀行と取引を爲すに當り、監査役の承認ありしことを知るに足る書面を保有せざるもの、及び取引の種類竝に其の限度に付き承認を受くるに止まり、個々の取引に付き承認を經ざるものあり、又監査役の承認が當を得ざるものあり。

(一)重役が銀行の資産の大部分を、自己又は他の名義を以て使用し、殊に無擔保又は無保證にて使用せるものあり、又重役が銀行の資金を投機又は企業の資金に供せるものあり。

(一)重役及び之が關係者に對する貸金に對し、特に低率の利息を附し、又重役の預金に對して甚しく高率なる利息を附するものあり。

(一)重役又は大株主が、其の銀行の預先き銀行より其の預金を見合として資金の融通を受くるものあり、又情を知りて斯る取引を行ふ銀行あり。

(一)取締役及び監査役の報酬は定款に其額を定めざりし場合には、株主總會の決議を以て定むべきものなるに拘らず、其の決議を經ずして之を支出し、又是等役員に交附する旅費等を內規の制限額に超過して支出せるものあり。

(一)重役が使用人に行務を一任して自から顧みざるものあり。

(一)自行の設立、若くは資本金の增加の場合に於て、株式應募者の引受手續に缺く處あるもの あり、また是等の場合、若くは拂込未濟株金の拂込みに際し、株主に對して株式拂込資金の融通を爲し、又は定款に於て金錢以外の財產を以て拂込みを爲すを許さざるに拘らず、手形其他の金錢以外の財產を以て拂込みを爲す等、拂込みの適當ならざるものあり。

(一)他の會社の設立、資本金の增加、拂込未濟株金、拂込み等に際して、不當なる振替勘定等に依り拂込みを糊塗するの取引を媒介せるものあり。

(一)自行株を取得し、又は之を擔保、若くは見返りとして貸出を爲せるものあり。

(一)支店設置の認可を受けずして出張所・出張店・派出所、又は代理店等の名稱を以て支店と同樣の取扱を爲し居れるものあり。

(一)他業兼營の認可を受けずして、倉庫業・印紙賣捌其他の業務を兼營せるものあり。

(一)一回十圓未滿の金額を、貯蓄銀行法第一條第二項の規定に違反して預金として受入れ、又は特別當座預金通帳等に、利息計算期に於て利息を元金に組入るゝ者の記載を爲して複利を附

し、貯金の取扱を爲せるものあり。

(一)本店及び各支店に配置すべき預金其他の支拂に對する準備の種類金額及び本店・支店・出張所等の間に於ける之が配給の方法、拂込濟資本金積立金の額又は預金其他の債務額と固定すべき性質を有する貸出との割合、一人に對する貸出額又は一會社の社債若くは株式を所有し又は擔保として保有する高の限度等に關する考究を怠り、適當なる方針を有せざるものあり。

(一)缺損の見込ある滯貸金、之に對する未收利息・價格の減少せる有價證券・流入物件・造作・什器其他の所有物・債權等の資產にして、損失を生ずるものに對する消却を等閑に附せるものあり。

(一)財產目錄を作成せざるものあり。

(一)擔保品・借入有價證券・保護預り品等の帳簿上の整理又は關係證券若くは書類の整理不完全なるものあり。

(一)當座預金貸越に付き、契約なく、又は貸越極度額の定を爲さず、又は極度額を超過して貸越を爲せるものあり。

(一)現金勘定中に卽時現金に換ふることを得ざる小切手・手形又は立替勘定假拂金勘定等を包含するものあり。

(一)假拂金と假受金と、又未收利息と未拂利息とを差引して計算せるものあり。

(一)實質借入金若くはコール・マネーに屬するもの、又は銀行の利益に屬するものを預金として整理するものあり。

(一)所有有價證券と貸付有價證券とを區別して整理せるものあり。

(一)法令又は定款に規定せる積立を爲すを怠り、又は其の規定に違反して利益の處分を爲せるものあり。

四 破綻防止の方策

此外大藏省では銀行の內容改善の方法としては、銀行の合併奬勵・銀行檢査の充實等の方策を講じて居る。卽ち我國の銀行組織は明治初年國立銀行條令の設定と共に銀行濫設の弊に陷り、全國に於ける銀行數は各年を通じて最も多かつた大正四年一月一日の現在數は普通銀行一千四百四十五

行、貯蓄銀行六百五十八行、合計實に二千百〇三行の多數に達したのであつた。しかも是等多數の銀行の中には資本金僅々二三萬圓の者も相當あり、銀行といふのは名のみであつて、其の內容は高利貸業に過ぎないものがあり、或は又銀行を喰ひものにしようといつたやうなものが寄つて集つて銀行を組織し、預金は是等の重役や株主が勝手に費消する有樣であつた。殊に此事の最も甚しかつたのは貯蓄銀行で、大正三四年にかけて何とも得態の知れぬ貯蓄銀行がウヨ〳〵と簇出し。そして比較的下層階級の零細な資金を掻き集めて濫費したものであつた。

茲に於て政府當局者は是等の不健全なる銀行を整理するの必要を認め、其の方法として大正十一年には例の貯蓄銀行條令なるものを設定して、貯蓄銀行の資本金を五十萬圓以上に限定し、また銀行資金運用に就いても大藏省內に貯蓄銀行資金投資證券調査委員會なるものを常設して其の投資先を監督するといつたやうな方法を採り、また一方には銀行合同の方策を採用して、資本の集中による增大竝に合同により銀行の充實を圖らうといふのであつた。殊に大正十一年に至り銀行の破綻が續出するや、ます〳〵其の必要を認め、大藏當局は各地方長官に示達して一地方に於ける銀行を、して、勘くも一縣一行若くは二三行主義の下に合同合併せしめるべく努めたのであつた。

此の結果として大正四年一月以降十四年末までに合同せる銀行總數九百四十九行中、合同により減少せる行數百三十六行、合同により新設せる行數三十六行、差引合同による減少行數は五百行、合同のために增設せるもの六十三行、差引四百三十七行が合同により實際減少したものであつて、斯くて大正十四年末に於ける全國銀行數は一千六百六十六行となつたのであつた。卽ち之を示せば左表の如くである。

（區分）	（大正四年以降大正十二年迄）	（大正十三年）	（大正十四年）	（累計）
合同銀行數	六九九	一五四	九六	九四九
合同に因る減少數	三八七	九五	五四	五三六
同新設數	一九	七	一〇	三六
差引				
合同に因る減少實數	三六八	八五	四七	五〇〇
合同以外の增減數	增一〇五	減一四	減二八	增六三
年次別減少數	二六三	九九	七五	四三七

年末現在銀行數　一、八四〇　一、七六五　一、六六六（内貯蓄一三三）

大正四年一月現在の二千百〇三行から大正十四年末には一千六百六十六行と實に四百三十九行を減少した譯であるが、しかも之を英國に於ける合同趨勢に比較すれば、全國銀行數の驚くべき多數なることを知るのである。即ち戰時中に於ける英國の銀行合同趨勢は特に顯著なるものあり、當初大銀行が小銀行を合併したが、後には大銀行が大銀行と合併し、今や全國に於ける銀行數は僅々三十餘行に過ぎず、しかも其の資本金は二十餘億ポンドといふが如き巨額に達して居るのである。それであるから英國金融界の鞏固なることは今こゝに改めて説明するまでもない程である。

五　破綻銀行の開祖

大藏省のお役人は、ざツと以上のやうに、やれ銀行は出來るだけ多く合併して資本金を大きくし、そして内容を堅實にしなければならぬとか、やれそんな不確實な物件を擔保として貸出してはいけないなんて、いつぱし當局として銀行の監督に萬遺憾なきを期して居るやうな顏をして居る片ツ端から、銀行のボロはそれからそれへと曝露し、一ケ年幾箇所となく破綻銀行を出して預金者を大騷

ぎさせるのである。

我國の銀行破綻史の開祖とも言はれるものは甚だ古い。それは我國に銀行制度なるものが設けられなかつた以前に於て、銀行の破綻と言ふものはあつた。即ち幕府時代に御爲替組を勤めた『三井組』『小野組』及び『島田組』の三爲替取立業者が、明治二年に共同出資して『爲替會社』といふ金融機關を設置し、政府は之が保護のために太政官札の貸付、また金券・銀券の發行權を與へたのであつた。これは名こそ爲替會社といふのであるが、其の實體は今日でいふ銀行であつた。然るに其後此の爲替會社は、政府から與へられた紙幣發行權を濫用して頻りに金券又は銀券を發行し、ために信用が極度に膨脹し、一時は空景氣を出して、いはゆる維新後最初の成金時代を出したのであるが、しかし之も束の間で、此の信用膨脹の反動は佐賀の亂・臺灣征伐等を動機として現れ、明治七年には流石に景氣の善かつた此の爲替會社も破綻を曝露したのであつた。蓋し之が我國破綻銀行の鼻祖ともいふべきであらう。

次いで銀行の破綻を曝露したのは明治十九年のことであつた。此時は已に日本銀行條例なるものが發布せられ（明治十五年）また改正國立銀行條例なるものも發布せられて居た後であるから、國内

いたる處に謂はゆる國立銀行なるものが設立せられて居たのであつた。また外國銀行も例へば「オリエンタル・バンク」の如き橫濱に支店を設けて國際爲替を取扱つて居たのであつた。

ところが「松方正義」が大藏卿に就任し、貨幣制度の改正竝に巨額に發行した金銀券といふが如き紙幣の整理を行つたが爲めに、金融梗塞・物價低落の因をなし、惹いて銀行の經營窮迫して、中には破綻を曝露するものもあり、其中には流石の「オリエンタル・バンク」橫濱支店すらも遂に閉店の止むなきに至つた程であつた。

それから後、明治二十二年に於ける米作の不作と銀相場の騰貴とにより、外國貿易を逆調に導き、惹いて明治二十三年のパニックを誘因したのであるが、此のパニックのために銀行の破綻が再び續出し、「久留米銀行」の休業に次いで、「福島第六銀行」「名古屋第四十六銀行」「八戸第百五十國立銀行」を始め、東京では「第一國立銀行」と「三井銀行」が取付に遭つたのであつた。そして此の當時に於ける銀行の破綻の狀況が如何であつたかを記述することは必ずしも無益で無いかも知れぬが、兎に角これ等の事實は今からすれば遠いことであり、且つ銀行業の未だ幼稚な時代のことではあり、それに經濟界も頗る狹い範圍に限られて居た頃ではあり、銀行の破綻が影響するところも比

較的薄かつた譯であるから、此の當時に於ける銀行破綻の狀況を記述することは、玆に略することゝする。しかし、たゞこれだけは是非記述して置かねばならぬ。それは此時に於ける「三井銀行」の取付騷ぎであつた。「三井銀行」と言へば今は我國銀行の中の銀行である。市中の如何な銀行でも「日本銀行」の前では頭が擧らぬものであるが、たゞ「三井銀行」だけは「日本銀行」に對して寧ろ對等の地位にあるやうな觀すらある。それは他の如何な銀行でもイザとなれば、直ぐ「日本銀行」の援助を仰がねばならぬのであるが、獨り「三井銀行」だけは超然として獨自の力を以て行き、却つて「日本銀行」は國債の募集其他の場合に於て、是等「三井」などの力を借らなければならぬからである。

其の「三井銀行」が其時ばかりは取付に遭つたのであつた。それは「三井」の業態に怪しい點の有つたことは事實かも知れぬが、それにも況して取付の動機を作つたのは、當時日の出の勢ひで發展して居た「二六新報」が一ケ月餘の久しきに亙つて、燃に「三井」の惡口を叩き其の內情を暴いたためであつた。其の動機の如何にせよ此時財界は極度の恐怖に襲はれ、政府當路者も亦大いに狼狽し出したのであるが、幸ひに「井上侯」が「二六新報」との間に仲介に立ち、且つ「日本銀行」も亦極力これが援助に努めたのであるから、漸く沈靜するに至つたのであつた。

銀行界の混亂時代

一 銀行界混亂の動機

銀行界の混亂時代ともいふべき時、それは明治三十四年の恐慌襲來の時であつた。此の明治三十四年の恐慌は、我國經濟界に取り實に未曾有の慘狀であつて、後年、卽ち大正九年に於けるそれよりも更に慘澹たるものがあつたであらう。

しかし此の明治三十四年の大恐慌の原因は、主として日淸戰爭後の大成金時代の反動であつた。神功皇后や太閤秀吉が朝鮮征伐をして勝つたといふことは歷史の本で讀んで知つて居るが、現實に我國が外國人と戰ひを交へること、よし其の相手がチヤン〳〵坊主といつて馬鹿にして居ても、我國よりは、ずつと文化の進んだ人口の多い、そして軍備の整つた支那と戰爭して、本當に勝てるか知らんと思つて居たのが、もの〳〵見事に大捷を博したのであるから、日本人として大に氣前の善くなつたのは無理も無いことである。

それに媾和談判の結果、三億五千萬圓からの償金が取れることゝなり、其後三國干涉により一時非常なショツクを感じたとはいへ、日本銀行は之が慰安のためかあらぬか、兎に角、突如其の公定割引歩合を引下げ、且つ戰後經營の事業資金としては、遠慮なく融通すべきことを聲明したのであるから、玆に財界は有頂天とならさらんとするも得べけんやで、爾來諸株は一齊に昂騰し、各種の事業熱は鬱勃として起り、いはゆる成金簇生時代と化したのであつた。

しかし此の成金時代も到底永續すべきものでは無かつた。各種事業の勃興に伴ふ機械其他輸入品の增加のための對外貿易の逆調・事業資金の需要增加に伴ふ金融梗塞・金利騰貴等のために財界反動時代は刻々に迫り、遂に明治三十三年十二月二十五日、歲將に押迫らんとして居る時に、突如『熊本第九銀行』の支拂停止が端をなして、前古未曾有のパニツクは銀行界の混亂時代を出現したのであつた。卽ち『熊本第九銀行』の支拂停止に次ぎ『熊本貯蓄銀行』の支拂停止となり、更に『百五十一銀行』に飛火して、これより銀行破綻の颱風は北九州一帶を吹き捲り、九州一圓の財界は、ために信用地に墜ち、同方面の手形は一時流通力を失ひ、同地方と取引するには總て現金賣買に據らなければならぬやうになつた。

事態かくの如き有樣であるから、東京・横濱方面も亦、九州の颱風圈內に捲き込まれ、先づ第一番に明治三十四年一月六日、『横濱蠶業銀行』が破綻を曝露したのを切掛に、横濱の『第二』『七十四』及び『東京貯藏銀行横濱支店』も取付に遭ひ、更に東京方面では『東洋貯蓄銀行』『愛國銀行』の破綻となり、又埼玉『粕壁銀行』の支拂停止となり、斯くて事態は全く全國に波及したのであつた。以下是等破綻銀行の破綻の事情・破綻後の模樣等について書いて見よう。

二 九州が銀行破綻の火元

前に述べた通り此の明治三十四年に於ける銀行破綻の火元は、熊本の『第九銀行』であつたが、それが『熊本貯蓄』から久留米の『六十一銀行』に飛火した。殊に久留米『六十一銀行』は最も急激な取付に遭つたが、幸ひ同行は恰も整理中で預金の如きも僅に四十萬圓に過ぎなかつたので大事に至らずして終熄した。しかし一方此の恐ろしき破綻風が福岡に至るや、事態は更に惡化したのであつた。それは『福岡第十七銀行』の破綻であつた。同行は、明治十年國立銀行條例により設置せられたもので、當時福岡縣下でも相當信用ある銀行であつたのだが、一時炭鑛に貸付けた資金が百萬圓に上り、

其後漸次回收はしたが、結局五六十萬圓は回收の見込なく、殆ど固定の姿となつて居たのである。それで勢ひ業態が惡化して行くのは無理もないことであつたところ、たま〳〵『熊本第九銀行』の取付以來、關西地方より爲替尻の回收急となり、たゞさへ手元困難を感じて居た矢先であるので、ます〳〵窮迫し、それが曝露して遂に取付になつたのであるから、銀行當事者の驚駭は想像の外にあつた。

玆に於て縣當局者・市當局、若くは商業會議所の如きも此儘に放任することは福岡地方一體の財界を破綻に導く惧れがあるので、何とかして之が救濟策を講じなければならぬといふので、縣當局は自から『日本銀行西部支店』に赴き、詳かに情を具して救濟を懇請するところあつたので、『日銀支店』は玆に四十萬圓の資金を供給して之が救濟に當つたのであつた。『日銀』が斯く援助するといふことが明かになつたので、預金者も漸く安堵するやうになり、人心も沈靜に歸したのであつた。

しかして九州に於ても有數なる此の銀行が、斯くも破綻を曝露するに至つた主たる原因は、一に資金を『炭鑛』といふが如き事業に集中し、これを回收不能に陷らしめた結果である。取付後、同銀行は勢ひ整理しなければならぬといふので明治三十六年に一旦減資を行つたのであるが、それでも

一度受けた傷痍は容易に癒えさうになく、舊藩主「黒田家」より「金子堅太郎子爵」を通じて「安田善次郎翁」に之が救濟を依頼したのであつた。それで『安田』は同銀行が九州では一流の銀行ではあり、いよ〳〵救濟することに決し、同年これを引受けて根本的の整理に着手したところ、業態も漸く恢復し、斯くて十二年には同縣下の『宗像銀行』を合併し、次いで十三年には『福岡銀行』、十四年には『三瀦銀行』を合併して今日では九州地方第一流の銀行となつたのである。

三　銀行破綻の防止運動

それは兎に角として『熊本第九銀行』の破綻以來九州一帶は緩急の程度こそ異れ、何の銀行も何の銀行も頻々として取付に遭ひ、果は休業の止むなきに至るといふ有様であつたから、同年二月九日、熊本市に『九州商業會議所聯合會』なるものを開き、此の會合によつて左の如き決議をしたのであつた。

決議

一、各銀行會社監査役の選擧、及び其の職責に關する法律改正の件

右は各商業會議所に於て調査の上、第十五議會開會中、總理大臣・大藏・農商務兩大臣・法制局長官・貴衆兩院・法典調査會等に向つて運動する事

一、九州地方の各銀行は自己の信用を增進すると同時に、同業者の信用を重んじ、共存の主義を採り、相互の關係を親密にし、金融の疏通を圖ることを各銀行に勸告する事

一、九州各銀行の監査役に對し、十分の職分を盡さるゝことを勸告する事

一、日本銀行・正金銀行及び三井銀行は從來より一層各銀行の內情を審査して、これと密接し十分資金の融通を與へられたきことを請求する事

協議事項

九州金融界の現狀は世人の想像するが如き危險のものにあらずと認むるにより、九州各縣知事に對し經濟界のために浮說流言を排斥し、人心を鎭定し併せて貯蓄を奬勵せられんことを要求する事

此の決議事項と云ひ協議事項と云ひ、今から見れば甚だ生溫いものだが、それでも當時の財界では相當效果があつたと見え、恐怖狀態にあつた九州地方の金融市場も漸くにして沈靜に歸したので

あつた。

然るに此の沈靜もホンの一時的なものであつて、同年四月、九州の餘波を受けて大阪地方に勃發した恐慌の餘波が再び九州に逆流して、四月十八日、長崎縣下北高來郡諫早町に於ける『諫早銀行』が突如として支拂を停止したのであつた。同行は明治十七年七月設立せられたもので、資本金は僅に十二萬圓に過ぎなかつたのであるが、同地方では相當の信用あり縣支拂金庫の取扱ひなどもして居たのである。また此の『諫早銀行』の休業の影響を受けて同地方の『有明銀行』も一時取付に遭つたのであつた。此外熊本市に本店を有する『鎭永銀行』の大阪支店が取付に遭ひ、それが本店にも波及して遂に休業の憂目を見たのであるが、それと同時に『第百五十一銀行』もまた遂に休業の止むなきに立至つたのであつた。同行は明治十二年十月設立せられたもので、資本金六十萬圓、『第九銀行』の破綻以來頗る窮迫して居たが、遂に『鎭永銀行』の休業に端を發して破綻休業の止むなきに至つたのである。

四　大混亂の渦巻く大阪地方

『熊本第九銀行』の破綻に端を發した金融界の恐怖心は刻一刻に濃厚となり、大阪地方の銀行で地方に關係を有する銀行は表面貸出の回收・爲替尻の經濟を寬かにするやう申合せたと雖も、內面には各銀行とも競つて其の回收に努めたのであるから、地方銀行の窮迫は益々深酷となり、九州地方の銀行は破綻相踵ぐといふ有樣になつた。而して其の波紋は關東地方にも及び、明治三十四年一月下旬に『桑名百二十二銀行』及び『桑名貯蓄銀行』が支拂を停止してからといふものは、東京地方にも破綻續出し、そして三月下旬には堺市の『北村銀行』が破綻を曝露したのであつた。此の『北村銀行』といふのは資本金僅に五萬圓に過ぎない程の小銀行であるから、これだけの破綻は大したものでは無かつたのであるが、しかも各地の破綻驟ぎに人心惴々たる時であつたから、其の破綻が影響する所は實に甚大なるものがあつた。蓋し大阪地方の金融市場の混亂は『北村銀行』といふ小銀行の破綻より始まつたのであつた。そしてそれは大阪交換所組合銀行の一たる『七十九』及び『難波』兩銀行の破綻となつた。

五　七十九銀行の破綻

『七十九銀行』は當時大阪市東區本町二丁目にあり、明治十一年十月に設立せられた古い銀行である。元『松江七十九國立銀行』と言つたもので、資本金は最初十二萬圓であつたのを後に二十萬圓に増資し、十七年六月『大阪銀行』が買收して本店を大阪に移し、『大阪七十九國立銀行』と改稱したものである。明治三十一年資本金を百萬圓に増資し、支店を善通寺・多度津・琴平等に設け、「古畑寅造」といふのが頭取であつた。此の「古畑頭取」は關西に於ける事業家であつて、當時『伊豫鐵道』『明教保險』『大阪火災』『大阪運河』等の社長若くは重役を兼ね、大阪に於ける株式所有者中の第五位にありと稱せられて居た。卽ち「古畑」は銀行家にして多くの事業を兼營して居たのである。多くの事業を兼營する頭取を頂く銀行ほど危險な銀行は無いのであつて、此の『七十九銀行』の破綻は當然來るべきものであつた。蓋し『七十九銀行』の預金の大部分は此の「古畑頭取」によつて自己の關係する『伊豫鐵道』『大阪運河』等に貸付け若くは甚しきは銀行の資金を以て、是等關係會社の株式を買收して居たのであつた。

それが一度財界に恐慌狂瀾り株式慘落するや、「古畑」自身の損害は勿論、惹いては「古畑」が『七十九』に對する負債總額だけでも七十萬圓からの巨額に達したと言はれて居た。殊に驚くべきことには、此の『七十九銀行』といふのはイカサマ銀行であつて、其の株式の如きも幽靈株が多く、資本金百萬圓、株式總數二萬株中幽靈株が左の如く多額に上つて居た。

舊	株（五十圓拂込）	六百九十二株
新	株（二十五圓拂込）	五千百二十一株
計		五千八百十三株

卽ち總株式數の四分の一以上が幽靈株であつたのである。銀行の內部が斯くの如く不整理の上に「古畑頭取」一人に對してすら前述の如く七十萬圓からの巨額の滯貸があるのであるから、同行の破綻したのは寧ろ當然と言はねばならなかつた。

かゝる有樣であつたから大阪市中銀行の、何れもが此の『七十九』と取引するものは無く、殆ど孤立の狀態に在つたのであるから、『七十九銀行』が破綻しても他の銀行に影響するところは餘り無い譯であるが、それでも『浪速銀行』と『五十八』とは、『七十九銀行』と連帶責任の下に『大阪市公金』を取扱つて居たのであつた。然るに『浪速銀行』は『七十九』と『五十八銀行』との連帶では甚しく不安を感じて來たので、其の仲間に『山口銀行』も加入せしむることゝし、同時に新會計年度から市に差入

れて居る擔保品の價格引下を行づて、增擔保をすることゝなつたのであるが、これがために『七十九』が差入れて居た『伊豫鐵道株』は五十圓から三十五圓に下り、『七十九銀行』は玆に愈々窮迫し、それに一方には銀行が高利貸に責められるといふ有樣であつたから、『七十九銀行』の命脈は最早旦夕に迫つたといふべく、そして取付の度は刻一刻に急激となり、斯くて支拂不能から一切の內情は曝露して明治三十四年四月十六日、遂に休業の止むなきに至つたのであつた。

六　銀行重役以下の珠數繫ぎ

支拂停止後『七十九銀行』は大株主會を開いて支拂停止に關する報告をなし、且つ善後策に就いて鳩首協議するところあつたが、素より之といふ名案が出さうにも無く、しかも此間に預金者若くは他の債權者等の激昂は甚しく、遂に銀行に對して破產の申請をなし、一方「古畑」は詐欺取財の下に拘引せられたのであつた。次いで姻戚に當る『東某』と云へるもの、若くは其他の重役も拘引せられたのであつた。

しかして此時に於ける同行の資產狀態を見るに、讃岐に於ける各支店は大體に於て資產と負債と均衡を得て居るが、其他の分に至つては資產の內容頗る不明なる點あり、しかし兎に角、地所・建物、其他所有物件の見積價格は約五十七萬圓で、これに未拂込株金四十萬圓の中、實際拂込の見込ある分十三萬五千圓、及び差押中に係る重役の財產見積價格約七萬五千圓を加ふれば、合計資產額は七十八萬圓となり、一方預金其他の債務總額は約百三十萬圓あり、差引五十二萬圓の不足を生ずる譯である。

が、これが處分方法に就いては、破產管財人に移すよりも債權者會に於て適宜に處分した方が利益であるといふことに成つたのであるが、債權者中、擔保品を保有して居た『大阪市』『日銀大阪支店』『浪速』『第十八』『山口』『積善同盟』『大阪貿業』各銀行は其の債權總額合計二十九萬二千餘圓に對し、商法第九百九十七條により別途の辨償を破產管財人に請求して裁判所より之が承認を得たので、其の擔保品たる『伊豫鐵道株』三千株、『關西鐵道株』千株等の處分をなすことゝなり、兎に角以上のやうな方法を以て不滿足ながらも預金者其他債權者は各其の債權額に應じて分配することゝなつたのであるが、しかも預金者の取前は百圓に對して何圓何十錢といつた位の額であつたことは、今も昔も破綻銀行の後始末に變りはない。

七 難波銀行の休業

『七十九銀行』の破綻と同時に其の姉妹銀行たる『難波銀行』も亦支拂を停止した。『難波銀行』は明治二十七年十月に設立せられたもので、資本金は三十萬圓、拂込二十二萬五千圓で貯蓄銀行を兼營して居た。大阪市南區難波市場筋角に本店を置き、頭取は『七十九』の「古畑寅造」の實弟「西川市造」で、隨つて此の『難波銀行』と『七十九』とは一身同體なるものであるといふのが寧ろ適當であるから、『七十九』が破綻休業すれば『難波銀行』が同じく破綻休業するのは當然と言はなければならぬ。

この「西川」は『難波銀行』によつて集めた預金は殆ど其の實兄の「古畑」に貸付若くは『七十九』に融通し、また自分でも預金はたゞ貰つたやうな氣で勝手放題に消費して居たのであつた。しかも『七十九銀行』が破綻休業し、餘波は直ちに『難波銀行』に及ぶことを感知した「西川」は、『七十九』が未だ閉店しない以前に於て『難波銀行』の行金を他人名義で引出し、行金の隱匿を圖つたのであつた。そして、いざ『七十九』が破綻閉店したと聞くや、殆ど同時に『難波銀行』の方もパタ〳〵と閉店して預金の支拂を停止したのであつた。

「西川」の此の不德なる行爲に對しては、預金者は勿論世間一般の憤慨すること甚しく、殊に同行は貯蓄預金約二十五萬圓を預かり、此の預金者七千人からあつたといふのであるから、其等の預金者は『難波銀行』閉店と聞くや、銀行の周圍に殺到し、怒號惡罵『西川』の不德を鳴らし、一時は殺氣漲り、しかも此の混亂は數日に亙つたのである。

斯くて兎に角『難波銀行』は預金者及び他の債權者より成る整理委員の手に移され、いざ整理となつて見れば銀行の內容は、いよ〳〵出でゝいよ〳〵紛亂を極め、中には「西川頭取」始め重役等の背任・橫領、さては窃盜に類する行爲すらもあつた程で、遂に預金者數名から窃盜罪の告訴を受け、「西川」は、直ちに詐欺取財によつて拘引收監されたのであつた。また銀行自體も破產の申告を受け、「西川」を始め全重役も同じく破產を宣告されたのであつた。斯くて『難波銀行』の醜體は玆に遺憾なく曝露せられ、預金者を始め世間の人々は今更ながら茫然たる態であつた。

八 海老鯛式で釣られた預金者

『七十九』『難波』兩銀行の支拂停止は各銀行の預金者は勿論、一般に銀行に對して非常に不安の念

に襲はれるやうになつた。殊に此時までは銀行が預かつた金を、支拂はないなどと言ふやうなことは有り得ないと思つて居た。それは銀行の支拂停止といつたやうなことは、これまでにも小銀行が時に破綻して支拂停止を遣つたことはあつたが、苟も大阪の組合銀行であり、大阪市金庫である銀行が、支拂停止をするやうなことは有るまいと信じて居たのであつたから、預金者を始め一般の銀行に對する恐怖は、さこそと思はれるのである。

尤も『七十九』にせよ或は『難波銀行』にせよ、其の頭取たる「古畑」若くは「西川」は、兄弟とも揃ひも揃つて山師のやうな男であつたから、怜悧な大阪市民は始めつから此の兩銀行に對しては、相當警戒はして居たのであつた。そこで「古畑」や「西川」等は預金を吸收するにしても大口預金を吸收することは殆ど困難であつたから、中產以下の零細な資金の吸收策として、何圓以上の預金者には反物一反を景品として贈呈するとか、何圓を一口として景品附抽籤券を呈するとかいつたやうに海老鯛式をやつて預金の吸收を圖り、また一方には銀行の資金をバラ撒いて兄弟共に大阪市會議員に當選し、遂に市參事會員となつて、大阪市公金を取扱ふことや、或は土地の拂下問題に關係して拂下を受けた者は、如何しても『七十九』か『難波銀行』かに預金をしなければならぬやうにして預金の吸

收方法を取つたのであつた。

それで海老鯛式で釣られた零細な預金者は、いざ兩銀行とも支拂停止といふ段になつて、今更ながら、あつとばかりに驚き、そして支拂停止後の混亂も亦凄じいものであつて、「古畑」は騙りだ「西川」は泥棒だと大阪市中を喚きたて〳〵歩いたのであつた。そして其の結果は銀行といふものは騙りをするところだ。人の金を只取りするところだ位に考へ、銀行に對する信用は全く地を拂ふやうになつたのであつた。

九　大阪全市の大混亂

斯くて全國到る處に銀行の取付騷ぎが起り、殊に甚しきは『福永銀行』『天阪支店』の如きは『難波銀行』『南支店』と隣合せて居たと言ふので取付に遭ひ、更に其の附近の銀行であつた『大阪貯蓄』及び『日本貯蓄』を始め『中立貯蓄』『加島貯蓄』等の各本支店其他其他平常信用のあつた『天王寺』『第百五十二』の兩行も取付けられ、全市の銀行といふ銀行は何れも取付けられ、金融市場は全く修羅の巷と化したのであつた。

此の混亂狀態の中で、最も取付の打撃を蒙つた銀行は『大阪貯蓄銀行』と『日本貯蓄』の兩行であつた。『大阪貯蓄銀行』は其の預金額六百萬圓以上に上り、全國第一位の貯蓄銀行であつた。それが『七十九銀行』の支拂停止の日から本支店共に取付けられ、其の預金者が殆ど零細な貯蓄預金者だけに其の雜踏實に名狀すべからざるものあり、『大阪貯蓄』では徹頭徹尾預金の支拂に應ずるために、『鴻池』『福善同盟』『兩銀行から應援資金百萬圓を借入れ、それを店頭に山積して預金の支拂に應じたので、中には金の姿を見ただけで安心して歸る者もあり、また樣子を確めるために來るものもあり、其の混雜以て知るべきである。次に『日本貯蓄銀行』も亦大阪に於ける屈指の貯蓄銀行であつて、其の預金額は百七十萬圓あつたのが、僅か三日間に三分の一の取付に遭つたのであつた。要するに四月十六日、『九十七』『難波』兩行が支拂停止をなしてから、其の影響で同じく破綻した銀行は左の十行に及んだ。

大阪の破綻銀行一覽表

商號	設立年月	資本金	拂込資本金	閉店月日	摘要
「七十九」	明治十年十一月	一、〇〇〇千円	六〇〇千円	四月十六日	破産

「難波」	明治廿七年十一月	三〇〇	二二五	四月十六日	破産
「福永」	明治三十年七月	七〇	七〇	四月十七日	破産
「天王寺」	明治二十八年五月	五〇	三〇	四月十八日	破産
「百五十二」	明治十二年十二月	五〇	五〇	四月十八日	破産
「前島」	明治三十三年七月	五〇	五〇	四月廿七日	破産
「逸身」	明治十三年三月	一〇〇	一〇〇	五月二十日	破産
「貯金」	明治二十六年六月	五〇	五〇	五月二十日	合併
「九州商業(支店)」	明治十二年四月	一、六五〇	四月廿三日		支拂猶豫
「九州貯蓄(支店)」	明治二十九年三月	七〇	三五	四月廿三日	支拂猶豫

此他大小幾多の銀行で取付けられたものは大阪市に於て本店三十九行、支店・出張所三十六行、其他地方銀行支店の取付けられたるもの十八行、合計百三十行であつた。以て此の當時に於ける大阪金融界の混亂狀態を知り得べきである。

十　混沌たる再度の破綻騒ぎ

「七十九」「難波」兩銀行の破綻騒ぎ起るや、大阪市中に於ける大銀行は自業自得なりとして、初めは寧ろ對岸の火災視して居たのであつた。然るに事態は單に「七十九」「難波」兩行の破綻に停まらず、取付騒ぎは大阪全市に波及し金融界は混沌たるものあり、貯蓄銀行として信用ある「大阪貯蓄」の如き、或は「逸身銀行」の如き危殆に瀕しつゝあり、其の結果、いはゆる大銀行と自負して居た「三十四」「住友」「鴻池」といつたやうな銀行とても、此際晏如たることは出來なくなつたので、遂に當時の「日銀」大阪支店長「首藤涼」の諒解を得て、大阪銀行集會所委員たる「浪速」「三十四」「百三十」「山口」「住友」「鴻池」「北濱」「三菱支店」「三井支店」及び「帝國商業支店」の代表者が四月十八日會合し、破綻銀行救濟の決議を行ひ、そして其の翌日から是等各銀行の保證の下に、「日本銀行」から五十萬圓の資金の供給を受け、先づ「逸身銀行」の出勤といふので、さしも混亂を極めた市場も漸く沈靜に歸したのであつた。

然るに其後、卽ち同年五月「堂島米穀取引所」に於ける定期米五月限の賣買に就き紛糾し、其の結

果は買方の證據金調査のために、裁判所が米穀取引所の機關銀行である「北濱銀行」の本支店の帳簿其他金庫等の取調を行つたのであつた。其の結果「北濱銀行」の內狀曝露を懸念し、其の翌日から同銀行に對し猛烈な取付が行はれたのであつた。「北濱銀行」といへば例の「岩下清周」が喰物にした銀行で、大正三年には遂に破綻曝露、「岩下」は獄窓に繫がれたのであるが、しかし此時は未だ破綻を曝露するまでには行かず、「鴻池銀行」の保證で「日本銀行支店」から應援することになつて居り、「鴻池」も亦資金上の援助を與へたのであるから「北濱銀行」に對する取付は間も無く終熄したのであつた。

しかし「北濱銀行」の取付騒ぎは却つて他の方面に非常なる影響を與へた。それは「北濱銀行」が取付に遭つたと噂されるや、一二ケ月前に經驗した銀行に對する恐怖心が未だ全く除かれて居ない時であつたから、さアまた取付だといふので、誰も彼も銀行に駈けつけるといふ騒ぎである。そしてさきに辛うじて難を免かれた「逸身銀行」は、救濟銀行團が腰の入れやうが怪しいと噂されて、また猛烈な取付に遭ひ、遂に破產の憂目に遭ひ、續いて「逸身銀行」さへ破產するのであるからといふので、「第五十八銀行」「大阪貯蓄銀行」「前島銀行」「木原銀行」「虎屋銀行」といつたやうな平常怪

しいと睨まれて居た銀行は殆ど取付けられ、一ケ月足らずにして更に第二の銀行破綻騒ぎをなし、折角平靜に歸せんとした大阪銀行界は再び混沌たる狀態となつたのであつた。

十一　大混亂に陷つた京都市

大阪の銀行界混亂の餘波は京都にも及んだ、大阪・京都とは隣同志であるから大阪の銀行破綻騒ぎが、直ちに京都に感染することは當然のことであらねばならぬ。そしてそれは京都市に於ける第一流銀行たる『商工銀行』の取付騒ぎから始まり、且つ此の銀行の取付が京都の經濟界に及ぼした打撃は實に甚大なるものがあつた。

しかし『商工銀行』の取付騒ぎは『關西貿易合資會社』の破綻から始まつたのであつた。『關西貿易合資會社』は「濱岡光哲」を社長とし外國貿易業務を營んで居たが、兎角事業振はず、殊に『商工銀行』とは互に重役が兼務して居たので、貸借關係も多かつたのである。たま〳〵大阪金融界混亂の影響を受け、京都市も之が警戒のため金融梗塞するや、頓日來、事業不振・營業困難を傳へられて居た同會社は四月二十七日（明治三十四年）に至り、突然關係銀行に向つて手形の支拂猶豫を求めたが、これに對し『神戸』其他の債權銀行は之を拒絶したので、同會社の運命も玆に谷り、遂に解散の決議をなすに至つたのであつた。

此の結果、最も關係の密接であつた『商工銀行』に直接影響することは當然である。『關西貿易』と『商工銀行』との關係を見るに、『商工銀行』頭取田中源太郎」は『關西貿易』の相談役であり、『商工銀行』頭取「田中源太郎」は『關西貿易』の相談役であり、『商工銀行』副頭取兼『商工貯蓄銀行』頭取「西村治兵衛」は『關西貿易』の大株主であり、『關西貿易』社長「濱岡光哲」は『商工銀行』及び『貯蓄銀行』の重役であるといふのであるから、『商工銀行』と『關西貿易』とは殆ど異身同體ともいふべく、果して然りとすれば、いはゆる銀行重役の事業兼營の弊が此の『商工銀行』にも如實に現れて來た譯である。卽ち『關西貿易』の破綻が惹いて『商工銀行』の取付となることは當然のことゝ言はなければならぬ。それは後年『高田商會』の破綻が直ちに其の關係銀行たる『永樂銀行』の破綻となつたのと同一なものである。

『商工銀行』は明治十九年十月に設立され、資本金は百萬圓、內八十萬圓拂込濟・積立金二十五萬圓あり、明治三十四年四月末日現在の諸勘定は左の如くであつた。

（諸預金）

定期	三十七萬圓
當座預金	七十一萬二千圓
貯蓄預金	四十七萬七千圓
諸預金	四萬圓
計	一百六十萬圓

（諸貸付金）

貸付金	六十八萬五千圓
當座貸越	九十五萬三千圓
割引手形	百五十八萬四千圓
計	三百二十二萬四千圓
金銀在高	三十七萬七千圓

當時百六十萬圓からの預金があると言ふのであるから、成程京都市に於ける第一流の銀行に相違なく、しかして愈々『關西貿易』が解散となるや、其の以前よりして『日本銀行支店』の諒解を得て、取付に對する準備金を整へて居たのであるから、『關西貿易』解散發表の翌日預金者が殺到するや、『貯蓄銀行』と共に資金九十萬圓を以て、特に午前七時より開店拂出しに應じ、一日で『商工銀行』五十六萬圓、『貯蓄銀行』十七萬圓、合計七十三萬圓の支拂ひに應じ、更に翌日も引續き四十萬圓の資金を準備して、『商工銀行』二十九萬六千圓、『貯蓄銀行』十萬四千圓、合計四十萬圓、兩日百十三萬圓の支拂ひに應じたのである。そこでさしもの預金者も其の資金の豐富なるに驚き、取付も漸く終

熄したのであつた。

『商工銀行』は斯くの如くにして兎にも角にも破綻の難を逃れたが、預金者の銀行に對する不安は他の銀行に及び、遂に京都市下京區にある『鴨東銀行』『川東貯蓄銀行』『京都農業銀行』等は連續的に取付に遭ひ、何れも一たまりも無く破綻したのであつた。このうち『鴨東銀行』の如き資本金五十萬圓で當時預金九十六萬四千圓、貸出百三十萬三千圓からあり、京都市でも相當信用あり、就中、同銀行は酒造家の取引銀行であつたのであるが、たまゝ〳〵伏見の密造事件曝露以來、酒造家の金融梗塞して居た際に、『商工銀行』取付の餘波を受けて、此の災難に遭つたのであるから、いざ取付となると見るも無慘に破綻を曝露したのであつた。

十二　破綻の悲劇を演出した諸地方

大阪・京都を中心として、此の兩市隣接地方の銀行は、其の組織の大小と內容の良否を問ふことなく、殆ど一率一體に取付の厄を蒙つたのであつた。然して內容の不堅實・基礎の薄弱なるものは無慘なる破綻の悲劇を演出した。

殊に大阪に隣接し、經濟的に最も密接なる關係を有する堺市の如き、殆ど各銀行は取付に遭ひ、また奈良地方も大阪・京都と經濟的に利害の多いだけに、其の影響するところも相當甚大なるものがあつた。其他擧くべきことには破綻の旋風は四國及び山城・紀州・丹波・近江・伊勢の各地方にも飛んだことであつた。今これを各地方別・各銀行別に見れば實に左の如くである。

破綻銀行一覽表

(地名)	(銀行名)	(設立年月)	(資本金)	(破綻年月)
大阪市	「七十九銀行」	明治十一年十一月	一、〇〇〇千圓	明治三十四年四月十六日
同	「難波銀行」	明治二十七年十月	三〇〇	明治三十四年四月十六日
同	「福永銀行」	明治三十年七月	七〇	明治三十四年四月十七日
同	「天王寺銀行」	明治二十八年五月	五〇	明治三十四年四月十八日
同	「百五十二銀行」	明治十二年十二月	五〇	明治三十四年四月十八日
同	「前島銀行」	明治三十三年七月	五〇	明治三十四年四月廿七日
同	「逸身銀行」	明治十三年三月	一〇〇	明治三十四年五月二十日

同	「貯金銀行」	明治二十六年六月	五〇	明治三十四年五月二十日
同	「九州商業銀行(支店)」	明治十二年四月	二、〇〇〇	明治三十四年四月廿三日
同	「九州貯蓄銀行(支店)」	明治二十九年三月	七〇	明治三十四年四月廿三日
堺市	「北村銀行」	明治二十八年四月	三〇	明治三十四年三月廿八日
同	「指吸銀行」	明治二十六年六月	三〇	明治三十四年四月十八日
同	「堺指吸貯蓄銀行」	明治三十二年七月	三〇	明治三十四年四月十九日
同	「大西銀行」	明治十四年五月	三〇	明治三十四年四月十九日
同	「堺貯蓄銀行」	明治二十六年六月	五〇	明治三十四年四月十九日
同	「平野銀行」	明治二十七年七月	五〇	明治三十四年四月十九日
平野	「平野貯蓄銀行」	明治廿七年十一月	三〇	明治三十四年四月十九日
同	「奈良商業銀行」	明治三十二年三月	一〇〇	明治三十四年四月二十日
奈良市	「讃岐銀行」	明治三十三年七月	一五〇	明治三十四年四月十九日
高松市	「北山銀行」	明治二十七年七月	二〇〇	明治三十四年五月廿七日
紀州				

京都市	「鴨東銀行」	明治二十八年六月	五〇〇	明治三十四年五月六日
同	「川東銀行」	明治二十九年六月	一〇〇	明治三十四年五月七日
同	「京都農業銀行」	明治三十年二月	二〇〇	明治三十四年五月七日
京都府下	「川越銀行」	明治二十九年六月	三〇	明治三十四年四月十九日
同	「綾部銀行」	明治十六年三月	五〇	明治三十四年七月六日
江州	「松井銀行」	明治三十一年十月	三〇	明治三十四年五月十六日
伊勢	「山田銀行」	明治二十七年五月	五〇〇	明治三十四年五月二日
同	「度會商工銀行」	明治廿九年十一月	一五〇	明治三十四年五月三日
三河	「豐橋銀行」	明治廿六年十一月	三〇〇	明治三十四年四月廿二日
長崎縣	「諫早銀行」	明治十七年七月	一二〇	明治三十四年四月十八日
熊本縣	「福永銀行」	明治三十年七月	七〇	明治三十四年四月十七日
同	「百五十一銀行」	明治十二年十月	六〇〇	明治三十四年四月廿二日
同	「九州商業銀行」	明治十二年四月	二、〇〇〇	明治三十四年四月廿三日
同	「九州貯蓄銀行」	明治二十九年三月	七〇	明治三十四年四月廿三日

日露戰爭後の破綻

一「百三十銀行」の破綻

明治三十四五年に於ける如上未曾有の銀行界の混亂も、弱小銀行の整理の一段落と、「日本銀行大阪支店」の活動とにより、人心も漸く平靜に歸し、殊に此の混亂のために經濟界の內部に鬱結して居た惡材料も殆ど一掃した形となり、國民の經濟力は勃然として伸張したのであつた。

其後、卽ち三十五年二月十二日に日英同盟は締結せられ、經濟的大動脈には新鮮なる血が溢れんとしたのであるが、これに對して露佛同盟が現れ、次いで勅令第百五十八號を以て例の打壞令などが發布されたので、漸く活躍せんとした經濟界は再び沈衰の域に入りかけたのであつた。

そして明治三十五年から日露戰爭の直前の明治三十七年まで、また明治三十七年から戰後の成金養生時代まで毎年幾多の破綻銀行を出したが、それを一々記述するのは餘りに繁雜なことであり、